

摂関期の立后関係記事

—『小右記』を中心とする古記録部類作成へ向けて—

三橋 正*

はじめに

日本史研究において古記録（日記）は古文書と並んで重要な資料とされている。翻刻やテキストの公開は近年盛んになっているが、その読解は難しく、若手研究者や海外の研究者には容易に使いこなせない現実がある。少なくとも書下し文と註釈が必要となるが、それを作成するには、古記録の相互関係（編年比較）や人物比定が必要で、儀式次第や政務運営を理解するためには、諸資料を関連させる研究が不可欠である。

小右記講読会（代表三橋正）では、『小右記註釈 長元四年』上下（八木書店発売、二〇〇八年）の刊行後、講読会（例会と読直し会）を継続して『小右記』長和年間（一〇一二～一〇一六）の註釈を作成すると共に、平成二十一年度から文部科学省科学研究費補助金（基盤研究

C）による『小右記』註釈と平安時代データベースの作成」の作業を並行して進め、理想的な古記録データベースのあり方を模索してきた。これらの成果の一部は、平成二十一年度における『左経記』講読の内容や、平成二十二年度におけるロンドン大学アジアアフリカ研究学院（SOAS）での『小右記』講読会の報告などと共に、『小右記講読会』のホームページ（<http://saneyori.meisei-u.ac.jp>）にて公開している。将来的には『小右記』『左経記』などの摂関期の古記録に限定されない総合的な古記録データベースを構築しようとしており、そのための理想的なウェブの設計について、概要と具体的な取り組みの成果をまとめておきたい。

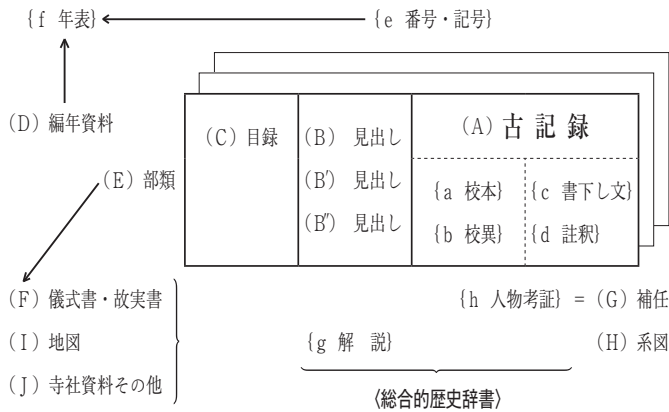
一、古記録データベースの制作理念

『小右記』を中心とした古記録研究により、日記は単に付けられて保存されていたのではなく、筆写されながら活用され続けてきたことに真の意義があったことが明らかになった。それは「古記録文化」と呼べるもので、前近代における日本社会の知の体系を作り出していた。具体的には、古記録（A）を書写する際に見出し（B）を付け、それに基づく目録（C）を活用して、『日本紀略』『本朝世紀』などの編年資料（D）や部類（E）が作成され、さらに諸知識（故実）を集成した儀式書・故実書（F）や人物比定に必要な補任（G）や系図（H）が成立した。近世における内裏図・大内裏図の復元など歴史地図（I）の作成や、神社・寺院などにおける諸資料（J）の集成にもつながった。

現代の研究者もこのような知の体系を理解した上で古記録を活用しなければならぬが、それを正確に読みこなすためには、同時代の複数の

古記録（A）の関連記事について、本文を校本（a）として校異（b）と共に確定し、それに基づく書下し文（c）と註釈（d）を作成するだけでなく、見出し（B）を活用しながら番号・記号（e）を付けて整理し、それを編年資料（D）との関係で年表（f）にまとめ、政務・儀式・事件などについては部類（E）・儀式書（F）などを用いた解説（g）を書き、官職によって示される登場人物は補任（G）や系図（H）との関係を人物考証（h）で明らかにし、建物などの場所については地図（I）上に位置付けるなどの作業が必要になる。

〈古記録を中心とした日本史資料データベースの概念図〉



二、部類的読解の意義

最も重要なことは、それぞれの古記録が書写・活用されていた時代のあり方をも復元しながら、本文を読解していくことである。そのために、多くの古記録の写本に付けられた「首書」をデータベースに活用し（その無い部分は補って）、それを見出しとした部類を再構成する方法を採用する。例えば、『小右記』には自筆本がなく、写本のみ残されているが、それは中世以降においても『小右記』の記載が政務・儀式の参考に供される必要があったからである。本文に「首書」の形で見出しが付けられているのはそのためであるが、それは現在残されている写本の二つの系統（A系本・B系本）で別のものが付けられており、書写段階、ないしは写本を活用する段階で、内容を理解しながら読まれていたことを裏付ける。そしてA系本の「首書」に基づいて『小記目録』（全二〇巻のうち現存は一八巻）が作成されているように、年中行事・臨時などの項目別に本文記事を検索できるような工夫もなされていたのである。

すなわち、理想的な古記録データベースは、テキストをあるがままに公開するだけでなく、諸本の校合による校本を確定し、それに基づく読み（書下し文）や解釈（註釈または現代語訳）を提示し、背景にある研究成果をも含めて、幅広い人々に活用してもらえらるものでなければならぬ。さらに、一時代に限定されない通時代的に複数の資料を統合できるような研究と普及（教育）を兼ね備えたシステムの構築が求められており、現在、他の古記録の註釈を進めている歴史研究グループと情報学のコМПЮТЕР情報処理研究グループからなるチームを作り、新たな研究段階へ駒を進めつつある。

これまで『小記目録』は本文の欠落を補う程度にしか利用されていなかったが、これを軸に読解・註釈することで、古記録の真の価値を見出し、「古記録文化」の精神世界を復元することができると思われる。

従来の註釈では、年次ごとに読み進める方法が採られてきた。歴史を復元するという意味で、基本的かつ根幹的な作業である。しかし、政務・儀式の執行に役立てるという「古記録文化」の精神からは、時系列に従うのとは別の、部類的な読み方が不可欠である。それは、同一項目については、異なる年次の記事も並行して読んで註釈を施すということである。これによって、次第など儀式書との共通点と年次ごとの相違点（問題点）が明確になり、より当時の関心に即した正確な読み方ができるだけでなく、書写の誤りや本文・目録の欠落部分なども容易に見出せるようになる。

最終的には、ウェブ上でそれらをわかりやすく示すことができるシステムを構築したいと考えているが、ここでは紙面の限界があるものの、「立后」の項目をサンプルとして取り上げて、その関連記事を「首書」と共に掲載する。

三、摂関期の立后記事

「立后」とは、皇后を宣命によって定めることで、「きさきだち」「皇后冊立」ともいう。『小右記』には四つの事例に関する記事があるが、現存する『小記目録』にその項目はない。『小記目録』全二〇巻の構成は、第一〜七が年中行事、第八が神事、第九〜一〇が仏事、第十一〜二〇が臨時であるので、欠損した第一三「臨時三」に「行幸（諸社行幸を除く）」「行啓」「入内」「親王宣下」「改元」「立太子」「辞太子」などと

共に載録されていたと考えられる。また、同じく欠損した第一一「臨時一」には、「讓位」「即位」「大嘗祭」「一代一度大神宝使（五畿七道奉幣使）」「一代一度仁王会」「一代一度仏舍利」などの天皇代替わりの事項がまとめられていたと考えられるが、『小記目録』の復元と本文記事との詳細な対比と考察については後日を期したい。

ここでは『小右記』にある四つと同時代の他の二つの計六つの事例について、『権記』『御堂関白記』『左経記』、さらに『日本紀略』『本朝世紀』などの同時代史料と並置させる形式で、日付に従って史料ごとに番号①②③を振って、書下し文を掲載した。ウェブ上の古記録データベースとも連動できるように、古記録については内容に即して段落分けをした上で「首書（見出し）」を付けた。『大日本史料』『皇室制度史料』などでは同日条の関連しない記事を省略しているが、ここでは古記録の真の価値を損なわないように、敢えて同日条全文を掲げ、関連する部分の「首書」を各史料の番号の下に記号（*1、▼aなど）で示した。これにより、既存史料集の編纂ミスなどが明らかになった部分もある【事例1】⑤注1参照）。

書下し文や「首書」記号は『小右記註釈 長元四年』に準拠しているが、読者の便宜のために改めた部分がある。書下し文の元となる校本（原文）については、できるだけ多くの写本・活字本を参照して作成したが、紙面の都合で割愛し、従来と異なる校訂上の変更をした部分のみ、各史料ごとに注記（注1）（注2）…を施した。「首書」記号については以下の通りで、いずれも底本にあるものについては記事順に番号を、底本になく追加記号を付けたものについては記事順にアルファベットを付した。

『小右記』（藤原実資の日記）

*…長元四年条の底本（伏見宮本）と同じB系本の写本にあるもの。

+…尊経閣文庫（前田家）本などA系本の写本にあるもの。

▼…底本に首書が無く、新たに見出しを作成したもの。

◆…底本になく『小記目録』に記事があるもの。番号は編目順。

★…逸文。

・追加記号のアルファベットは小文字

『御堂関白記』（藤原道長の日記）

※…底本にあるもの。

▲…底本に首書が無く、新たに見出しを作成したもの。

・追加記号のアルファベットは大文字

『権記』（藤原行成の日記）

△…底本に首書が無く、新たに見出しを作成したもの。

☆…逸文。

・追加記号のアルファベットは大文字

『左経記』（源経頼の日記）

※…底本にあるもの。

▽…底本に首書が無く、新たに見出しを作成したもの。

◇…底本に本文がなく、巻頭の目録だけに項目があるもの。

☆…逸文。

・追加記号のアルファベットは小文字

四、事例解説

【事例1】は、天元五年（九八二）三月十一日（⑭⑮）に立后された

藤原遵子（九五七〜一〇一七）の記事である。遵子は、時の関白・太政大臣で「殿下」と呼ばれていた藤原頼忠の一女で、母の敵子女王は中務卿代明親王の女であった。天元元年（九七八）四月十日、二〇歳を過ぎて円融天皇のもとに入内し、翌月廿二日に女御の宣旨を蒙って「弘徽殿女御」と称されていた。すでに右大臣藤原兼家の女である女御の詮子には同三年に懷仁親王（のちの一条天皇）が生まれていたにもかかわらず、遵子は親王がいないのに皇后（中宮）になったので「素腹の后」と呼ばれた（『栄花物語』二・花山たづぬる中納言）。しかし、父頼忠の存在は大きく、その甥で蔵人頭を勤めていた藤原実資の日記『小右記』からは、立后をめぐる天皇との水面下の遣り取り（①▼a④▼a）や準備（⑥▼b⑬▼a⑤c）、左大臣源雅信を内弁（上卿、儀式進行の責任者）として行なわれた当日の儀式（⑭⑮）、その後の慶賀（⑯▼a⑱▼b）などについて、細かな様相が伝わってくる。実資自身も、同じ小野宮一門から皇后が生まれるということと重要な役割を果たし、中宮職の設置に際しては亮に任じられている（⑭▼ch）。

【事例2】は、正暦元年（九九〇）十月五日（⑤⑥⑦）に立后された藤原定子（九七六〜一〇〇〇）の記事である。定子は、同年五月に摂政となった藤原道隆の女で、母は高階貴子であった。同年正月に入内、翌月に女御となり、従四位下に叙された。十月に皇后（中宮）となるが、既に太皇太后昌子内親王（冷泉天皇皇后）、皇太后藤原詮子（円融天皇女御・一条天皇母）、皇后藤原遵子がいて、遵子を皇太后に転上できなかったため、遵子の中宮職を皇后宮職に改めて、定子に中宮職を付置した（⑦）。これにより二皇后並立の新例が開かれ、以後、先立の皇后には皇后宮職を、新立の皇后には中宮職を付置するのが常例となった。その時に参議になっていた藤原実資は、定子立后の報を聞いて「驚奇する

こと少なからず」(①▼b)と記し、さらに道隆の息(定子の兄)伊周の求めに応じて、遵子立後の儀式の日記【事例1】(⑭)を使の弓削以言に書写させて送ったことを記した後で「皇后四人の例、往古聞かざる事也」と驚きを示している(②▼a)。しかし、まさに全盛期を迎えていた中関白家に対し、小野宮家の劣勢は覆うべくもなく(前年六月に頼忠も薨去)、道隆に御慶を申しに行ったにもかかわらず、実資は会ってもらえなかった(③▼a)。儀式を日記に書き留めた時の気持ちは想像するに余りあるが、饗宴を同年五月に薨じた兼家(道隆の父)の喪家で催したこと(⑤▼d)、内弁を勤めた大納言藤原朝光の失態(⑤▼f)を批判するのが精一杯であった。なお、長徳元年(九九五)には定子の妹である原子が東宮居貞親王(のちの三条天皇)に入侍するなど、後宮は中関白家の栄華に彩られ、その有様が定子に仕えた清少納言の『枕草子』に描かれている。しかし、同年四月に道隆が薨じ、翌年の長徳の変で中関白家の凋落が決定的となった時に、定子は出家した。一条天皇との間に脩子内親王を儲けたのはその年の十二月であり、長保元年(九九九)に敦康親王を儲けるも、翌二年に脩子内親王を出産した翌日に崩御した。

【事例3】は、長保二年(一〇〇〇)二月廿五日(⑭⑮⑯)に立后された藤原彰子(九八八―一〇七四)の記事である。彰子は、時の左大臣で内覧の宣旨を受けていた藤原道長の長女で、母は源雅信女の倫子である。道長は、一条天皇朝での自らの地位を確固たるものにするため、一二歳で女子の成人儀式にあたる着裳をしたばかりの彰子を、長保元年(九九九)十一月一日に入内させ、七日に女御とした。その彰子の入内に際して、道長が調度として作成中の屏風に貼る和歌を人々に依頼し、実資が公卿としてただ一人詠進せず、日記に花山法皇までが御製を詠進

したことなどを批判していることは有名である(『小右記』長保元年十月廿八日条)。翌二年の立后に到る経緯については、一条天皇の蔵人頭を勤めていた藤原行成の日記『権記』(①④・⑥⑧⑪⑬)に詳細に記されている。中宮に定子がいることにより躊躇を示す天皇と、早く実現させたい東三条院(詮子、一条天皇母で道長姉)・道長との間を行成が奔走し、正月廿八日に兼宣旨(兼ねて決定を伝えて任命の日時を勘申させる宣旨)が下った(⑤▲A・⑥▲A)。その間に道長から「汝の恩の至也」(①△C)と言われるほどの働きをした行成も感慨深かったようで、当時の藤原氏の皇后(詮子・遵子・定子)が皆出家して氏祭の勤め(奉幣や大原野祭での饗宴など)を果たさずに「神事違例」が続いている現状を指摘し、二后並立となっても「神事」を優先させなければならぬ「神国」の朝廷に彰子の立后は必要であるとして、天皇を説得させたことも記されている(⑥△B)。その後の準備はもちろん、立后当日についても、道長の『御堂関白記』(⑭▲A①C)以上に『権記』(⑮)の記載が詳細であり、土御門第で冊命の勅使についての指示を出す道長の様子(△B)、里内裏(一条院)の設営(△C)、右大臣藤原顕光を内弁としてなされた立後の儀式(△D①G)、本宮(土御門殿)の設営や儀式(△H①K)、そして最後に三后の職の変更を総括し、宣命使の作法をコメントするなど(△K)、細かな遣り取りもわかるように記されている。彰子に仕えた女房に紫式部がおり、寛弘五年(一〇〇八)に敦成親王(のちの後一条天皇)が生まれた時の様子を『紫式部日記』に書いている。彰子はまた、翌年に敦良親王(のちの後朱雀天皇)を儲け、道長の栄華を支えた。一条天皇の崩御により皇太后、三条天皇の譲位により太皇太后となるが、後一条天皇(および後朱雀天皇)の国母であり、万寿三年(一〇二六)に三九歳で出家しても上東門院の称号

を受け、女院として天皇家・摂関家の要であった。道長没後にも文化を牽引していたことは、『小右記』長元四年条などからもわかる。

【事例4】と【事例5】は、三条天皇の二人の皇后の立后関係記事である。三条天皇（九七六～一〇一七）は二十五年に及ぶ東宮生活の後、寛弘八年（一〇一一）に三六歳で即位した。既に数人の配偶者があったが、その一人が正暦二年（九九一）に東宮妃となった故大納言藤原済時の娘城子（城子とも）であり、もう一人が寛弘元年（一〇〇四）に尚侍となった藤原道長の二女妍子（彰子の同母妹）であった。（城子の先に摂政藤原兼家女綏子と関白藤原道隆女原子がいたが、綏子は密通によって退き、原子も頓死した。）二人は同年八月廿三日、同時に女御となるが、翌二年二月、子供のいない妍子が先に中宮になり、皇子皇女を生んでいた城子の立后は二ヶ月後であった。父親の力がものをいう摂関期を象徴しているが、二人の立后には単なる時間的な先後という以上に大きな違いがあった。

【事例4】は、長和元年（一〇一二）二月十四日（⑧⑨）に立后された藤原妍子（九九四～一〇二七）の記事である。この時には藤原行成が宣命使を勤めているが（⑧▲B）、『権記』は残されていない。『小右記』もこの年の春（正月～三月）の記事を欠いているが、実資は父藤原齊敏の忌日に当たって当日に参入していないから【事例5】⑥▼J、記事があったとしても詳細ではなかったと想像される。古記録史料としては父道長の『御堂関白記』のみであるが、この頃には道長も日記を付ける習慣を身につけ、自分の子供の重要な儀式については長い記事を残している。特徴的なのは、兼宣旨を受けて妍子が内裏から退去した東三条第での記載で、正月三日条（①）では全参加者を記している（▲C）。立后当日の二月十四日条（⑧）に、内裏での宣命宣制・宮司除目の記載が

あるが（▲BC）、裏書にその倍以上を費やして本宮（土御門第）での拝礼・饗宴・穩座・賜祿・勅使のことを記している（▲D～F）。また、翌日・翌々日の饗宴（⑩▲A・⑪▲A）、啓陣の諸衛への賜祿（⑫▲B）、興福寺・仁和寺・延暦寺の僧の慶賀（⑬▲A・⑭▲D）へと続く。妍子は、道長によって「后がね」として育てられ、東宮居貞親王（のちの三条天皇）のもとに入る時も優秀な女房がたくさん集められたという『栄花物語』八・はつはな）。立後の翌年七月に禎子内親王を出産した時、道長が皇子でないことに不快感を示したというが（『小右記』十二日条）、それでも多くの女房が集められた（『栄花物語』一一・つぼみ花）。姉妹の中で最も派手で、万寿二年（一〇二五）に皇太后として枇杷殿で開催した大饗での女房たちの華美は、関白である兄頼通から注意されるほどであった（『同』二四・わかばえ）。同四年九月十四日に出家・崩御するが、臨終に立ち会った道長は娘より長生きさせた仏への恨み言を口にしたという（『同』二九・たまのかざり）。

【事例5】は、長和元年四月廿七日（⑥⑧）に立后された藤原城子（九七二～一〇二五）の記事である。父済時は、長徳元年（九九五）に五五歳で薨去、時に正二位大納言兼左大将であったが、立後の日に右大臣を追贈された。母は源延光女である。皇后となる前、正暦五年（九九四）に敦明親王（後の小一条院）を儲け、三条天皇の寵愛を受けていた。それにもかかわらず、妍子の立后が先になった理由は、道長の意向以外に考えられない。しかも立後の当日には、東三条第に下がっていた妍子の入内も時刻をずらして計画されたのである（②▼C）。実資は、小一条家によって進められる立后に必ずしも快く思っていなかったようで、城子の兄である通任から立后の雑事を尋ねられ、遵子立后の日記記事【事例1】⑭を抄出するよう依頼されたことについて、「事多く、鬱

「有り」と記している(③▼c)。前日の廿六日に、妍子の入内に対しては糸毛車(⑤▼a)、城子の饗宴に対しては唐瓶子や龍鬚筵を(⑤▼c)、それぞれの求めに応じて送っている。また、廿七日には藤原公任が娘と道長の息教通を結婚させる婿取の儀もあり(⑦▲G)、実資は前日に綾の表衣と下襲(⑤▼b)、当日に女装束を送っている(⑥▼c)。前日に妍子の入内(行啓)に供奉すべきという通達があったが(⑤▼a)、実資は返事をしていないので、体調不良もあって、どちらへも行かないつもりであったのかも知れない。当日の『小右記』廿七日条(⑥)は、立後の記事がほとんどで(+4▼bc以外)、しかも読むのが大変なぐらいに長い。当日になって大臣が三人とも来ないから権大納言の実資も参内せよとの命が伝えられ、公卿が道長の恩惑を恐れて誰も立後の儀に出ないことを察知し、「天に二日無く、土に二主無し」だから恐れることはない^とと決心して、病をおして行くことにした(▼a)。未一点(午後一時半頃)に参内してその旨を伝え(+1)、初めて正式に内弁を仰せつかったのであるが、その勅命の伝え方についての頭弁藤原朝経との遣り取りにも緊張感が漂う(▼e)。諸司・諸衛を召仰して、立後の宣命を作成することになるが(▼f)、草(下書き)を内覧である左大臣道長に届けても、妨害にあつて使がなかなか戻ってこない(▼g)、例文通りに作ったにもかかわらず、再三にわたり訂正が求められた(▼h)。やっと宣命を清書し(▼i)、宣制の儀へと進むが、他に参内した公卿は藤原隆家・懷平・通任の三人だけで、諸大夫は一人もいなかった(▼j)。後で聞いた話として、公卿たちの集まる東三条第に召使を送り参内を促したが、その召使が嘲笑されたということも記されている(▼r)。その後、気分が悪くなつても、漿水(おみず、おゆ、または粟米飯を水に漬けて発酵させた飲料)を飲んで回復させ、御前での除目

を終わらせて清書させた(▼k)。次の啓陣の儀では、近衛府の次將と衛門府・兵衛府の佐が一人もおらず、ただ外記に命じることしかできなかった(+2)。本宮(皇后亮藤原為任の堀河第)における拝礼・饗なども寂しいもので(▼m/p)、本来は内裏から届けられるはずの大床子と師子形が道長の妨害で届けられず、本宮(城子)が準備したという(+3)。様々な嫌がらせを受けながらも何とか儀式を終了させたが、朝儀の乱れと皇威の失墜を嘆かないわけにはいかなかった。翌廿八日条(⑨)に、城子から満悦の仰せが伝えられたが(▼a)、参内して中宮妍子のいる飛香舎に行つて道長をはじめとする公卿たちが集まっている光景を目にし、前日の城子立後の儀と比較して、「弥、王道弱く、臣威強きを知る。嗟乎々々」と記している(▼b)。けれども、困難な状況下における急な命令にもかかわらず、儀式を滞りなく執り行なった実資の力量は特筆すべきで、これによって天皇の絶対的な信頼を得たこととはもちろん(⑨▼e・⑩▼b・⑪▼a)、その存在を誇示できたのである。道長一家の全盛期にあつても、自らの活路を見出したと感じたのであろう。除目の最中に出てきた蜈蚣(ムカデ)について陰陽師だけでなく儒者の大江匡衡にも意見を聞き、「天子の慶福」(⑬+1▼a)や「天口」「三公」(⑭+1)と関連させて十二月頃に大臣への出世が期待できるという解釈を書き留めている。

【事例6】は、寛仁二年(一〇一八)十月十六日(⑩⑪⑫⑬)に立后された藤原威成(九九九―一〇三六)の記事である。長和元年(一〇一二)に一四歳で尚侍、寛仁元年に御匣殿別当となり、同二年三月七日に二〇歳で九歳年下の後一条天皇のもとへ入内、同年四月に女御、十月に中宮となった。道長にとっては孫と娘の結婚であり、同母姉の彰子(太皇太后)・妍子(皇太后)と合わせて「一家三后」という未だ曾てない

栄光を手に入れることになった(⑥+1)。威子立後のことは、七月廿八日(①)に道長と彰子と摂政頼通の三者で話し合われ(▲A)、日時まで決められたように(▲C)、まさに一家の中ですべてが進められていたから、前々のような天皇と外戚の間の緊張感はなく、十月五日の立后兼宣旨(②▲B・③・④+2)以降の諸儀式も形式的に遂行されていた。立后当日については、やはり『小右記』(⑩)の記載が優れており、儀式の進行に従ってイレギュラー(変則的)な点を逐一指摘しながら記している。最も注目される点は、内弁であった左大臣顕光について、参内が遅れて混乱があったこと(▼a)、宣命宣制で「トネ召せ」と言うべきところを「マウチキミタチ召せ」と言って道長を驚かせたこと(▼c)、(除目の場で予告なく取り上げた少進の人事が認められず)本宮へ行かないと言っていたのに結局は参入したこと(▼f)、などの失態が挙げられていることである。他にも、宣命宣制では、宣命使藤原実成の父である右大臣公季が拝礼の列から外れたこと(+3)、実資以下の公卿が外弁(承明門外)から入って南庭に列立する際に少納言藤原惟光が一人ひとりに揖したこと(▼b)、宣制後の宣命使の本列への戻り方についての両説と、大臣の退出経路の誤りが指摘されている(▼c)。除目では、時間短縮のために道長の命で摂政の前で清書し(+4)、大夫藤原齊信と権大夫藤原能信が奏慶のために射場へ向かう際に昇殿の人なのに南殿を経由しなかったことも書かれている(▼d)。本宮(土御門第)の儀では、啓陣で内弁が命じる詞と左兵衛佐藤原惟任の剣の違例(▼e)、先に参入していた大夫・権大夫も拝礼で列に加わること(▼g)が述べられている。いずれも単なる記録や知識という域に留まらない、後世にも維持されるべき理想的な儀式を描き出そうという強い意志の表出としてとらえるべきであろう。そして有名な本宮での饗宴の

場面となり、正式の勸盃後に席を改めて酒宴・奏楽・演舞などの興を催す穩座で、道長が戯れて酒杯を子の頼通に勧めて欲しいと実資に言い(▼h)、さらに皇后となった娘の妍子から父親である自分も禄をもらってご満悦になり、実資に返歌を約束させた上で「この世をばわが世とぞ思ふ望月のかけたることもなしと思へば」の歌を詠んだことが記されている(+5)。『左経記』(⑫)は、最初の部分を欠くものの、紫宸殿の設営から始まり(▽a)、本宮の饗(▽g)に至るまで儀式を詳細に記録し、御調度の勅使(※2)・彰子の使(▽h)についても、左少弁という立場で知り得たことを書いているが、公卿たちの遣り取りは描かれていない。『御堂関白記』(⑪)も、道長の日記としては長い方であるが、内裏での儀については全体の三分の一程度で、そのほとんどが内弁顕光の失態についてである(▲BD)。自筆本では妍子立後の記事と同様に裏書に書かれていたと考えられるが、本宮(土御門第)の儀に多くの紙面を費やしており(▲F・K)、道長がどちらに力を入れていたかは明白である。それは立后だけの問題ではなかった。直後の廿二日に、後一条天皇と東宮(敦良親王)を土御門第に行幸・行啓させ、道長の子供と孫が一堂に会する中で競馬をすることが予定されており、その準備が立后と並行して進められていた(⑥+12・⑧▼b・⑨▼a・⑭▼a b・⑰+2・⑳▲C)。そして、その土御門行幸の日の条は、立後の条(⑪)より長く、『御堂関白記』の中で最長の記事となっている(『小右記』も立后より多い)。このような時代変化をも勘案し、立后記事を比較検討することもあるであろう。また、威子は後一条天皇にとって唯一の配偶者であった。天皇制や後宮の歴史にとって、大きな転機となったことも付記しておきたい。

五、立後の儀式と古記録

平安時代中期から後期にかけて、所謂摂関政治を主導した摂政・関白は、令制官職機構を超越する存在で、各天皇一代限りに有効な詔勅によって任命された。その地位を得て権力の頂点に立つためには、同じ藤原北家の中でも、天皇との個人的な結びつき、特に外戚関係を持つことが必須であった。人臣最初の摂政となった藤原良房も、道長の父兼家も、その権力の確定に天皇の外祖父となったことが最も重要な要素としてあった。そして、道長はその関係を二重、三重に張りめぐらしたことで摂関全盛期を築き上げた。その間、皇男子の誕生とその即位という不確定な要素に左右されながら、藤原北家一門の兄弟・従兄弟たちは権力をめぐる攻防を繰り返したのである。その勝敗とは必ずしも一致しないが、天皇の正室である皇后になることがいつの時代にも増して重要であり、その儀式は権力を象徴する意味を持っていた。

立後の儀式は平安前期には確立しており、貞観年間（八五九～八七七）に編纂されたと考えられる『儀式』（巻五・立皇后儀）には、前日に式部省から王卿を参列させる命を通達すること、当日に紫宸殿で天皇が出御し、南庭の参列者に対して宣命を読み聞かせること（宣命宣制）、その詞（宣命の文）、後日に拝舞することなどが規定されている。宣命の文章は「内裏式文」によって作られるとも見えるが（【事例1】^⑭▼b）、現存する『内裏式』に立後の項はない。『西宮記』（臨時七・立皇太子任大臣事）では、宣命宣制に続いて、宮司の除目、諸衛の次将による啓陣があり、さらに本宮に移って、王卿らの拝、饗・禄、女官の参仕、神祇官による大殿祭、三日後の啓陣終了の饗・禄、そして奉幣など

が続くことになっている。『北山抄』（巻四・拾遺雑抄下・立后事）は、『内裏儀式』『任官式』『清涼抄』『儀式』『讓国式』や先例などを参照しながらまとめている（「内裏式、不_レ制_二立后等式_一」とある）。『江家次第』（巻一七・立后事）は更に詳しく、本宮の儀についても細かく記しているが、これは摂関家の儀式が充実したことの影響である。

摂関期の実態を知るためには、これらの儀式書を参照しながら、いくつかの場面に分けて古記録の記事を読まなければならない。準備からの主要な儀式の流れと、その関連記事は以下の通りである。

〈準備〉

- ・立後の兼宣旨：天皇と摂関・女院などの間で正式に立后が決定されると、「誰々を以て皇后に立てるので、儀式を行なう準備をし、日時を定めよ」という内容の兼宣旨が発せられる。【事例1】^⑧▼c e、【事例2】^③+1、【事例3】^⑤▲A・^⑥▲A、【事例4】^①▲A・^②▲A、【事例5】^①▲A、【事例6】^②▲B・^③・^④+2。
- ・奏慶：天皇に慶賀を申し上げる。【事例1】^⑧▼d f・^⑭▼e、【事例3】^⑥▲C、【事例4】^①▲A・^②。
- ・日時勘申と奏上：陰陽寮の勘申をもとに日時が決められ、天皇へ伝えられる。【事例1】^⑧▼g・^⑪▼a・^⑫▼a、【事例6】^①▲C・^②▲B・^⑥+4。
- ・雑事定：この前後に準備が進められ、内裏から大床子二脚・師子形などが届けられる。【事例1】^⑧▼g・^⑨▼a・^⑩▼a・^⑪▼b・^⑫▼a・^⑬▼a 【事例2】^④、【事例3】^⑥▲F・^⑧▲A・^⑫▲C・^⑬▲A・^⑭▲A・^⑮▲B E F、【事例4】^④▲A・^⑥▲A・^⑦▲A、【事例5】^④▲C・^⑤▼c、【事例6】^⑥+4・^⑨▼b。

・女御退出…皇后となる女御は宣命を受けるために内裏を出て里第に移る。【事例1】¹³▼b c、【事例3】⁷▲A・⁸△F・⁹・¹⁰▲B・¹¹△E、【事例4】¹▲B▲C・²・³▲A、【事例5】⁶+3、【事例6】²▲A B・³・⁴+3 4・⁵▲A・⁷▲A・¹¹▲H・¹²※2。

〈当日〉

・御装束…紫宸殿・南庭などの設営を行なう。【事例1】¹⁴▼a、【事例2】⁶、【事例3】¹⁵△C、【事例4】⁸▲A、【事例5】⁶+1▼q、【事例6】¹²▼a。

・宣命の草・清書…内弁が内記に宣命の下書きを作成させて天皇に奏上し、許可が出ると清書させて再び奏上する。【事例1】¹⁴▼b、【事例2】⁵▼a、【事例3】¹⁵△D、【事例4】⁸▲B、【事例5】⁶▼f i q・⁷▲E、【事例6】¹⁰▼a+2・¹¹▲C・¹²▼b。

・宣命宣制…天皇が紫宸殿に出御し、南庭に列立した王卿に宣命使が宣命を宣制する。【事例1】¹⁴▼d・¹⁵、【事例2】⁵+1▼b f・⁶・⁷、【事例3】¹⁴▲B・¹⁵△E△K・¹⁶、【事例4】⁸▲B・⁹、【事例5】⁶▼j・⁷▲E・⁸、【事例6】¹⁰+3▼b c・¹¹▲D・¹²▼d・¹³。

・宮司の除目…中宮職の宮司（大夫以下の職員）を定め、奏上する。その後、任命された宮司による奏慶もある。【事例1】¹⁴▼c f h・¹⁵・¹⁶▼a d・¹⁷▼a b、【事例2】⁵▼c・⁷、【事例3】¹⁴▲B・¹⁵△F K・¹⁶、【事例4】⁸▲C・⁹、【事例5】⁶▼k l o q・⁸・¹²▼a・¹³+1▼a・¹⁴+1、【事例6】⁸▼c・¹⁰+4▼d・¹¹▲E・¹²※1・¹³。

・啓陣…近衛府の次将と衛門府・兵衛府の佐が皇后を警護するために陣に着く。【事例1】¹⁴▼g・¹⁵、【事例3】¹⁵△G、【事例4】⁸▲C、【事例5】⁶+2、【事例6】¹⁰+4▼e・¹²▼e。

・本宮の拝礼…王卿は内裏から皇后のいる里第に移動し、拝礼する。【事例1】¹⁴▼i、【事例2】⁵▼d、【事例3】¹⁴▲C・¹⁵△H I J、【事例4】⁸▲D、【事例5】⁶▼m、【事例6】¹⁰▼g・¹¹▲F・¹²▼f。

・本宮の饗…皇后による饗・禄がある。宴座から場所を移し、穩座もある。【事例1】¹⁴▼j、【事例2】⁵▼e、【事例3】¹⁴▲C・¹⁵△J、【事例4】⁸▲E、【事例5】⁶▼n、【事例6】¹⁰▼h+5・¹¹▲G H J・¹²▼g※2。

・冊命の勅使…天皇から皇后へ冊命を伝える使（勅使・中使）が遣わされる。使は禄を受け取る。【事例1】¹⁴▼l、【事例3】¹⁵△B、【事例4】⁸▲F、【事例5】⁶▼p、【事例6】¹¹▲I。

〈後日〉

・本宮の饗…さらに二日間にわたり饗宴がある。【事例1】¹⁶▼a c・¹⁷▼c d、【事例3】¹⁷▲A、【事例4】¹⁰▲A・¹¹▲A、【事例5】⁹▼f、【事例6】¹⁴+1・¹⁵▲A・¹⁶※1・¹⁷※1・¹⁸▼a。

・啓陣終了…解陣し、次将・佐らに饗・禄を給う。【事例1】¹⁷▼c、【事例3】¹⁹△F、【事例4】¹²▲B、【事例6】²⁰▲A。

・慶賀…勸学院の学生、興福寺・延暦寺・法性寺・仁和寺の僧らが慶を啓しに参入する。【事例1】¹⁶▼b・¹⁸▼b、【事例3】¹⁷▲C・¹⁸△B・²⁰▲A、【事例4】¹³▲A・¹⁴▲D・¹⁵、【事例5】¹²+1、【事例6】¹⁹+1・²⁰▲B・²¹・²²▼a・²³+1。

古記録（日記）は、それぞれの記主の立場により異なる視点から同一の儀礼を記録している。よって、これらを場面ごとに比較しながら読むことで、儀式書だけでは再現できない儀式の詳細が明らかになるだけでなく、各事例の特殊性も浮かび上がってくる。古記録史料の最大の特色は、単なる儀式の復元に留まらず、その社会的な意味が明確になることである。

そのような観点で以下の史料を通覧すると、摂関期においては『小右記』の記事が圧倒的な存在感を示していることがわかる。天元五年の遵子立后記事（事例1）^⑭などは、古記録として残された最古の立后記事であるだけでなく、定子立后（事例2）^②と城子立后（事例5）^③の時に、それぞれ中関白家・小一条家の求めに応じて抄出・送付されている。実資は儀式に精通する重鎮として尊敬され、『小右記』の記事も規範として貴族社会全体に活用されていた。その自負が、単に日記を書き続けるだけでなく、より正確でより詳細に記録しようとして長い記事へと発展させていく原動力になっていたことは間違いない。また、正しい儀式をシミュレートしながら日記を付ける習慣を身につけていたからこそ、城子立后（事例5）^⑥において急な指名で、しかも道長による種々の妨害があったにもかかわらず、権大納言の実資が内弁の大役を無事に果たすことができたのである。

『小右記』の記載が時代によって変化していることも勘案して読まなければならない。定子立后記事（事例2）^⑤までは、批判点・疑問点は注記されているものの、必要事項を要領よくまとめる程度の記載であった（第一期）。しかし城子立后記事は、小野宮流の筆頭公卿という立場もあって、道長への批判が多く、鬱憤を書き留めていたことも一日の記載を長くする要因であった（第二期）。そして後一條天皇朝におい

て、威子立后記事（事例6）^⑩のような、儀式の理想の姿を後世に示す緻密な記載となった（第三期）。その後、実資は重要な儀式の内弁・上卿を多く任される朝儀の執行者としての地位を確立し、八〇歳を越えてからは儀式の監督者となって（第四期）、膨大な記録を残すことになった。ここに『小右記』の真の価値があり、その日記のあり方は後世の規範ともなったのである。

『御堂関白記』にも記主道長による記述の差違（発展）があり、『権記』から『左経記』（記主源経頼は『権記』の記主行成の娘婿）へと展開することも考慮しなければならない。これらの立后記事は摂関期の研究や概説に不可欠であり、これまでもよく取り上げられている。しかし、改めて整理し、記主の立場や書振りの違いを意識して読み直すことで、新たな発見が得られると期待される。

おわりに

理想的な古記録データベースを追求していった結果、部類的な読解が必要との認識にいたり、その一例として立后関係記事をまとめた。さらに、詳しい註釈や人物・役職（官職・身分）・場所（地図）と関連させた考証を作成しなければならぬし、それをウェブ上で展開させるようにするには、研究面だけでなく、技術面での検証を積み上げなければならない。完成にはこれからも多くの時間を費やさなければならないが、少しずつ成果を公表しながら、前進していきたいと思う。

最後に、書下し文の作成や考証について、東海林亜矢子・八馬朱代・村上史郎・山岸健二の各氏にご協力いただいたこと、また小右記講読会の成果を利用させていただいたことを記し、謝辞に代えさせていただく。

【事例1】 天元五年（九八二）藤原遵子中宮立后

①『小右記』 天元五年二月廿三日条（▼a）

▼a 「女御（＝藤原遵子）の立后の御気色有る事」

▼b 「彈正 忠 近光（＝源カ）、寄物の事に依り、藤宰相（＝佐理）に召候ぜらるる事」

▼c 「内の御物忌に参籠する事」

▼d 「伊予国、賊首能原兼信等の追討の解文を言上する事」

廿三日。丙戌。

▼a

四条殿（＝藤原頼忠）に参る。殿下（々々）（＝頼忠）、式（＝職御曹司）に参らる。即ち御共に候ず。皇后の事、御気色有るの由、密々（×蜜云々）に仰せらるる事有り。是、去る廿日、少将命婦（×婦）（＝良峯美子）告ぐる所なり。仍りて祿を与ふと云々。是、又、慥かな仰に非ざれば、尤も私藏すべし。

▼b

彈正 忠 近光（＝源カ）、去る十八日より、寄物の事に依り、藤宰相（＝佐理）の御許に召候ぜらる。兩三度、消息を奉ると雖も、已に以て答無し。仍りて此の由を殿下に申す。即ち御消息を遣はさる。彼の宰相、驚き乍ら参入すと云々。即ち之を免すと云々。人々云はく「尤も奇しむべき事也。法官を召候ぜらるるの事、往古来今、未だ聞かざる事也。」

▼c

入夜、内の御物忌に参籠す。

▼d

戌時許、伊予国より、賊首能原兼信及び他の賊等十五の追討の解文を言上す。

②『小右記』 天元五年二月廿五日条（▼g）

▼a 「直物の日時的事」

▼b 「周防守（＝藤原義雅）・筑後守（＝藤原文信）、今年を以て、初任と為す事」

▼c 「受領の任符の請印の事」

▼d 「石清水臨時祭の調衆始」

▼e 「釈奠の酢を献る事」

▼f 「源中納言（＝保光）の外孫（＝藤原行成カ）の元服」

▼g 「少将乳母（＝良峯美子）、御気色有るの由、密々に相談する事」

廿五日。戊子。

▼a

参内す。左大臣（＝源雅信）参入せらる。奏せられて云はく「来たる廿七・八日の兩日の間、直物を行なふは如何。」者り。仰せられて云はく「廿七日は御衰日。八日（＝廿八日）は大原野祭の儀（×穢）、廃務に非ずと雖も、便宜無かるべし。来月三ヶ日を過ごして行なふべし。」者り。

▼b

周防守義雅（＝藤原）申請す。「今年を以て、初任と為さむ。」者り。「去年十二月廿七日任。」「装束の行程、明年に及ぶ。請に依れ。」筑後守文信（＝藤原）申請す。「今年を以て、初任と為さむ。」者り。「去年十月十七日任。」「装束の行程、誠は明年に及ばずと雖も、間裁許の例有り。仍りて殊に免し給へ。」者り。件の申文二通、左大臣に下し給ふ。

▼c

仰せられて云はく「々々」受領の任符（×府）、未だ請印せざれば、今

▼d

月の内に請印すべし。」者り。今日、石清水臨時祭の調衆始。件の祭、平安に遂げらるべきの由、

▼e

彼の宮の別当（＝聖清）の許に仰遣はす。大学助有家（＝藤原）、昨日の釈奠の酢を献る。内蔵寮、祿を献ら

ず。仍りて給はず。即ち藏人恒昌（＝平、御前に持参す。先是、孝忠（＝藤原、御前に於いて問ひて云はく「何物。」者り。答へて云はく「大学寮より（×■）、胙を献る。」者り。「須く称唯し、物の名を奏すべし。失也。」

▼f 今日、源中納言（＝保光）の外孫、〔故右近少将義孝（＝藤原）の息（＝藤原行成カ）〕桃園家に於いて、元服を加ふと云々。消息有りと雖も向かはず。

▼g 候宿す。御事、已（×也）に御気色有るの由、少将乳母（＝良峯美子）、密々に相談す。感悦の賜、一時千廻なり。

③『小右記』天元五年二月廿六日条（▼a）

▼a 「去夜、英俊（＝良峯）の母（＝美子）と相談する事」

▼b 「室町（＝藤原齐敏の女、実資の姉）に詣づる事」

廿六日。己丑。

▼a 早朝、私に退く。去夜、承香殿に於いて、英俊（＝良峯）の母（＝美子）に相逢ふ。聊か相談する事有り。

▼b 室町（＝藤原齐敏の女、実資の姉）に詣づ。

④『小右記』天元五年二月廿九日条（▼a）

▼a 「少将乳母（＝美子）、綸旨を太相府（＝頼忠）に伝ふる事」

▼b 「検非違使の職掌を勤めしむる事」

廿九日。壬辰。

▼a 今明、殿上の物忌なり。仍りて参内せず。太相府（＝頼忠）より召有り。仍りて式（＝職御曹司）に参る。仰せられて云はく「昨夕、少将乳母（＝美子）、綸旨の命を伝へて云はく『皇后の事、暫く秘隠すべし。』

但し、事儲に至りては、用意すべし。』者り。来月五日、雑事を定むべし。』者り。秉燭、罷出づ。

▼b 都督（＝菅原輔正）云はく「彼の事、已に許容（×、容）有り。」者り。（注1）▼bの「彼事」は、廿八日条の検非違使の職掌のことで、立后に関係しない。

⑤『小右記』天元五年三月一日条（参考）

▼a 「日食、曆に叶ふ事」

▼b 「殿下（＝頼忠）の命に依り、女装束一襲を奉仕する事」

▼c 「室町に詣づる事」

一日。癸巳。（日食十五分の七。虧初辰三刻一分、加時已一刻二分、復末已三刻三分。）

▼a 日食、曆に叶ふ。

▼b 女装束一襲、殿下（＝頼忠）の命に依りて奉仕せしむ。彼（×被）の御経営（×堂）の間、然るべきの用に依り、他の人等奉仕す。

▼c 晚景、室町に詣づ。

（注1）本条を大日本史料は「十一日、癸卯、女御従四位上藤原遵子ヲ立テ、皇后ト為シ、中宮ト称ス」という立后関係の記事として引くが、▼bの「女装束」は、翌二日から行なわれる頼忠第の御読経料と考えられ、本条に関係記事はない。

⑥『小右記』天元五年三月二日条（▼b）

▼a 「殿（＝頼忠）の御読経始」

▼b 「立后の用意を致すべきの由を奏聞する事」

二日。甲午。

▼a 早朝、殿（＝頼忠）に参る。御読経始也。新造の寝殿に於いて、之を修せらる。

▼^b 午時許より、雨、太^{はなは}だ降る。入夜、参内す。此の間、甚雨暴風。内の候宿。殿下命ぜられて云はく「後の事、大略、少将乳母（＝美子）の告ぐる旨、事疑^{ひね}有るべきに非ず。然而、慥かな仰を承はらむと欲す又、秘すべきの由、仰事有り。若し事儲有らば、必ず諸人の聴に及ぶ歟。一定を承はり、用意を致すべきの由、奏聞すべし。」者^てり。

⑦『小右記』天元五年三月三日条（▼^a）

*1「御燈」

▼^a 「立後の事儲を用意すべきを仰せられる事」

▼^b 「円融寺行幸の日時勘申並びに饗禄を儲けしむる事」

▼^c 「季御読経の日時を勘奏し、仁王会・御祭等を奉仕せしめむとする事」

▼^d 「後院に納むる舞装束を円融寺に施入せしむる事」

*1 三日。乙未。

早朝、御湯殿に供ず。御禊の事有り。御燈を奉られず。其の儀、例の如し。御物忌と雖も、仰に依り、恒の如く、御座を供ず。「御簾の前。」宮主（×）、穢に依り、御物忌に籠候ぜず。（依仰如恒供御座 仍りて占部尹忠を以て、御禊に奉仕せしむ。禊（々）了り、魚物を供ず。

▼^a 後の事、奏聞す。仰せられて云はく「其の期に至り、追ひて以て仰すべし。事の儲に於いては、早く用意すべし。但し、暫く披露すべからず。」者^り。

▼^b 仰せて云はく「円融寺行幸の日時並びに御出の門等、大納言重信（＝源 勘申せしむべき歟。御諷誦の布、及び御寺別当並びに三綱等の祿、儲候ふべし。公卿以下侍従・殿上人・藏人所等の饗、所司に仰せて奉仕せしむべし。諸司・諸衛は、本司・本府奉仕せしむべし。」

者^り。

▼^c 仰せて云はく「季御読経の日時、勘奏せしむべし。又、仁王会、若しくは行なふべき歟。世間静かならず、尤も慎御すべし。又、色々の御祭等、奉仕せしむるは如何。其の由、太相府（＝頼忠）に仰すべし。」者^り。

▼^d 「後院に納むるの舞装束、円融寺に施入せしむるは如何。」者^り。

⑧『小右記』天元五年三月五日条（▼^c、▼^f、▼^g）

▼^a 「仁王経・転読」

▼^b 「太相国（＝頼忠）の御読経結願」

▼^c 「立後の日を奏すべきの仰有る事」

▼^d 「太相府の奏慶」

▼^e 「立後の兼宣旨」

▼^f 「公卿等の慶賀」

*1 「大式、解由を得べき事」

▼^g 「立後の雑事定」

五日。丁酉。

▼^a 今日より三ヶ日を限り、寿慶・慶円（々円）・尊延等を以て、仁王経を転ぜしむ。

▼^b 早朝、太相国（＝頼忠）に参る。今日、御読経結願也。

▼^c 殿下（＝頼忠）命ぜられて云はく「皇后の事、未だ其の日を承はらず。今日は吉日なり。若し然るべくは、慥かな仰を蒙らしめ、皇后を立つべきの日を定申せ。此の如きの事、若し延事（×廻事）に及ばば、定めて成り難き歟。之を以て思を為す。早く参内し、此の旨を以て洩奏すべし。」者^り。参内し、此の趣を奏（奏×）す。仰せられて云はく「事、

既に一定す。早く立后の日を奏すべし。」者り。式（＝職御曹司）に参り、（殿下、式に参らる。」此の由を申す。即ち朝服を着し給ふ。御前に召し、親ら祿を執給ふ。〔女装束一襲。織物の祿を加ふ。〕

▼^d 奏せられて云はく「年来、頻りに朝恩を蒙り、已に高位に登る。日夕の思、朝恩、報い難し。重ねて今日に及び、更に此の仰を戴く。感悦の深、為す所を知らず。朝恩、身に余り、前後不覚なり。」者り。祿を給はりて纏頭し、庭中に下りて再拜す。（此の間、大相府、射場殿より下りて坐す。）内に帰参し、此の由を奏す。即ち太相府、射場殿に参り、余を以て、慶の由を奏せらる。聞食すの由を仰せらる。剣を着し、綸旨を伝ふ。舞踏し了り、殿上に参上す。仰せらるる趣、前の如し。仰せられて云はく「須く御前に召し、此の由を仰すべし。而るに乱るる間、御前に召すこと能はず。」者り。太相府、退下す。

▼^e 仰せられて云はく「弘徽殿息所（＝藤原遵子）を以て、皇后に立て給ふべし。供奉の所司に、且は誠仰すべきの由、左大臣（＝雅信）に仰すべし。冊命の日に至りては、追ひて仰すべし。」者り。左大臣、直物の事に依り、左仗に候す。即ち綸旨を以て仰せ了りぬ。

▼^f 陣に候する公卿等、弘徽殿に参り、皇后の慶を申さる。

＊¹ 仰せて云はく「皇太后宮（太々）（＝昌子内親王）より、頻りに奏せられて云はく『前大式藤原朝臣（国章）を以て、権大夫に任ずべきの由を請ふ。』若しくは直物の次に許すべき歟。又、大式輔正朝臣（＝菅原）の申文、（兼式部権大輔・民部権大輔。）修理亮博古（＝藤原）、帯ぶる所の職を以て備中介桶輔政に相替する申文、石清水宮、造作料に伊勢介を申請する奏状、常陸介満仲（＝源）、旧の如く馬権頭を兼任する事、件等の事、太相府定申すべし。」者り。

奏せられて云はく「前大式藤原朝臣、未だ解由を得ず。然而、大式、

未だ解由を得ざる間の給官の例、問、其の例（×、）有り。下勘へられて許さるべき歟。」者り。「輔正朝臣の兼官の事、唯、勅定に在るべし。大式、給官の例無し。陸奥・出羽守の兼官の例を引載す。此の如き事、勅定に在るべき歟。博古の相替（×、）、又、勅定に在るべし。官を以て相替する例、甚だ以て希有なり。又、勅定に在るべし。石清水宮の申請の事、已に宣旨有り。許し給ふべき也。満仲の申請の事、許さるるに、何事か之有らむ也。常陸・陸奥守（×々奥陸等守）の兼官の例多し。就中、満仲、是、本、馬権頭なり。唯、『兼』の字を賜ふべき歟。」者り。前大式藤原朝臣、已に其の例有り。更には下勘ふべきに非ず。之を許すべし。輔正朝臣の申請の事、殊に免し給ふべし。

〔大相府申されて云はく「若し免許すべくば、民部輔を給ふべし。式部輔に至りては、是、献題の職なり。已に遠境に赴くは、其の便無かるべき歟。』猶、式部権大輔を許すべし。」者り。「博古の事、殊に之を許すべし。又、輔政、童井（×々）の時、久しく雲上に候す。殊に之を許すべし。満仲の事、又、之を許し給へ。石清水宮の申す事、請に依れ。」者り。

＊¹ 仰せて云はく「臨夜に依り、御前に召さざるの由、左大臣に仰すべし。即ち陣座に於いて、件等の申文を下給へ。又、前大式藤原朝臣・満仲の兼官は、詞を以て、之を仰せ。」左大臣奏せしめて云はく「石清水宮の申請する伊勢介は、其の数二人なり。一人は自給、今一人は高頼（＝藤原）等。高頼の転を以て、他の日に給ふべき歟。」仰せて云はく「請に依れ。」者り。

▼^g 今夜、式に於いて、立后の雑事を定めらる。又、光栄（×々光朝）朝臣（＝賀茂）を以て、立后の日時を勘申せらる（之）。勘申して云はく「来たる十一日、癸卯。時は酉二点。」

⑨『小右記』天元五年三月六日条(▼a)

▼a「所々の饗禄を定むる事」

六日。戊戌。

▼a式(＝職御曹司)に参る。立后(×皇)の日、並びに三ヶ日(×々一今日)の所々・陣々の饗、並びに禄等の事を定めらる。〔所々の饗饌の定文は、別(×列)に在り。〕去夕、大略、定始めらる。

⑩『小右記』天元五年三月七日条(▼a)

▼a「四条殿の掃除等の事を行なふ事」

七日。己亥。

▼a式(＝職御曹司)に参る。雑事を定めらる。晚景、承香殿に参らる。

四条殿の掃除等の事、行事人を差別けて行なはる。

⑪『小右記』天元五年三月八日条(▼a b)

▼a「立后の日時勘申」

▼b「中宮の御台盤の事」

八日。庚子。

▼a今日、余を以て、立后の日時勘文を奏せらる。仰せて云はく「左大臣(＝雅信)に仰すべし。彼の日の酉時以前に、公卿・所司等参入し、

酉二点を以て、宣命を讀ましむべし。」者り。候宿す。

▼b作物所に給ひ、修理せしむるの御台盤を以て、中宮の御台盤に用

ふべきの由、預千春に召仰せ了りぬ。

⑫『小右記』天元五年三月九日条(▼a)

▼a「左府(＝雅信)に立后の日時を申す事」

九日。辛丑。

▼a式(＝職御曹司)に於いて、雑事を定めらる。未時許、左府(＝雅信)に参る。立后の日時を申す。即ち諸司を催促すべきの由、同じく綱旨を伝ふ。

⑬『小右記』天元五年三月十日条(▼a c)

▼a「四条殿の御装束の事」

▼b「大床子・師子形等の事」

▼c「女御(＝藤原遵子)退出」

十日。壬寅。

▼a降雨。殿(＝頼忠)に参る。今日、四条殿の御装束の事有り。

▼b参内す。蔵人所の大床子二脚(×三脚・師子形等を以て、小舎人を

差はし、四条殿に奉る。

▼c今夜、女御(＝藤原遵子)御出せらる。〈亥時〉

(注1) ▼bの「三脚」を「二脚」に改めた理由は、【事例3】⑮△E【事例6】⑫▽a ※2による。

⑭『小右記』天元五年三月十一日条(▼a c)

▼a「立后の御装束」

▼b「宣命の草」

▼c「中宮職を書出す事」

▼d「宣命宣制」

▼e「奏慶」

▼f「中宮大夫の事」

▼g 「啓陣」

▼h 「宮司の除目」

▼i 「本宮の拝礼」

▼j 「本宮の饗」

▼k 「女房・侍所別当等を補する事」

▼l 「冊命の勅使」

▼十一日。癸卯。

▼a 殿（＝頼忠）に参る。次いで参内す。今日、女御従四位上（□）藤遵子（□）遵子（子）を以て、皇后に立つ。其の儀、南殿の御装束、略、相撲召合の儀の如し。（御簾を垂らす。）南廂の東第三間に、内弁の兀子を立つ。又、宜陽殿に兀子を立てず。

▼b 左大臣（＝雅信）奏せられて云はく「宣命の草を奏すべし。内裏式文に依りて有るべき歟。将、俚詞（×詠詞）有るべき歟。」者り。仰せられて云はく「前々の例に依り、俚詞（×詠詞）を載すべし。」者り。左大臣、射場殿に参る。余を以て、宣命の草を奏せらる。御覽じりて返給ふ。

▼c 此の間、太相国（＝頼忠）、式（＝職御曹司）に参らる。召に依りて参入す。余を以て、中宮職司等を書出ださる。大進正五位下源輔成・少進正六位上藤原為政・少進正六位上藤原正信・大属正六位上肥田維延。大夫・亮は、其の人を注さず。即ち一紙に書き、封を加ふ。奏せられて云はく「宮の下司は、此の如し。大夫に至りては、勅定に在るべし。」者り。下官（＝藤原実資）を以て、亮と為すべきの由、右中弁（＝藤原懷遠、後の懷平）を以て奏せらるる也。仰せられて云はく「大夫の事、猶、以て定申せ。」者り。

▼d 此の間、天皇（＝円融）、南殿に出御す。（時は酉一点。）内侍、人を

喚ぶ。左大臣、靴を着して参上して着座す。諸衛、開門す。内弁（＝雅信）、舍人を召す。二声。称唯す。少納言師衡（＝藤原カ）代参す。内弁云はく「刀禰召せ。」者り。称唯して退還る。大納言為光（＝藤原）以下諸大夫参入す。内弁、中納言文範（＝藤原）（民部卿）を召す。称唯して参上す。宣命を給ふ。東軒廊に立つ。其の間、内弁の大臣起居し、列に加はる。宣命使、（加列）宣制すること、式の如し。群臣（×部臣）拝すること、式の如し。拝し了り、左大臣以下、承明門より出づ。諸衛（×門、門を閉づ。天皇、還御す。

▼e 太相府参られ、殿上に候ぜらる。奏して云はく「皇后の宣命の慶、前後不覚。頻りに朝恩を戴（×戴）き、為す所を知らず。」者（□）り。仰せられ（□）て云はく「夜、深更に依り、御前に召さず。」者り。唯、聞食す由を仰せらる。

▼f 太相府奏せられて云はく「右大将藤原朝臣（濟時）・中納言源朝臣（源×）（保光（×充）、共に是、任（×仕）に堪ふべき者也。濟時は、氏の公卿の内為り。又、上臈為り。保光（×充）は、言われ無き□為るの上、亦、傍親為り。此の間、御定に在るべし。」者り。仰せて云はく「猶、定申すべし。」者り。奏せられて云はく。又、初の奏の如し。仰せて云はく「右大将藤原朝臣は上臈為り。彼を以て、大夫と為すべし。」者り。太相府退出せらる（中宮に参らる。）と云々。

▼g 仰せて云はく「例に依り、啓将（□）等、中宮に参らしむべし。」者り。即ち左大臣に仰す。伝聞く。「諸衛の佐を膝突の座に召し、仰せらる（×御。）と云々。（佐無きの府は、外記（×前記）を以て仰せしむと云々。）

▼h 左大臣を御前に召し、中宮職司を定めらる。（大夫は右将濟時、兼。亮は下官、兼。大進は散位源輔成。少進は為政・正信。大属は式部大

録肥田維延、兼。」頃之、退下す。其の後、射殿の辺に参り、清書を奏せらる。維延に「兼」の字無し。仍りて「兼」の字を注すを仰せらる。又、重ねて陣に於いて奏せらる。右大将・下官、射殿に於いて、藏人宣孝（＝藤原）を以て、慶の由を奏せしむ。（近衛府無きに依り、藏人を以て奏せしむ。）下官、即ち名所を殿上簡に改注す。

▼大・下官、中宮に参る。（同車す。）右中弁（×左中弁）懷遠を以て、慶の由を啓せしむ。（大進・少進等、之の如し。）中門より入る。西対の異の辺に於いて拝礼す。此の間、左大臣以下参入す。余を以て啓せらる。公卿拝礼の間、皇后（＝遵子）理髮す。白御衣（×）、白簪。白御装束を着し給ひ、倚子に着し給ふと云々。典侍（×子）恭子（＝橘）理髮すと云々。「上達部参入す。」者り。仰せられて云はく「聞食す。」者り。左大臣以下侍従、庭中に進みて拝礼す。

▼了りて西対の座に着す。「先是、寢殿の御簾の外、灯台を以て、灯を炬す。此の間、主殿の女孀等参入し、灯炬を以て、之を供（×給す。）其の儀、東廂を以て、公卿の座と為す。（東面（×向）の廂の簾懸けず。）高麗端畳を敷き、其の上に、土敷・茵・円座等を敷く。（右大将云はく「皆、円座を用ふる也。」）四位侍従の座は、南廂に在り。（紫端畳を敷く。）五位侍従の座は、南廊に在り。諸大夫の座は、本の藏人所に在り。殿上人の座は、本の藏人所。宮の侍の座は、本の侍所。左右近・左右兵衛は、門内に在り。左右衛門は、門外に在り。皆、平張を用ふ。上卿の座は、机を定立つ。公卿兩三、座席狭きに依り、仮に円座を召し、東の頭に敷く。（対座。）大夫済時勸盃す。一巡の後、太相府出でて着座す。「御座は、公卿の座の上の東の頭なり。菅円座を用ふ。南面。」即ち机を立つ。下官献盃す。「一巡し、太相國に献る。」次いで飯を居る。須く先づ粉熟を居うべし。而るに儲けず

と云々。次いで右中弁、献盃す。亦、通に勸盃す。数巡の後、宮司、侍従の祿を韓櫃に納め、庭前に昇出だす。中務少輔致時朝臣（＝源）、見参を唱ふ。此の間、公卿、祿を給はる。（大掛。二位（宰相）は赤絹（絹×）を加ふ。侍従は足絹。四位は白絹。）太相府の御祿は、大夫執りて奉る。鶏鳴、公卿退出す。

▼今夜、令旨を奉はり、藤詮子を以て、宣旨と為す。（是、皇太后大夫（×皇后大夫）（＝源重信）の妻。中宮の姉。）藤原淑子（×■子）を以て、御匣殿別当と為す。（参議佐理（＝藤原）の妻。）藤原近子を以て、内侍と為す。（信濃守陳忠（＝藤原）の妻。）下官及び右中弁懷遠を以て、侍所別当と為す。大進輔成朝臣、令旨を奉はり、男女房の簡、今夜始めて書く。宣旨・内侍の着簡は、先例無きに依りて着せず。御匣殿別当・少将乳母（良峯美子）、同じく着簡す。下官・右中弁・侍所長藤原長忠・同望弘等、同じく着簡す。而るに四人を以て、籍に付するは、頗る詞の忌有り。仍りて阿波守任朝臣（＝源）を加ふ。侍所長は、今夜、令旨を下さる。御髪を理する典侍恭子は、給物有りと云々。慥かには色目を知らず。或説に云はく「絹。」と云々。之を尋問ふべし。

▼今日、午時許、侍従公任朝臣（×公卿任朝臣）を召し、中使と為し、中宮に奉らる。祿を給ふこと有り。女装束。

（注1）▼bの「内裏式文」「儉詞」は未詳。『儀式』（巻五・立皇后儀『新儀式』（巻五・冊命皇后事）に例文がある。「詔詞」ならば「てらう詞」という意味か。

（注2）▼jの「二位（宰相）」は、この時に二位の参議がないので、単なる「二位」とした。

⑮『日本紀略』天元五年三月十一日条
十一日、癸卯。

女御從四位上藤原遵子を以て、立てて皇后と為す。天皇（＝円融）、南殿に出御す。左大臣「雅信」以下参り了りぬ。宣制の後、殿上に於いて、宮司を任ずるの除目有り。次いで諸衛を召し、啓陣を仰す。次いで大臣以下、参賀す。

⑯『小右記』天元五年三月十二日条（▼a～d）

▼a「殿（＝頼忠）等に慶を申さしむる事」

▼b「勸学院歩」

▼c「少将乳母（＝美子）等に禄を給ふ事」

▼d「大夫殿（＝藤原濟時）に慶を申す事」

十二日。甲辰。

▼a「殿（＝頼忠）に参る。慶を申さしむ。次いで宮（＝遵子）に参る。北御

方（＝頼忠室殿子女王カ）に申さしむ。

▼b「今日、勸学院の学生等、宮に参入す。先づ令旨を啓陣に下し、学生

を入る。大進輔成朝臣をして慶の由を啓せしむ。内侍に伝へて啓せし

む。聞食す由を仰す。拝し奉る。了りて、正絹を給ふ。（或時は、饗

禄を給ふ。或時は、事、倉卒に依り、饗を儲けられず。職事は白足絹

（＝自足）、学生は赤絹。□、大。六位、或は禄を取り、之を給ふ。」畢

りて又、拝礼を致すと云々。

▼c「少将乳母（＝美子）、昨日より祇候す。今日、平綾六疋・絹十疋を給

ふ。通宮に納む。陪從の女の中に、絹十疋を給ふ。少式・兵衛命婦等、

之に候す。給物を知らず。尋記すべし。

▼d「入夜、罷出づ。大夫殿（＝藤原濟時）に参る。慶を申さしめむが為な

り。宮に参らるるに依りて罷出づ。

（注1）▼bの「□、大」は未詳。

⑰『小右記』天元五年三月十三日条（▼a～d）

▼a「左府（＝雅信）に慶の由を申さしむる事」

▼b「東宮（＝師貞親王）に慶の由を啓せしめ、殿上簡に付す事」

▼c「啓陣終了の禄」

▼d「時刻を啓し、名謁有る事」

▼e「御物忌に籠候する事」

十三日。乙巳。

▼a「左府（＝雅信）に参る。慶の由を申さしむ。御出に依りて空しく以て

罷出づ。

▼b「次いで東宮（＝師貞親王）に参り、慶の由を啓せしむ。拝し了り、殿

上簡に付す。

▼c「頃之、中宮（＝遵子）に参る。今日、諸衛の佐等を侍所に召着す。

禄を給ふ。判官以下は直に給ふ。（但し、例は第四日（×々）の早朝に、

之を給ふ。明日は御衰日に当たるに依り、今日給ふ。今夜祇候し、明

日罷出づべきの由、之を仰せしむ。」女房等に、禄を給ふこと差有り。

▼d「又、宮主、装束の史・官掌・史生等に、同じく給ふ。所々の饗饌

は、昨の如し。給禄の色目・所々の饗等は、別紙に在り。

▼e「今日、初めて時刻を啓す。又、名謁有り。

入夜、参内す。御物忌に籠候す。

⑱『小右記』天元五年三月十五日条（▼a b）

▼a「所々の別当・預・下部等を定めらるる事」

▼b「興福寺僧の慶賀」

十五日。丁未。

▼a 中宮に参る。大夫（＝済時）、同じく参らる。所々の別当・預・下部等を定めらる。又、女房・〔尿〕遠侍者・大番侍者・藏人等を定む。侍所の名簿等、同じく下給ふ。

▼b 興福寺の僧等参入す。禄を賜ふこと、差有り。

【事例2】正暦元年（九九〇）藤原定子中宮立后

①『小右記』正暦元年九月廿七日条（▼b）

+1「内記（＝藤原惟貞）、位記を持来たり、禄を賜はる事」

▼a「秋季御読経」

▼b「女御（＝藤原定子）、皇后に立ち給ふべき事」

廿七日、己亥。

+1 内記惟貞（＝藤原）、三位の位記（々記）を持来たる。大褂を給ふ。史生は疋絹。

▼a 今日、秋季御読経。物忌に依りて参入せず。

▼b 修理権大夫（＝藤原安親）の消息に云はく「来月五日、内大臣（＝藤原道隆）の女御（＝藤原定子）、皇后に立ち給ふべし。」者り。驚奇すること少なからず。

②『小右記』正暦元年九月卅日条（▼a）

▼a「立后（りつご）の日記を送る事」

卅日、壬寅。

▼a 右頭中将（＝藤原伊周）、以言（＝弓削）を使はし、立后の時の儀式の日記を借る。即ち書写せしめ、彼に付し、之を送る。来月五日、其の事有るべしと云々。皇后四人（＝太皇太后昌子内親王・皇太后藤原詮子・皇后藤原遵子・中宮藤原定子）の例、往古聞かざる事也。

③『小右記』正暦元年十月三日条（▼a +1）

▼a「摂政（＝藤原道隆）に立后の御慶を申さしむる事」

+1「立后の中使、摂政（＝藤原道隆）第に参る事」

三日、乙巳。

▲^a 摂政（＝藤原道隆）第（×弟）に参る。立后の御慶を申さしめむが為也。所^{しやう}有るに依りて相^{あひあ}遇はざるの由を言^い出ださる。参内す。

▲¹ 左頭中将（＝藤原公任）云はく「昨日、中使と為て摂政殿に参る。是、皇后の仰事と云々。祿有り。」

④『本朝世紀』正暦元年十月三日条

三日、乙巳。天晴。

上卿^{しやうけい}遅参す。仍りて政^{まつりごと}無し。午後、参議藤原安親卿・同懷忠卿・同実資卿、左仗の座に参着す。左大臣（＝源雅信）、里第に、大外記中原朝臣致時を召して仰せて云はく「今日五日を以て、皇后に立て奉るべし。宜しく諸卿に廻申さしむべし。又、供奉の諸司を召仰せ。」者^てり。仰^{おほせ}を承^{うけたま}はり、局（＝外記局）に参りて召仰せ、諸卿に申さしむ。中務・式部・兵部・彈正等の省・台の官人を召仰す。

⑤『小右記』正暦元年十月五日条（+1 ▼ a ~ f）

+1 「立后の事（定子）」

▼ a 「宣命の草・清書」

▼ b 「宣命宣制」

▼ c 「宮司の除目」

▼ d 「本宮の拝礼」

▼ e 「本宮の饗」

▼ f 「内弁の失誤」

五日、丁未。

▲¹ 参内す。今日、立后の事有り。未時、南殿に出御す。

▲^a 左府（＝雅信）、陣に候ず。内記を以て、宣命の草を撰録（＝道隆）に奉らる。即ち摂政（＝道隆）、参内せらる。右大弁惟仲（＝平）を以て、清書を覽ぜらる。

▼^b 公卿、即ち外弁に出づ。（靴を着す。隠文帯を用ふ。）左府、陣に候じ乍ら、内弁を奉仕せず。故障を申さるる歟。大納言朝光（＝藤原、内弁と為る。承明・（旦）建礼等の門を開く。少納言焔出で了りぬ。公卿、承明門より参入す。諸大夫参列すと云々。内弁（＝朝光、中納言右兵衛督伊陟（＝源）を召す。称唯し、列を離れて参上し、内弁の後に進み、宣命を賜はる。了りて暫く軒廊の東第二間に立つ。（立つ所、云々と定まらず。尋見るべし。）内弁退き、庭中の列に下立つ。了りて宣命使、版に就く。宣命を読むこと兩段。群臣兩段再拜。了りて宣命使左廻に、本列に加はる。了りて次第に承明門より退出するこ

と、入る儀の如し。

▼^c 陣座に候ず。大納言重信（＝源）・左大将济時（＝藤原）・参議佐理（＝藤原）・時光（＝藤原）等遅参し、直に陣に候ず。左相府（＝雅信）・左大弁（＝藤原懷忠）、摂政の直廬に向かふ。宮司の除目有り。（大夫は中納言道長（＝藤原）。権大夫は道綱（＝藤原）。皆、是、重服。亮は清通（＝大江）・左中弁扶義（＝源）。大進は明順（＝高階）。権大進は道行（＝藤原）。少進は□□。属は□□（□□×）。除目了り、左府以下、敷政門より退出す。除目の下名・諸陣の事等、左府、春宮大夫（＝藤原公季）に委ぬ。

▼^d 申時許、彼の宮（＝藤原定子）に参る。（南院。故入道摂政（＝藤原兼家）薨逝の砌也。已に是、喪家なり。尋ぬべし。）左大臣、先づ隠所に入奉。大納言重信、貫首為り。亮清通を以て、公卿参入の由を啓（×諸）せしむ。返事を奉はり、庭前に列立す。侍従相従ふ。

▼^e 拝礼了りて着座す。次いで左府着座す。(座々)は、西対の母屋に在り。雲上の侍従の座は、南廂に在り。他の侍従の座は、南廊に在り。二三巡は、亮並びに近親の非参議の人々と云々。大夫、重服に依りて見えず。四巡了り、左府退出す。五巡了り、侍従以上の祿と云々。公卿は白褂。侍従は疋絹敷。戌時許、事了りぬ。
▼^f 伝聞く。「内弁の納言、未だ承明を開かざるの間、大舍人を召す。」と云々。失誤甚しき也。

⑥『本朝世紀』正暦元年十月五日条

五日、丁未。天晴。

此の日、女御從四位下藤原朝臣定子を以て、皇后に立て奉る事有り。仍りて尋常の政・結政所の装束、例の如し。辰二刻、装束使左大史大春日朝臣良辰、史生船隆範・官掌佐伯直輔・使部等を率ゐ、紫宸殿の御装束の事を行事す。「掃部寮、御椅子並びに御屏風を立つ。内蔵寮、御簾等を懸くること、常の如し。」内弁の大臣の元子、殿上の南廂の東第三の柱の西側に立つ。「柱を去ること、一許尺。」主殿寮、班幔を軒廊の北の小庭に立つ。又、宜陽殿の西廂に懸く。又、弓場殿の南庭並びに校書殿の砌に立つ。又、春興・安福殿の坤・巽の角並びに月華門の闕の内の南腋に懸く。又、永安門の西の棚の前に懸(懸く)。掃部寮、座を階下に敷く。節会の儀の如し。又、内弁の上卿の元子の座、宜陽殿の西廂の北第二間の砌の内に立つ。

時に、中務省、日華門より入り、宣命の版位を置く。「尋常の版位を去ること、北に一許丈。」次いで式部省、同門より入り、親王以下の位の標を庭中の左右に立つ。

已剋、左大臣(雅信)、大納言藤原朝光卿、中納言同顯光卿・源重

光卿・同保光卿、權中納言藤原公季卿・源伊陟卿、從三位高階成忠卿〔式部大輔〕・源泰清卿〔左京大夫〕・藤原高遠卿、左仗座に参着す。

⑦『日本紀略』正暦元年十月五日条

五日、丁未。

中宮〔遵子〕を改め、皇后と為す。女御從四位下藤原定子を以て、冊て中宮と為す。即ち宮司を任ず。

【事例3】長保二年（一〇〇〇）藤原彰子中宮立后

①『権記』長保元年十二月七日程（△B～C）

△A「位記を成すべきの事」

△B「院（＝藤原詮子）の御書を奏覧する事」

△C「院の御書・勅報を左府（＝藤原道長）に伝ふる事」

七日、丙辰。

△A 左府（＝藤原道長）に詣づ。千枝（＝大中臣）の申す位記、成すべきの由を申す。宣旨已に下り了りぬ。而るに廃朝の間に依り、政始を相待つ。世間不淨。尤も忌避すべし。已に叙位の由を承はる。位袍を着し、慶賀を申す。早く罷下り、造宮（＝内宮）の事を勤むべきの旨なり。命せて云はく「申す所然るべし。宣旨已に下る。位袍を着するに於いては、事妨無かるべし。又、早く罷下り、造宮の事を催行なふは、甚だ吉事也。」者り。亦、道貞朝臣（＝橘）の位記、成すべき事を申す。又、命じて云はく「則孝（＝源）に仰せて作らしめよ。」

△B 亦、示さるるの旨有るに依り、院（＝藤原詮子）に参る。「御書有り。」亦、院の御書を給はり、大内に持参す。昼御座に於いて、之を奏覧す。次いで大臣（＝道長）の申さしむる旨を奏す。仰せて云はく「此の事、如何。」申して云はく「諸司の三分以下、任ぜらるるの時、諸卿僉議（×会議）す。公事は無止し。自から以て此の如し。況や是、大事なり。愚意及び難し。但し、丞相（＝道長）の申す所、懇切にして、其の旨然るべし。加以、先日、仰せらるる所の事有り。然らば則ち、今日、指して其の期を仰せらるること無く、只、廃朝を仰せらるべきの間、事憚無きに非ず。此の事に至りては、然るべき事也。参入するの日、面して事由（事×）を仰すべき歟。」勅して曰はく「然るべし。」

即ち御返事を賜はり、院に持参す。

△C 又、院の御書を以て、左府に持参す。時に、已に秉燭に及ぶ。権中将（＝源成信）をして、事由を申さしむ。悩に依り、簾外に出でざるを示さる。命に依り、簾中に入り、御返事を伝奉す。又、勅報の旨を伝ふ。丞相命せて云はく「此の事、指期日を承はらずと雖も、一定の由を承はる。汝（＝藤原行成）の恩の至也。大都、顧問に候ずるの後、事に触れ、芳意の深きを見ると雖も、其の悦を示すこと能はず。今、斯の時に在り。弥、厚恩を知る。汝の一身の事に於いては、思ふ所無し。我、数の子の幼稚有り。汝、亦、数の子有り。若し天命有らば、此の如き事有るの時、必ず此の恩に報ゆべし。亦、兄弟の如く相思ふべきの由、仰合むべし。」者り。欣悦し給ふ旨、甚だ多し。権中将に相逢ひ、雑事を示す。深更に及びて退出す。

②『権記』長保元年十二月十四日程（△D）

△A「美濃守為憲（＝源）並びに宗忠（＝藤原）等の罪名を勘ふべき宣旨の事」

△B「官奏無き事」

△C「拾遺抄」を東院（＝藤原義懷）に返し奉る事」

△D「延長元年（＝四月廿六日）の立后（＝藤原穩子）の例文を左府（＝道長）に奉る事」

△E「僧正（＝観修）に護身を受くる事」

十四日、癸亥。

△A 晨、権中将（＝成信）と共に参内す。左大臣（＝道長）の御宿所に参る。雑事を申承はる。辰より午に及ぶ。右中弁（＝源道方）に、美濃守為憲（＝源）並びに宗忠（＝藤原）等の罪名勘ふべき宣旨の事、並びに

美濃国に守為意の釐務を停むべき宣旨を給ふ並びに散位宗忠に禁法を

用ふべき事を仰（仰×）す。

△B 今日、官奏有るべし。然而左大弁（＝藤原忠輔）、所勞有りて参らず。

予、参入すと雖も、脚下恙有り、束帶すること能はず。仍りて官奏無し。

△C 東院（＝藤原義懷）に詣づ。先日借り給ふ所の『拾遺抄』を返奉す。

△D 帰宅す。

此の夕、左府（＝道長）に詣づ。延長元年（＝四月廿六日）の立后（＝藤原穩子）の例文三通を奉る。

△E 僧正（＝親修）に相謁し、護身を受く。示されて云はく「延命の爲に、毎月十五日、尊勝念誦並びに泥塔三百基、及び月三度、印を供すべし。〔八日は薬師、十八日は観音、廿三・四日の間は不動尊。〕」帰宅す。

△A 「權記」長保元年十二月廿七日条（△E）

△A 「明年正月の節会の列見の白馬の事」

△B 「白馬の事並びに致頼（＝平）・宗忠・維衡（＝平）等の配流の事」

△C 「右大臣（＝藤原顯光）及び右衛門督藤原朝臣（＝公任）、配流・移郷の国を定むる事」

△D 「明年、白馬御覧を行なふ事」

△E 「院（＝詮子）、内裏より出で給ふ事」

廿七日、丙子。

△A 内に候ず。仰に依り、藏人弁（＝源道方）を遣召す。大外記善言朝臣（＝滋野）申して云はく「左馬寮、明年正月の節会の停止を申さしむと云々。若し然らば、白馬の事は如何。今日、白馬列見。寮、大事と申

す也。仰に随ひて進止すべくば、此の由、左大臣に申す。大臣（々々）、早く奏せしむべきの由を仰す。」者れば、之を奏す。仰せて云はく「此等の事を左大臣の許に遣仰せむが爲に、今朝、道方を召さしむる也。貞観十四年の例は、節会、止むと雖も、内殿に於いて、猶、白馬を覽す。是、祖母太后（＝藤原順子）の心喪の内也。今、太皇太后（＝昌子内親王）は、服親に非ずと雖も、崩去の後、冊九日の中也。相定めて申すべきの由、仰遣はさむと欲する也。」と云々。

△B 右中弁（＝道方）参入し、事由を奏す。即ち仰せて云はく「青馬の事、並びに致頼（＝平）・宗忠・維衡（＝平）等、遠所に遣はすべきの事、今日仰すべきの由等、左大臣家に罷向かひて仰すべし。」と云々。帰参して復命す。「節会、止むと雖も、猶、内殿に於いて白馬を覽すべし。遠所に遣はすべき人々の事、只、叡慮に在るの由、先日申さしめたりぬ。」者り。此の旨を奏するの間、右大臣（＝藤原顯光）参入す。仰せて云はく「道方をして大臣（＝顯光）に伝へしむべし。宗忠・致頼等、法家、断罪すべき由を勘申す。然而、殊に思食す所有り。只、位階を追ひ、遠流に処し、並びに維衡、五位を帯び乍ら移郷すべきの由なり。」大臣（＝顯光）奏せしめて云はく「遠流の人々の事、仰に随ひて行なふべし。但し、移郷の事、配所を相計るべくば、諸卿相共に定申すべし。而るに今日、不勘定有るべきに依り、諸卿参るべきの由を誠仰せしむと雖も、参入する所は、右衛門督藤原朝臣（＝公任）・忠輔朝臣の只二人也。事、已に無止し。只、両三人定申すの事、憚有り。但し、右衛門督藤原朝臣、已に延尉（＝檢非違使別当）為り。只一人と雖も、彼（△C）と相議して定申すべき歟。」

仰せて云はく「無止きの事に在りと雖も、罪の輕重等を定むべきに非ず。配所の遠近に至りては、已に定例有り。申さしむる如く、藤原

△D 朝臣（＝公任）と相定めて申すべし。」

又、善言朝臣に仰せて云はく「左馬寮、白馬の事を申さしむ。節会、停むと雖も、内殿に於いて覽ずべし。但し、列見の間、例と為て、射の事有り。宴の如しと云々。縦ひ列見を行なふも、他の事を止むべし。」

△E 院（＝詮子）の御方に参る。仰せて云はく「明年の御慎の事等あり。后の事（＝彰子立后）を申すに、許すべきの天氣有り。」院、御出す。御共に候ず。

左府に参る。穢に依り、着座せず退出す。

（注一）△Eは史料纂集本に「明年御慎事等申、后事有可許之天氣、」とあるのを「明年御慎事等、申后事有可許之天氣、」に改めた。

④『権記』長保元年十二月廿九日条（△B）

△A 「滝口を補する事」

△B 「立后の事、暫く披露すべからざる事」

△C 「節折・追儼の事」

△D 「鬬乱の事」

廿九日、戊寅。

△A 左府に詣づ。雑事を申承はる。紀宣明の申す滝口の名簿、右中弁（＝道方）に付す。召に依りて参内す。右中弁云はく「宣明の事、宣旨下る。又、左大臣（＝道長）の申さるる菅原輔時、同じく宣旨を下す。」と云々。

△B 御前に候ず。仰せて云はく「后の事、一日、院（＝詮子）に申す。暫く披露すべからず。」

△C 節折の事、兼宣（＝源）、之を行なふ。追儼の事、平中納言（＝惟仲）

申行なふ。奏せしめて云はく「貞元二年以往、大中納言・参議、相共に此の夜の事を行（行×）なふ。而るに年来の間、上卿一人、行なふの時有り。今夜、分配の大納言民部卿藤原朝臣（＝懷忠）・参議俊賢朝臣（＝源）等、障を申して参らず。仰せて云はく「例に依りて行なふべし。」

△D 藏人頼貞（＝源）云はく「御使と為て、此の酉剋許、内府（＝藤原公季）に参るの間、三条堀川の間、虚車相逢ふ。行路を遮りて通さしめず。慮外の鬬乱有り。仍りて右衛門志伊遠（＝美努）をして、之を捕へしめて将参る。」者り。早く奏すべきの由を示す。右中弁、勅を奉はり、伊遠に仰せて禁ぜしむ。

子一剋、追儼。行事藏人実房（＝藤原）。

⑤『御堂関白記』長保二年正月廿八日条（▲A）

▲A 「立后の兼宣旨」

▲B 「院（＝詮子）、内裏より出で給ふ事」

廿八日、丙午。

▲A 已時を以て、大藏卿正光（＝藤原）を勅使と為て、宿所（＝一条院東北

対）に来たる。仰せて云はく「女御（＝藤原彰子）を以て皇后と為すべし。宜しき日を定申せ。」勅使に、禄物を賜ふ。「女装束。綾の細長を加ふ。」即ち殿上の方（＝一条院北対西廂）に参り、慶賀の由を奏せしむ。

又、院（＝詮子）の御方に参りて同じく申す。還出づ。雑事を定む。晴明朝臣（＝安倍）を召して日時勘申す。出で給ふべき日・宣命の日并びに入御の日（日×）、同じく勘ふ。源大納言（＝時中）・民部卿（＝藤原懷忠）・中納言（＝平惟仲カ）・左衛門督（＝藤原誠信）・右衛門督（＝藤原公任）・左大弁（＝藤原忠輔）・宰相中将（＝藤原齐信）来問ふ。土御門（門×）

より立つべきに依り、彼に渡り、雑事等、見仰す。
 ▲^B又、参内す。院の御出に候す。

⑥『権記』長保二年正月廿八日条(△A△C△F)

△A「立後の兼宣旨」

△B「藤氏の後、出家に依り、氏祀を勤め給はざる事」

△C「左大臣(＝道長)の奏慶」

△D「結政」

△E「御祈願の事」

△F「立後の雑事定」

△G「院(＝詮子)、内裏より出で給ふ事」

△H「成房少将の還昇の事」

廿八日、丙午。

△^A早旦、参内す。此の日、藏人頭正光朝臣(＝藤原)、勅を奉はり、女

御(＝彰子)の御曹司(々曹司)に詣で、之を伝ふ。左大臣(＝道長)、立
 後の宣命の日、拭申さしむべきの由なり。先日、内々に此の気色を以
 て、大臣に告ぐべきの由、勅命を蒙る。然而、院(＝詮子)より伝仰せ
 らるるは便宜有るべきの由を申す。上(＝一条天皇)、之を諾す。(☆)

△^B此の事、「大臣、予め内に、院の仰に依り、承はらるる所也。」「今日、
 吉日に依り、仰せらるる所を露す也。」去る冬の末、太后(＝昌子
 内親王)崩じ給ふ(＝長保元年十二月一日)以来、度々、其の旨を催奏す。

当時、坐す所の藤氏の皇后は、東三条院(＝詮子)・皇后宮(＝藤原遵
 子)・中宮(＝藤原定子)なり。皆、出家に依り、氏祀を勤むること無し。
 職、納むるの物、神事に充つべし。已に其の数有り。然而、入道の後、
 其の事を勤めず。后位を帯ぶと雖も、納物有りと雖も、尸禄素飡の臣

の如し。徒らに私用に資(×費)し、空しく公物を費す。(☆)之を朝
 政に論ずるに、未だ何の益も有らず。度々、怪に依り、所司、神事違
 例の由をト申す。疑慮至る所にして、此の如きの漸在るを恐るる歟。

永祚中(＝九八九～九九〇)、四后(＝太皇太后昌子内親王・皇太后藤原詮子・皇后
 藤原遵子・中宮藤原定子)有り。是、漢の哀(＝哀帝)の乱代の例也。(☆)

初めて立つるの儀(×議)、謗毀の例有りと雖も、爰に准拠を出だすに
 致りては、難無き歟。況や当時(＝一条天皇)、二后(＝皇后遵子・中宮定子)
 在る所也。今、其の一を加へ、神事を勤めしむるに、何事や有らむ哉。

我が朝は神国也。神事を以て、先と為すべし。中宮、正妃為りと雖も、
 已に出家入道せらる。随ひて神事を勤めず。殊私の恩有るに依り、職
 号を止むること無く、全ら封戸を納むる也。重ねて妃を立て、后と為
 し、氏祭を掌らしむるが宜しかるべき歟(☆)。又、大原野祭、其の

濫觴を尋ぬるに、后宮の祈る所に在り。而るに当時の二后共に勤むる
 所無し。左大臣、氏長者に依り、独り其の祭を勤む。闕怠を致さずと
 雖も、神明の本意に非ざるを恐るる歟。是亦、神事の違例と謂ふべし。

△^C小臣(＝藤原行成、藤氏の末葉を以て、(☆)氏祭を思はむが為に申す所
 也。其の可否に於いては、只、聖沢に在り。此の間、奏する所、多し
 と雖も、悉く之を詳かにすること能はず。主上(＝一条天皇)・大臣(＝
 道長)、具(□)に察する所也。

△^D大臣、勅命を奉はるの後、女装束一襲を以て、勅使に被く。(☆)大
 臣、御所に参進み、慶の由を奏せしめ、拝舞す。(大藏卿正光朝臣、
 之を伝ふ。)亦、院の上御廬に参り、慶を啓し、再拜す。(予、之を伝

啓す。)(☆)予、立後の旧記を以て、之を奉る。先日、命に依る也。
 △^D次いで結政に参る。平中納言(＝惟仲)、加階の後、今日、始めて庁
 の事を行なふ。

△E 召使、戸を牽くの後、官掌、内裏の召の由を告ぐ。上卿の着座を

待つに、時刻〔 〕多く移る。仍りて座を立ちて参内す。勅に依り、御祈願の事等を仰遣はす。御誦経料の布、支配す。〔八幡は甘端、石

山は甘端、山〔比叡山延暦寺〕は十端。〕又、軍茶利法、今日より始む。十ヶ日を限りて修すべきの由、法務僧都〔雅慶〕の房に遣仰す。〔真言院に於いて也。〕行事は実房〔藤原〕。

△F 東宮〔居貞親王〕に参る。左府〔道長〕に詣づ。〔二条〔源奉職宅〕。〕立后の日の雑事を定めらる。

△G 次いで土御門殿より、内に参り給ふ。御車に候ず。院〔詮子〕出御す。御共に候ず。

△H 成房少将の還昇の事、大藏卿に付して奏せしむ。藤中将と同車して帰宅す。

〔注〕△ABCの〔☆〕の部分には、『冊命皇后式』や『柳原家記録』一一所収『立后雑事抄』に引載されている記事と異同がある。

⑦『御堂関白記』長保二年二月十日条（▲A）

▲A 「女御〔彰子〕退出」

十日、戊午。

女御〔彰子〕出で給ふ〔源奉職の二条宅〕。源大納言〔時中〕・右大將〔藤原道綱〕・平納言〔惟仲〕・左衛門督〔誠信〕・左大弁〔忠輔〕・宰相中将〔齊信〕・源宰相〔俊賢〕等来問ふ。昨日の夜より、小雨、時々下る。殿上人の四位・五位廿四人、六位二人、勅に依りて供奉す。殿上人、禄有ること、常の如し。内の女方、典侍・命婦〔姫〕等七人來たる。各、禄有り。

⑧『権記』長保二年二月十日条（△A F）

△A 「北陣〔朝平門〕の外并びに堀河の西を掃治せしむる事」

△B 「宣旨」

△C 「結政」

△D 「大威徳法の事」

△E 「右中弁〔道方〕等、慶を院〔詮子〕に啓する事」

△F 「女御〔彰子〕退出」

十日、戊午。

△A 国平朝臣〔多米〕を召し、北陣〔朝平門〕の外并びに堀河の西の掃治の事を仰す。〔左右衛門府・京職に仰すべし。〕

△B 宣旨十三枚を下す。〔左大臣。〕子細は、目録に在り。

△C 結政に参る。中・少弁参らず。了りて参内し、事由を奏せしむ。

△D 尊叔律師の許に十箇日の大威徳法の事を遣仰す。料物は、穀倉院の納むる播磨国の米廿九石を充つる下文、行事すべき藏人実房に付す。

左府〔道長〕に参る。帰宅す。少将来たる。左府に詣づ。彈正宮

〔為尊親王〕に参る。宮〔御坐さず。〕

△E 院〔詮子〕に参る。右中弁〔道方〕・後少将〔成房〕等、殿上の悦

を啓せしむ。藏人等の装束に依り、余、院司〔東三条院別当〕を以て、

之を啓す。次いで参内す。左府参らる。

△F 女御〔彰子〕、此の夜、戊戌に出で給ふ。〔二条。〕奉職朝臣〔源〕の宅。大臣〔道長〕、月来、此に住み給ふ也。大藏卿〔正光〕、勅命を奉はり、殿上の十人を催し、前を行かしむ。此の外、卿相以下、其の数有り。藏人、輦車宣旨を仰す。東対の南廂に、上達部・殿上人の座を儲く。一兩巡の後、纏頭有り。〔殿上人。〕

⑨『日本紀略』長保二年二月十日条

十日、戊午。

女御彰子、立后すべきの宣旨を蒙る。仍りて内裏より出御す。

⑩『御堂関白記』長保二年二月十一日条（▲B）

▲A「春日祭神馬使」

▲B「御使（＝藤原成房）有る事」

▲C「院（＝詮子）、法興院に渡り給ふ事」

▲D「中宮（＝定子）参内し給ふ事」

▲E「祭使（＝春日祭使（＝源頼定）のに袴を送る事」

十一日、己未。小雨、昨日の如し。

▲A「ひがしのかわ」東河（＝鴨川）に出で、神馬を出立つ。伊祐朝臣（＝藤原）を以て、

使（＝春日祭神馬使）と為す。

▲B「内（＝一条天皇）より、御使有り。成房朝臣。酒肴有り。女装束を給

ふ。褂を加ふ。

▲C「院（＝詮子）、法興院に渡り給ふ。

又、中宮（＝定子）参内し給ふ。神事の日は如何。事、毎と相違す。

彼の宮進藤原惟通・右近将監藤原永家、爵給はると云々。惟通は彼の臨時給（時×）、永家は祭使の功と云々。

▲E「祭使（＝春日祭使）（＝源頼定）の許に、袴を送る。

⑪『権記』長保二年二月十一日条（△E）

△A「春日祭使（＝源頼定）に摺袴を送る事」

△B「列見」

△C「明日の奉幣に依り、維弘（＝橘）の宅に向かふ事」

△D「検非違使別当（＝藤原公任）、辞退の状を送る事」

△E「御使（＝藤原成房）有る事」

△F「院（＝詮子）、法興院に移り給ふ事」

△G「中宮、内裏に入り給ふ事」

十一日、己未。

▲A「春日祭使立つ。仍りて摺袴一腰を使の中将「頼定（＝源）」の許に送

る。

▲B「此の日、列見。官（＝太政官）に参る。結政に就くの間、晴儀を用ふ。

上卿、庁（＝外記庁）に就くの後、更に雨儀に改む。史等、申文を結ぬ

ること、常の如し。訖りて左大弁、起座し、庁に就く。予、又、起座

し、暫く造曹司所に就く。例也。尋常の政、常の如し。式部具せず。

仍りて兵部を召す。事了りて卿相、朝所に就く。予、壁の外に暫く

佇立す。中弁以下、座に就かず。史生大鳥為範を差はし、早く座に就

くべきの由を示送る。仍りて予、先づ座に就く。次いで中弁以下着し

訖りぬ。一献の間、盃、予の手に在り。史生、酌せむと欲するに、左

中弁（信順（＝高階）、史に目して酌せしむ。觴行数巡の後、官掌、装

束（＝宴座の装束）了るの由を申す。上卿、箸を置く。以下、之に従ふ。

弁・少納言等、南廂に下立つ。上卿以下（下×）、一々揖して退出する

こと、例の如し。

▲C「余、帰宅す。小児等を將て、維弘（＝橘）の宅に向かふ。明日、奉

幣せむが為也。

▲D「検非違使別当（使×）（＝公任）、右衛門志果犬養為政を使と為し、辞

退の状を送る。即ち左府に詣づ。坐さず。相尋ねて東宮に参り、案内

を申す。

▲E「權中將（＝源成信）示す。「今朝、成房少将、御使と為て、女御殿（＝

彰子^{△F}）に参り、泥酔^{でいすい}す。」と云々。参内す。

此^{△G}の夜、院（＝詮子）、法興院に御す。

中宮（＝定子）、内裏に入御す。

大藏卿（＝正光）、宿所に過ぎらる。示して曰はく「中宮少進藤原惟通、宮（＝定子）の臨時御給を給はる。右近将監永家（＝藤原）、去年の巡^{じゆん}に非ざる祭使^{さいし}の功に依り、不次に爵を給はる。」と云々。

⑫『権記』長保二年二月廿二日条（△C）

△A「臨時仁王会定」

△B「内堅所を以て、停止する太皇太后宮職に改入るる事」

△C「立後の行事藏人を定むる事」

△D「美濃国司為憲（＝源）の事を定申す事」

廿二日、庚午。

△A^B左大臣、臨時仁王会の事を定申さる。

奏せられて云はく「太皇太后宮職、已に以て停止す（＝長保元年十二月七日）。其の替^{かわり}、内堅所^{ないけんじよ}を以て改入る。」「請に依れ。」

頃之^{しばらくありて}（△）、大臣、左少弁（＝藤原朝経）をして仁王会の僧名・日時勘文^{もん}並びに檢校・行事等の定文^{さだめぶん}を奏せしむ。（来月五日。）

△C^C来たる廿五日の立後の事、行事、定むべき由、式部丞源藏人（＝忠隆）に示す。奉仕すべしと云々。

△D^D大臣奏せられて云はく「美濃国司為憲（＝源）の事、前日の仰に依り、定申さむと欲するに、参入の諸卿幾ならず。後日、定申さむと欲す。若しくは延引する歟。」仰せて云はく「参入（×泰入）の諸卿をして定申さしむべし。」頃之、奏せられて云はく「民部卿藤原朝臣（＝懷忠）・中納言平朝臣（＝惟仲）・忠輔朝臣等定申して云はく『美濃守

為憲、藤原宗忠殺害の事の日記を与判するに依り、勘問せらる。避申す所無し。法家の勘申に依り、宗忠は流罪に処し了りぬ。為憲は、同じく彼の勘状に任せ、解官せらるべし。然而、宗忠は、斬を減じ、流に処す。解官に至りては、亦、之を減じて行なはるべき歟。加之、彼の国の百姓等、国内興復し、解任すべからざるの由を申す。又、造作（＝内裏）の事、任限有るに依り、国を遷替すべきは、或は懈怠を致すべきの聞有り。此の如きの事を付し、殊に優免せられ、将来に励さしむべき歟。』仰せて云はく「定申すに依れ。」国平朝臣に仰す。

大臣、亦、申されて云はく「此の夜、候宿すべしと雖も、経営期迫る。具せざる事多し。仍りて候すること能はず。但し、宣命の日の剋限等、民部卿藤原朝臣に仰せらるべき歟。」仰に依り、之を仰（々）す。戸部（＝懷忠）、余亦大外記善言朝臣に仰せらる。余、亦、左大史国平朝臣に仰す。

（注1）△Cを史料纂集本は「来廿五日立后事、行事可定由式部丞、源藏人可奉仕

云々。」とするが、改めた。

⑬『権記』長保二年二月廿三日条（△A）

△A「障子の色紙形の本文を書く事」

△B「左源中将（＝経房）・後少将（＝成房）の勘事」

△C「天文密奏を上る事」

廿三日、辛未。

△A^A早朝、衙に参る。召に依り、左府（＝道長）に詣づ。寝殿の障子の色紙形の本文を書く。

△B^B左源中将（経房）・後少将（成房）、勘事。

△C^C此の夕、日薄く食す。吉昌朝臣（＝安倍）、変異の奏を上る。

⑭『御堂関白記』長保二年二月廿五日条（▲A）（C）

▲A「立後の事」（上欄付箋）

▲B「宣命宣制・宮司除目」

▲C「本宮の拝礼・饗」

廿五日、癸酉。

▲A

寅時を以て、女御（＝彰子）、土御門（×土門）に渡り給ふ。糸毛を用ふ。金作の車等は人給。西門より御入す。南門より人給の車入る。殿

（＝土御門殿）の御装束等、昨了りぬ。源大納言（＝時中）・平中納言（＝惟仲）・宰相中将（＝藤原齊信）・源宰相（＝俊賢）等候す。

▲B

午時を以て、内に参入す。酉時、宣命。右府（＝顯光、之を行なふ。南殿に御す。本殿に御す後、宮司、除書（×余書）有り。御前に於いて、

右大将（＝道綱）奉仕す。自余の雑事（事×）、右大臣（＝顯光、之を行なふ。

▲C

事了り、宮（＝彰子）に参る。前例に依り、列（×例）に立たず。則忠

朝臣（臣×）（＝源、上卿参る由、申す。後に列立（×例立）し、東対に

着す。西より列（×例）有り。自余、常の如し。御前に於いて遊有り。

⑮『権記』長保二年二月廿五日条（△B）（K）

△A「小兒喰始」

△B「冊命の勅使」

△C「立後の御装束」

△D「宣命の草・清書」

△E「宣命宣制」

△F「宮司の除目」

△G「啓陣」

△H「理髪」

△I「本宮の御装束」

△J「本宮の拝礼・饗」

△K「中宮職の事」

廿五日、癸酉。

▲A

巳刻、小兒始め喰ふ。前物、文佐朝臣（＝平、之を調ふ。小台六本。

左相府（＝道長）の上東門第に詣づ。此の日、立后。丞相（＝道長、命

せて云はく「今日の御使、前々、親昵の人を給はる。」と云々。「天徳

二年は謙徳公（＝藤原伊尹、天祿四年（＝天延元年）は閑院大納言（＝藤原

朝光）、天元五年（五×）は右衛門督（門×）（＝藤原公任、皆、後の兄弟な

り。「亦、大床子・師子形等、宣命了りて即ち給はるべし。」者り。

▲C 参内す。「二条院。」南殿（殿×）の装束、紫宸殿に准じて供奉す。

但し、間敷は、二間を減ず。然而、御簾の西間に、内弁の元子を立つ

▲D

宣命の事を仰せらる。奏して云はく「四条后（＝遵子）を以て、皇太

后と為すが宜しき歟。」（亦、先々の行事を仰せらる。亦、御使遣

はすべきの事を申す。仰に依り、権中将（成信）を遣召す。頃之、

参入す。又暫之、左大臣（＝道長）参らる。宣命の刻限は西二刻也。

先之、右大臣（＝顯光）参らる。召有りて、屋御座に参る。仰せて云

はく「皇后（＝遵子）を以て、皇太后と為し、女御従三位藤原朝臣彰子

を以て、皇后と為すの由、仰すべし。」即ち右仗に到り、右大臣に仰

す。大臣（々々）、南座に移る。官人を召し、膝突を置かしむ。内記を

召さしむ。即ち大内記宣義朝臣（＝菅原）参る。仰を奉はり、草を以て、

大臣に覽ず。御所に参る。「殿上の小板敷の戸の外。」余をして之を奏

せしむ。仰せて云はく「草に依れ。」〔件の草、左府（＝道長）の命に依り、予め宣義朝臣に仰せ、之を書儲けしむ。〕次いで出御す。

次いで右大臣、便所に於いて、亦、清書を奏せらる。〔此の度、若しくは母屋の御簾の下に参り、内侍に付せらるべき歟。〕

△F 返給はるの後、近仗、階下に陣す。内侍、檻に臨む。大臣参上す。闌司出づ。〔門を開かず。西中門、本自開く也。〕大臣、舎人を召す。〔二音。〕大舎人、中門の外に於いて称唯す。少納言藤原朝臣朝典、代わりに版に就く。大臣宣る。〔刀禰召せ。〕朝典称唯す。中門の外に出でて召す。大納言源時中卿・藤原道綱卿、権大納言同懷忠卿〔〇〕、

中納言平惟仲卿・藤原時光卿、参議藤原誠信卿・同公任朝臣・同忠輔朝臣・齐信朝臣・源俊賢朝臣等参入し、標の下に就く。〔四位以下は列入せず。〕大臣、中納言平朝臣（＝惟仲）を召す。〔詞に云はく「中の物申す司（＝中納言）の平朝臣。」其、長官（＝前中宮大夫）為れば上の字を召さず。仍りて只、「ム宮（×宣）の」と召す。而るに今、「司の」と称するは、繆案也。〕平朝臣称唯す。揖して列を離れて斜行し、南殿の西南の渡殿を経て昇殿す。大臣（＝顯光）の左方の長押の下に立つ。大臣、宣命を給ふ。〔左手に、之を給ふ。〕納言（＝惟仲、笏を握みて進寄り、之を給はる。右廻に下殿す。大臣の列に就くを待ち、然る後に宣命の版に就く。宣制一段。群卿再拜す。又、宣制一段。群卿、又、再拜す。納言、右廻に本位に就く。大臣以下退出す。此の間、藏人則隆に仰せ、出納を差はし、中宮（＝彰子）に大床子二脚・師子形二頭・挿鞋一足を奉らしむ。

△F 天皇（＝一条）、本殿に還御す。先是、右大臣命じて云はく「今日、衰日に当たるに依り、除目に候ずべからざるの由、左大臣（＝道長）に申すべし。」者り。即ち案内

を申し了りぬ。時に、左大臣、権中將（成信）をして、源大納言（＝時忠）に密（ひそ）かに告げしむるも、中宮に参る。若しくは除目に堪ふべからざるに依る歟。召有り、御前に参る。仰せて云はく「除目有るべし。右大将藤原朝臣（＝道綱）を召せ。」予、勅を奉はり、藏人所の菅田座一枚を召し、南又廂に鋪く。〔但し、御簾を垂らさず。〕時に、殿司、灯を供す。

△I 主上（＝一条天皇）出御す。人を召す。大藏卿（正光）参入す。仰に依り、大将を召す。〔此の間、大臣、経房中將を中宮に遣はし奉り、大床子を立つべき、師子形を置き、並びに椅子を立つべき事を申さる。【拜礼の為也。】次いで紙・筆を召す。〔左大臣、予め土代を書き、之を献上する也。〕除目。訖りて大将退下す。〔大夫源時中（兼）、権大藤原齐信（兼）、亮藤原正光（兼）、権亮源則忠（兼）、大進大江清通（兼）、権大進源高雅（兼）、少進橘忠範（兼）、藤原陳泰（兼）、大属丸部兼善（兼）、少属飛鳥戸光正（兼）、権少属□□□。〕左大臣奏せられて云はく「橘朝臣良藝子〔院の弁命婦〕を以て、宮の内侍と為さむ。』奏聞し了りぬ。

△G 亦、六衛の啓陣、例に依りて遣はさしむべきの由を仰せらる。右大臣に仰す。大将（＝道綱）、暫く壁後に立つ。大臣（＝顯光）、諸衛に召仰す。退出の後、陣に着すべし。清書せしむる也。

△H 此の間、左大臣に申し、中宮に参る。〔大臣以下、清書の後、中宮に参らるべき也。〕御消息〔丞相の旨〕に因り、藤三位（＝繁子）に相遇ひ、理髪の事を問ふ。〔奉仕せらるるが宜しかるべきの由、内々に相示す也。〕

△I 中宮、寢殿に御す。東対の南は、放出四間。母屋は、南北行に東西対座。高麗端・土敷を鋪く。上に、円座を鋪き、参議以上の座と為す。

〔並びに北上。親王、東座に着す。錦端畳を鋪く。大臣、西座に着す。納言以下参議以上の座に及びては、例の高麗端。〕南廂は、両面端畳を鋪き、四位侍従の座と為す。南廊は、紫端畳を鋪き、五位侍従の座と為す。皆、予め俎上の饌を備ふ。東孫廂は、殿上人の座を儲く。〔予、春宮属錦信理に仰せて奉仕せしむ。〕

頃之、諸卿、西中門に参らる。亮正光朝臣をして事由を啓せしむ。〔拝賀。侍従相従ふ。〕訖りて次第に着座す。次いで彈正尹・大宰帥兩親王（＝為尊・敦道）着座す。

事了りて、御前に召す。又、砌の下に管絃の者を召す。時に鸚鵡頻りに飛び、鳳管数鳴る。万春の樂は未だ央ならず、一夜の漏は將に曙けむとす。事了りて、祿を賜ふこと、差有り。藤中将（＝実成）と同車して帰宅す。

△K 皇后宮職（職×）、皇太后宮職と為す。中宮職、皇后宮職（一）と為す。新後の宮、中宮職（中□□）と為す。

宰相中将（＝藤原齊信）云はく「宣命使、殿上にて右廻するは、疑有り。」「下殿すべきに依り、右廻は疑無き也。」「亦、西渡殿を出で、宣命の版に就くの間の斜行は、非也。」「又、宣命了りて還るの時、南向して揖するは失也。」「還りて揖するは非也。西に折れむと欲して揖するは、失に非ざる耳。』

（注一）△Dの（△）の部分には、『冊命皇后式』や『柳原家記録』一一所収『立后雜事抄』に引載されている記事と異同がある。

①⑥『日本紀略』長保二年二月廿五日条

廿五日、癸酉。

女御従三位藤原朝臣彰子を以て、皇后と為す。〔之を中宮と号す。〕

即ち宮司を任じ、元の中宮職を以て、皇后宮職と為す。

①⑦『御堂関白記』長保二年二月廿七日条（▲A C）

▲A 「女官等に被物を給ふ事」

▲B 「祈年穀奉幣」

▲C 「勸学院歩」

廿七日、乙亥。

△A 女官等に、被物給ふ。

△B 今日（日×）、奉幣（＝祈年穀奉幣）の事有りと云々。

△C 勸学院歩（×歛院歩）。拝礼。着座。祿を給ふ。

①⑧『権記』長保二年二月廿七日条（△B）

△A 「祈年穀奉幣」

△B 「勸学院歩」

廿七日、乙亥。

△A 参内す。〔未廻。〕祈年穀奉幣使発遣すべし。行事の権左中弁（＝藤原説孝）、幣料の未進の国々を書出だす。奏覧す。余を召して仰せられて云はく「廻限過ぎむと欲す。幣物具せず。祈る所無止し。黙爾すべからず。』と云々。仍りて忽ち練用の絹十四疋を求め、行事所に付せしむ（×付令）。件の代、召納め、早く返補なふべきの由、行事弁に示す。南殿に出御すべし。仍りて殿の南廂の東第一間の格子を上げ、母屋に御障子を立つ。掃部寮、御屏風一帖を立て、神事の御座を鋪く。右大臣（＝顕光）、宣命の草并びに清書を奏せらると云々。

△B 中宮（＝彰子）に参る。勸学院司・学生等参入す。〔内に候ずるの間、院事正秀（□）来たり、参るべきの由を告ぐ。〕東対の南廊に、坐を儲

く。学生等、馬場殿の辺を徘徊（徘徊）す。権亮則忠朝臣相迎ふ。別当勘解由判官行忠（＝藤原、之に見参を付し、事由を啓す。報令を承はるの後、庭中に列立す。再拜し、座に就く。有司・学生、鳴高を称す。行事の間、還りて誼譚を成す。例也。一巡。（大夫（＝時中）・権大夫（＝齊信）。）二巡。（亮（＝正光・権亮）。）三巡。（右源中将頼定・権中将成信。）次いで汁物。觴巡数行の後、朗詠発音す。次いで復飯を召す。饌を撤するの後、禄を給はりて退出す。右大将（＝道綱）・余、参ると雖も、勸盃せず。別当（＝勸学院别当）為るに依る也。事訖りて退出す。

①9『権記』長保二年二月廿八日条（△F）

△A「結政」

△B「藤相公（＝藤原懷平）の中娘の夭亡を弔ふ事」

△C「院（＝詮子）の御読経の結願」

△D「六条（＝具平親王）、悩み給ふ事」

△E「三条殿（＝藤原頼忠）の北方（＝蔵子女王）に謁する事」

△F「啓陣終了」

廿八日、丙子。

△A結政に参る。

左府（＝道長）に詣づ。僧正（＝親修）に謁す。

△B藤相公（＝藤原懷平）の御許に赴き、中娘の夭亡（＝二月七日）を弔ふ。

△C院（＝詮子）に参る。御読経の結願也。

△D六条（＝具平親王）に詣づ。悩み給ふ由を問ひ奉る。

△E皇太后（＝遵子）に参る。三条殿（＝藤原頼忠）の北方（＝蔵子女王）に謁す。

△F中宮の啓陣、今日、返さる。饗禄を給ふと云々。

②0『御堂関白記』長保二年三月廿七日条（▲A）

▲A「法性寺・仁和寺僧等の慶賀」

▲B「臨時祭（＝石清水臨時祭）試楽」

廿七日、甲辰。

▲A法性寺（＝法住寺）僧、宮（＝彰子）に参る。三綱・阿闍梨等也。又、

仁和寺僧等参る。僧綱四人。是、禄を賜ふ。

▲B臨時祭（＝石清水臨時祭）試楽。

【事例4】長和元年（一〇二二）藤原妍子中宮立后

①『御堂関白記』長和元年正月三日条（▲A～C）

▲A「立后の兼宣旨」

▲B「尚侍（＝藤原妍子）退出」

▲C「饗禄の事」（裏書）

三日、辛未。

▲A（裏書）

大内に参る。戌時、右大弁道方（＝源、宿所に来たる。仰せて云はく「尚侍（＝藤原妍子）を以て、皇后に立つべし。宜しき日定申せ。」者り。道方に、女装束を授く。即ち弓場殿に着し、賀の由を奏す。「拝無し。」即ち御前に参る。宿所より参る間、前松傘ぐる人々、左右宰相中将（＝源経房・藤原兼隆・左右三位中将（＝藤原教通・藤原頼宗）・公信朝臣（＝藤原・济政朝臣（々々）（＝源・忠経（＝藤原）・朝任（＝源）等なり。

▲B、

▲C（裏書）

三日。上達部・殿上人着座す。巡献の後、宣旨に依り、供奉する殿上人卅余人に、禄を賜ふ。各、差有り。上達部には為さず。来らるる上達部は、藤大納言（＝道綱・春宮大夫（＝藤原齐信・皇太后宮大夫（＝藤原公任）・中宮大夫（＝源俊賢）・左衛門督（＝藤原頼通）・藤中納言（＝隆家）・侍従中納言（＝藤原行成・右衛門督（＝藤原懷平・右宰相中将・大藏卿（＝藤原正光）・左宰相中将・左兵衛督（＝藤原実成）・左右三位中将・源宰相（＝頼定・修理大夫（＝藤原通任）等也。方忌有るに依り、女方（＝源倫子）と還来たる。

②『日本紀略』長和元年正月三日条

三日、辛未。

女御藤原妍子、立后すべきの由の宣旨を蒙る。仍りて左大臣「道長」以下、弓場殿に参り、慶賀を申さる。此の後、女御「妍子」、東三条第に遷御す。

③『御堂関白記』長和元年正月四日条（▲A）

▲A「御使（＝高階在平）有る事」

四日、壬申。雨下る。

▲A

東三条に渡る。上達部多く来らる。御使は式部丞在平（＝高階）。数盃にして、泥酔の氣有り。禄・御返事等を賜はる。還参る。

④『御堂関白記』長和元年正月十四日条（▲A B）

▲A「立后の雑事定」

▲B「東三条第の修善」

▲C「御齋会結願」

十四日、壬午。

▲A

皇后立ち給ふべし（×可皇后立給）。雑事等を定む。御調度・御器等、造り始む。

▲B

今夜より、教静律師を以て、東三条に於いて修善を行なふ。土御門に、帰来たる。女方（＝倫子）、又、同じ。

▲C

入夜、大内に参る。御齋会の結願に候ず。御論義（御論議）・禄等、常の如し。事了り、罷出づ。

⑤『御堂関白記』長和元年二月八日条（▲A）

▲A「立后の祈」

▲B 「主上（＝三条天皇）、御齒を取らしめ給ふ事」

八日、丙午。

▲A 立後の事有るべき由の祈、所々に申さしむ。僧等、又、同じ。

▲B 今日、内裏（×太裏）（＝三条天皇、御齒を取らしむと云々。藤大納言（言×）（＝道綱）・藤中納言（＝隆家）来たる。其に、相命じて云はく「須く参入すべし。而るに今明の慎事有りて参入せず。早く参らるる後、若し出で給ふ次に御座さば、案内を示し給へ。」有暫還来たる。兩人示して云はく「御齒を取らしめ給ふも、殊事（事×）無し。」者り。中納言、御齒持ちて見せしむ。是、仰に依る也と云々。

⑥『御堂関白記』長和元年二月九日条（▲A）

▲A 「立後の文書等を内覧する事」

▲B 「春日祭使（＝藤原兼経）出立つ事」

九日、丁未。

▲A 中宮庁より、立ち給ふ時の文書等持来たる。之を付し、諸司・所々の司等に召仰す。然るべき事等、又、相定む。

▲B 中宮（＝藤原彰子）より、使（＝春日祭使藤原兼経）の所の夜の装束、及び給ふと云々。尚侍（＝藤原妍子）、又、遣はす。女方、又、送る。我、舞人の下重・正絹（×見）の料等、之を送る。一条（＝一条第）より立つと云々。使、大内に参る。女方（＝女使力）を召すと云々。

⑦『御堂関白記』長和元年二月十三日条（▲A）

▲A 「東三条第の装束の事」

十三日、辛亥。

▲A 東三条（＝東三条第）に渡り、殿上を装束せしむ。

⑧『御堂関白記』長和元年二月十四日条（▲A、F）

▲A 「立後の御装束」

▲B 「宣命宣制」

▲C 「宮司の除目」

▲D 「本宮の拝礼」（裏書1）

▲E 「本宮の饗」（裏書2）

▲F 「冊命の勅使」（裏書3）

十四日、壬子。

▲A 夜より雨下る。未時許、晴氣有り。殿上の装束了りぬ。然るべく、所々の司等を定め、惟風（＝藤原）に賜ひて領く。

▲B 大内に参る。酉許なり。戌時、宣命、常の如（如×）し。但し、御出無し。右府（＝藤原顕光）行事す。侍従中納言（＝藤原行成）は宣命使。戌一点を以て、草を奏す。即ち清書を奏す。二点、宣命あり。此の間、月明らかにして、晴儀を用ふ。

▲C 事了り、宮司の名簿（×簿）を書きて奏聞す。又、右大臣（＝顕光）に授（×受）く。御出し、大臣（＝顕光）を召す（×召御出大臣）。除目あり。陣に於いて清書し、之を奏す。式部に賜ふ。

▲D 啓陣を仰す。

十四日。本宮に参詣（×詣）す。亮能信朝臣（＝藤原）を以て、事由を啓せしむ。拝礼す。此の間、掃部、御椅子を供す。昼御座（×書御座）を撤（×撤）し、毯代を敷き、御椅子を立つ。又、藏人所より、大床子・師子形・御草鞋等を渡さる。此等、皆立て了りぬ。御髪を理へ、草鞋を着し、椅子の御座に着す。御装束は白。後に公卿・侍従列立す。北面西上。再拝す。

▲E(表書2)

東対の座に着す。西より列を引く。座定まりて後、余着座す。大夫(道綱)と座を立ち、盃を取り、次々に上達部に献る。次第に之を取る。此の間、采女等、御膳を供ず。女方、皆、理髪す。此の中、大番侍者四人・蔵人(人×)四人は、額・末等を用ふ。是、御膳を供するに依る也。陪膳、又、此の如し。御帳の東辺の大床子の御座に、之を供す。

五献の後、上達部を、御前に召す。数献の後、下より禄を賜ふこと、各差有り。事たり、人々退出するの後、五・六人の上達部留候ず。此の間、内御乳母兵部、御髪を理ふ。仍りて禄を賜ふ。女装束。織物の綾の褂等、相加ふ。衣宮に入る。絹廿疋を加ふ。又、参る乳母の典侍の小宣旨には、女装束。織物の褂・絹十疋を加ふ。掌侍(×常侍)・乳母子には、織物の褂・袴・絹七疋。命婦には、綾の褂・袴。絹六疋を加ふ。蔵人には、綾の褂・袴・絹四疋。采女・博士並びに女官等には、或は褂・袴、褂。絹二疋、一疋。差々に随ひ、之を給ふ。入る所の絹四百余疋、五百疋(口)に及ぶ。

▲F(表書3)
此の日、未時許、大内より勅使有り。能信朝臣なり。是、今日、立后の宣命有る由の御使也。禄を賜ふ。大褂一重。袴を加ふ。

⑨『日本紀略』長和元年二月十四日条

廿五日、癸酉。

女御従三位藤原朝臣彰子を以て、皇后と為す。「之を中宮と号す。」即ち宮司を任じ、元の中宮職を以て、皇后宮職と為す。

⑩『御堂関白記』長和元年二月十五日条(▲A)

▲A「本宮の饗」

十五日、癸丑。天晴る。

▲A 大臣の外、諸卿参入す。東対の唐廂に、座を設く。对座。殿上人(人×)着す。数献の後、各退出す。此の日(日×)、御使蔵人右近少将朝任朝臣(源)参入す。数巡。女装束を賜ふ。

⑪『御堂関白記』長和元年二月十六日条(▲A)

▲A「本宮の饗」

十六日、甲寅。時々、雨下る。

▲A 諸卿参入すること、昨日の如し。御使蔵人(人×)は内蔵権頭景理(大江)。禄を賜ふこと、昨日の如し。兵部乳母、三箇日間、御髪を理ふ。今夜、罷出づ。仍りて紫檀地の螺鈿の薰炉(炉×)、銀の籠等を加へ、小宮に、薰香を入れ、薄物に褰み、銀の五葉の枝を付して給ふ。又、彼の陪従の者四人に、白褂各一重を賜ふ。女方等、三箇日間、皆、理髪すること、初日の如し。

⑫『御堂関白記』長和元年二月廿一日条(▲B)

▲A「皇太后宮(藤原彰子)に参る事」

▲B「啓陣終了」

廿一日、己未。

▲A 中宮より土御門に渡る。女方(倫子)、又、同じ。皇太后宮(藤原彰子)並びに大内に参る。入夜、罷出づ。女方、皇太后宮に参る。

▲B 此の日、啓陣の諸衛に、禄を賜ひて帰遣はす。四位には褂・袴、五位には褂一重、判官には単重、志・府生には足絹(×見)。舍人等には、布を賜ふ。

⑬『御堂関白記』長和元年三月四日条(▲A)

▲A「興福寺・仁和寺僧の慶賀」

▲B「皇太后宮(＝藤原彰子)の懺法御読経の僧名定」

▲C「法性寺に詣づる事」

四日、辛未。

▲A 中宮(＝妍子)に参る。興福寺僧・仁和寺僧、御慶賀に参る。各、禄

を賜ふ。僧綱は大掛一領、別当は一重、已講は横被(×黄被)。自余は

疋絹(×見)。

▲B 皇太后宮(皇×)(＝藤原彰子)に参る。御読経の僧を定む。懺法。十

五口。来たる十一日。

▲C 法性寺に詣づ。女方(＝倫子)、之に同じ。

⑭『御堂関白記』長和元年三月廿三日条(▲D)

▲A「一条院(＝一条太上天皇)の御法事の雑事定」

▲B「季御読経初」

▲C「皇太后宮(＝彰子)の御八講定」

▲D「延暦寺僧の慶賀」(裏書)

廿三日、庚寅。

▲A 一条院(＝一条太上天皇)の御法事の雑事を定む。悩有るに依りて参ら

ず。中宮大夫(＝道綱)・東宮大夫(＝齐信)・皇太后宮大夫(＝俊賢)来た

る。悩むと雖も会合す。御法事の事(々)等を示す。

▲B 件の人々、先づ内裏(×太裏)の御読経初(経×)に参る。次いで一

条に参る。定むべき由を示し、退出す。

▲C 皇太后宮(＝彰子)の御八講の事を定む。

▲D(裏書) 廿三日。入夜、延暦寺、中宮(＝妍子)・東宮(＝敦成親王)に賀表を

奉る。東宮は、去年、事(＝一条院の崩御)等有り、今に延引すと云々。使の三綱に、禄を賜ふ。各、単重一重。小綱八人は疋絹(×見)。両宮(＝妍子・敦成親王)、此の如し。

⑮『日本紀略』長和元年三月廿三日条

廿三日、庚寅。

季御読経始。

其の日、延暦寺僧、中宮(＝妍子)・東宮(＝敦成親王)の冊立を賀す。

【事例5】長和元年（一〇一二）藤原城子皇后立后

①『御堂関白記』長和元年三月七日条（▲A）

▲A「立后の兼宣旨」

七日、甲戌。

▲A 内より右大弁（＝源道方）来たる。「今日、宣耀殿女御（＝藤原城子）を以て、皇后に立つべき宣旨下すは如何。」者り。奏せしめて云はく「先日、仰事を承はる。左右の仰に随ふべし。」者（×云）り。宣旨下ると云々。雨下る。

②『小右記』長和元年四月九日条（▼c）

▼a「齋院の三年一請物の事」

▼b「皇太后宮（＝彰子）の病」

+1「吉田祭の饗、中宮奉仕せらるべし。而るに穢に依りて延引の事」

▼c「中宮（＝藤原妍子）入内と立后（＝藤原城子）の時剋の事」

▼d「内蔵寮の請奏」

九日、丙午。

▼a 左中弁（＝藤原朝経）来たりて云はく「前加賀守兼澄朝臣（＝源）、齋院の三年一請の絹の事を申す。今朝、左府（＝藤原道長）命ぜられて云はく「暫く催責むるを免せ。」者り。子細は注さず。

▼b 又、云はく「皇太后宮（＝藤原彰子）、俄に悩み給ふ。左府營ぎ参らる。僧等加持し奉る。頗る宜しく御坐す由、彼是、云々す。」

+1 又、云はく「十五日、吉田祭なり。而るに彼の祭の饗は、中宮奉仕せらるる所なり。内裏の穢に依り、饗有るべからず。仍りて廿七日子日を用ふべしと云々。但し、平野・松尾・梅宮等の祭は延引せず。」

と云々。

▼c 又、云はく「中宮（＝藤原妍子）、廿七日に内に入り給ふべしと云々。彼の日は后（＝藤原城子）を定むる日也。然而、時剋前後有り。何事か有らむ乎。是、俊賢卿（＝源）、左府に申す所なり。」と云々。

▼d 蔵人業敏（＝高階）来たり、内蔵寮の請奏を下す。「松尾の御幣の料。」便ち左中弁に下す。

③『小右記』長和元年四月十八日条（▼c）

▼a「御禊の点地の事」

▼b「大嘗会行事所始の日時の事」

▼c「立后の日記を送る事」

十八日、乙卯。

▼a 左中弁（＝朝経）来たりて云はく「御禊の点地の事等、兼ねて宣旨を山城国に給ひて勤行なはしむる也。仍りて旧例に任せ、宣旨を給ふ。其の返解持来たる。其の状に云はく（云）『愛宕郡司を以て勤仕せしむる所なり。而るに右馬寮に召籠められ、召仕ふこと能はず。今一人は、左馬寮の召捕に依りて逃隠る。』と云々。件の解文、左中弁を以て、左相府（＝道長）に奉る。御返報に云はく「更に奏すべからず。右馬寮の事は、御監（＝実資）、仰下すべし。」者り。官方より召仰すべきの由、弁（＝朝経）に仰せたりぬ。亦、年預の允貞国を召し、愛宕郡司、国司に請けしむべきの由を仰す。若し弁申すべき事有らば、祭の間を過ごして弁申さしむべし。国司請取るの後、遁避けしめ難き歟。貞国申して云はく「数日、御馬の薨の事に依りて召候ぜしむる所なり。今に至りては、其の身を免ずべし。」と云々。

▼b 弁（＝朝経）云はく「左府（＝道長）、大嘗会行事所を始むべきの程を

問はる。大略、今月晦比に始むべき由を申す。命じて云はく『来月、故一条院（＝一条太上天皇）の御法事、並びに院の奉為に、皇太后宮（＝彰子）、八講を修せらるべし。彼の宮大夫（俊賢、御禊の行事）・左衛門督（頼通（＝藤原）。大嘗会の行事。吉服を着し、其の事に従ふは、便宜無かるべし。此の程を過ぎ、六月に始行するが宜しかるべきの由、伝示すべし。』者り。答ふるに謹奉を以てす。此の事、意を得ず。当時（＝三条天皇）の事を忽せにせらるるに似る。

▼c 翌日、修理大夫（＝藤原通任）来たり、雑事を談ず。多くは立后の間の雑事也。少々の事、相示し了りぬ。四条宮（＝藤原遵子）立ち給ふ間の記、又々、撰出だして送るべきの由、同じく示し了りぬ。事多く、鬱氣有り。

④『御堂関白記』長和元年四月廿五日条（▲C）

▲A「賀茂祭使還立」

▲B「中宮（＝妍子）入内の定」

▲C「女御（＝城子）の立后料を送る事」

廿五日、壬戌。

▲A 左衛門督（＝頼通）の車（×東）に乗り、密々に見物す。人知らず。左衛門督・三位中将二人（＝藤原教通・藤原頼宗、還立所に行く）。

▲B 左衛門督、大内に参り、中宮（＝妍子）の内に参り給ふに（×参中宮内絶、御前等を定むるを奏す。外記徳如（＝中原）持来たる。「解陣の事等、同じく行なふ。」者り。

▲C 民部大輔（部×）為任（＝藤原）を以て、宣耀殿（＝城子）の立后料に、絹百疋を送る。

女方（＝源倫子）、中宮に参る（×参女方中宮）。

⑤『小右記』長和元年四月廿六日条（▼c）

▼a「中宮（＝妍子）の行啓の事」

▼b「四条大納言（＝公任）に駕取の料を送る事」

▼c「立后の饗所料の事」

▼d「斎院に歌舞有る事」

▼e「斎院（＝選子内親王）の下部の夢の事」

廿六日、癸亥。

召使来たりて云はく「中宮（＝妍子）の行啓（×禊）に供奉すべし。『明日。彼の宮属良明（＝宇治）申して云はく『糸毛車を奉るべし。』者り。へ車副十二人。』斎院の車を遣借し訖りぬ。

▼b 四条大納言（＝公任）に、綾の表衣・下襲を借送る。使に付し了りぬ。

▼c 明日の駕取の間、着すべき料敷。

明日の立后の饗所料、匠作（＝通任、唐瓶子四口を借る。即ち送る也。匠作送りて云はく「明日の立后の事、左相府（＝道長）行なはるべからず。仍りて今日、藏人を差はし、右相府（＝顕光）に仰遣はさるべし。』者り。左府、民部大輔為任（＝藤原）を招き、桑糸百疋を女御（＝城子）の許に奉らる。』者り。匠作、興光朝臣（＝三善）を以て云送（云×）りて云はく「土敷料の龍鬘・二枚、求得ること能はず。』者り。

▼d 興光朝臣に付し、求むる数を送り了りぬ。

斎院長官為理朝臣（＝源）云はく「斎王（＝選子内親王）、院に還るの後、歌舞（舞、例の如し。院は、是、御社に同じ。神殿有るに依る。諒闇と雖も、歌遊有り。』と云々。

▼e 又、云はく「院の下部の夢に『乗車の人、東門の外に来たり、車を留め、院司等を召出だす。長官已下悉く参列す。乗車の人云はく「祭

は停むべしと云々。如何。実歟。」為理申して云はく「然らざる事也。行なはるべき也。」甘心の氣有りて歸去る。』者り。

⑥『小右記』長和元年四月廿七日条(＋123、▼a・d・r)

- ▼a 「大臣三人(＝道長・顕光・公季)の不参に依り、参内の仰有る事」
- ▼b 「吉田祭使の身代の事」
- ▼c 「四条大納言(＝公任)に女装束を送る事」
- ▼d 「諷誦」
- ＋1 「立後の節会(女御城子)」
- ▼e 「内弁を勤むる事」
- ▼f 「宣命の草」
- ▼g 「左府(＝道長)、立後の事を妨遏する事」
- ▼h 「左府、宣命の文を改むる事」
- ▼i 「宣命の清書」
- ▼j 「宣命宣制」
- ▼k 「宮司の除目」
- ＋2 「諸衛の将・佐一人も参らず。仍りて啓陣の事、直、外記に仰す」
- ▼l 「下名」
- ▼m 「本宮の拝礼」
- ▼n 「本宮の饗」
- ▼o 「除目を新后宮(＝城子)に奉る事」
- ▼p 「冊命の勅使」
- ＋3 「左府の妨遏に依り、大床子・師子形、内より奉られざる事」
- ▼q 「史奉親朝臣(＝但波)、立后に奉仕せざる事」
- ＋4 「中宮(＝妍子)の入内の事」

▼r 「大藏卿(＝正光)、召使に石を打つ事」

廿七日、甲子「危日」。

去夜より甚雨。朝間、弥、甚だし。内豎来たりて云はく「先に式部(＝高階在平)仰せて云はく『大臣三人(＝道長・顕光・公季)、障有りて参らず。已剋以前に参入すべし。』者り。何事かを知らず。推量する所は、若しくは今日の立後の事歟。左相府(＝道長)を憚りて参られざる所歟。天に二日無く、土に二主無し。仍りて巨害を憚らざる耳。予申さしめて云はく「去夜より、聊か所労有り。相扶けて参入すべし。已剋以前は参入し難き也。」

匠作(＝通任)、長庭を借送る。即ち、之を送る。新后(＝城子)の饗所料歟。

▼b 「尹中納言(＝時光)、人を以て云送りて云はく「将監兼任(＝藤原)、今日、吉田祭使を勤むべし。而るに日来、寸白を悩み、未だ減平すること能はず。仍りて将監仲重(＝身人部)に談じ、身代と為して出立したむるの由、昨夕、左府(＝道長)に申す。許容し了りぬ。其の命に云はく『大将(＝実資)に触るべし。』者り。仍りて示送る所也。」者り。答ふるに、聞き給はるの由を以てす。袴、摺らず。賀茂祭の袴の如し。隨身の近衛守近(＝安倍)を差はし、尹中納言の許に送る。被物。

▼c 「単重」

▼c 「女装束一襲、(二藍の織物の唐衣。同色の織物の褂【色頗る唐衣より薄し。】・紅染の擣(×擣)の綾の褂一重。同色の重袴一具。」四

条大納言(＝公任)の御許に送り奉る。先日、示送らるるに依る也。今夜、智の宮(×旁)有りと云々。(左三位中将教通。)

▼d 「早旦、諷誦を清水寺に修す。多事の日に依る也。女装束の使の男(出納)、疋絹を与へらる。感悦の報有り。」就中、

打衣太だ鮮明なり。」者り。

参内す。〔未一点〕諸卿参らず。大外記敦頼朝臣（＝菅野）云はく「南殿の御装束、及び所々の屏幔、皆立つ。今日の事、上卿、未だ仰下されざるの前、装束使奉仕す。左中弁（＝朝経）参らず。又、史奉親朝臣（＝但波）参らず。云々の如くば、奉親朝臣、宅より、下藤の史の所に仰遣はし、奉仕せしむる所（々）也と云々。奉親朝臣（＝）は左府に候ずる者也。若しくは承はる所有る歟。」者り。参入するの由、資平（＝藤原）を以て頭弁（＝道方）に示さしむ。余、仗座に着す。小庭の前に、屏幔を立つ。宜陽殿の西壇に、同じく曳く。

小、時、頭弁、陣に出でて云はく「今日、立后の事有るべし。而るに其の事を行なはしめむが為に、昨日、藏人在平を差はし、右大臣（＝顕光）の許に仰遣はす。奏せしめて云はく『日来、所労有り、参入すべからず。但し、承引するの人無くば、相扶けて参入すべし。』者り。次いで内大臣（＝公季）に仰せらる。物忌の由を申さる。仍りて下臣（＝実資）に仰せらるる所也。」者り。此の間、藏人在平、陣に出で、頭弁の後に居す。宣旨を伝仰すべきに似る。事、奇怪に依り、之に示して退かしむ。頭弁、同じく指示する而已。

頭弁云はく「先づ参入するの由を奏すべし。」者り。即ち殿上に参上す。相替はりて在平来たり、綸旨を伝へて云はく「所司具する乎。」者り。答へて云はく「初めに承はる所無し。何事乎。如何。」云はく「今朝、内堅を差はして申さしめて云はく『大臣、参らるべからず。今日の立后の内弁奉仕すべし。又、未剋、宣命の事有るべし。早く参入すべし。』者り。答へて云はく『内弁の事、承はらず。内堅、只（×亦、参入すべき由を仰す。今に至りて勅有り。』召仰すべき由、奏聞し了りぬ。〔思ふ所は、内弁の事、内堅を以て伝仰すべからざる

歟。若しくは日来、之を仰す。若しくは参入するの時、面して仰すべき歟。古伝を知らざる也。〕外記公資（×頼（＝大江）を召す。内記を召遣はすべき事、所司・諸衛を召仰すべき事、諸卿に廻告ぐべき事等、之を仰す。

其の後、頭弁仰せて云はく「宣耀殿女御（＝城子）、皇后と為すべきの宣命、作らしむべし。」者り。余問ひて云はく「中宮（＝妍子）を尊び、皇后と為し、女御を以て、中宮と為すべき歟。」云はく「只、皇后と為すべし。」者り。問ひて云はく「御名は城子歟。」云はく「然る也。」者り。又、云はく「位は從五位下。」者り。内記資信（＝菅原）参入す。從五位下藤原城子、皇后と為すべきの宣命の事を仰す。但し、中宮立ち給ふの宣命、相同じ歟。亦、宣命、前々の立后の時と、相違無く、例の状を為す。須く先づ前々の宣命の草を召見るべし。然而、内々に見る所有り。仍りて直ちに仰せ了りぬ。見合はすべき由、敦頼朝臣に仰す。予、南座に移る。内記、宣命の草を進る。事誤無し。見了り、左相府に奉る。時剋多く移るも帰参らず。若しくは是、申通すの人無き歟。頭弁並びに敦頼朝臣、同じく此の疑を成す。相府（＝道長）、立后の事、頻りに妨遏有るの故也。万人、怖畏を致す。

按察中納言（隆家（×兼（＝藤原）・右衛門督（懷平（＝藤原）・修理大夫（通任）等参入す。自余の卿相、中宮に候ず。〔東三条。左府同じく坐すと云々（々々）〕召使、諸卿参入すべきの由を申さしむ。卿相の前に召出だし、口々に嘲哂罵辱す。敢へて云ふべからず。公事無きに似る。敦頼朝臣彈指す。敦頼朝臣云はく「左府、召有り。然而、事を左右に寄せ、暫く参らず。」者り。今日の事を行なひ了るの後、参入すべきの由、之を仰す。今夜戊剋、東三条より、中宮、内裏に入り給ふ。万人、此の事に帰し、立后の事を忽諸にす。宣命の版、数度

催す後に中務置く。式部、臨晩に僅に標を立つ。今日の事、猶、水を以て、巖に投ずるがごとし。是、相府の氣に依る也。

申終許、内記帰來たりて云はく「宣命の草、左府に内覧す。命じて云はく『宣命の文、例文に違はず。但し、先に立ち給ふ后（中宮）有り。』」閫（×閫）の内「斯理弊の政（×斯理弊政「弊伎」）」の文は除かるべき歟。抑、計行なふべし。』者り。意を得ずと雖も、其の文を削らしめ、亦、相府に奉る。「亦、命じて云はく『天下政』と云ふ文及び其の次の文は停むべし。亦、「食国として古より行來たる」と書くべし。已下の文は、旧の如し。』者り。御難を強ふる也。奇しむべき也。『改直す後は、更に持來たるべからず。奏聞すべきの由を示すべし。』者り。彼の命の如く改書かしむ。

▼御所に進み、（階下を経て、射場に進む。）奏せしむ。即ち返し給ふ。清書せしむ。進みて奏す。返し給ふ。陣に復（×後）す。暫くして内記に返給ひ、陣座に候ぜしむ。

▼陣後に出で、靴を着す。外記を召し、陣を引くべきの由を仰す。外記申して云はく「陣を引き了りぬ。」仍りて宣命を笏に取副へ、軒廊に進む。（衝黒。）而るに左右の陣、未だ引かず。催仰せて引かしむ。近仗、中儀を服し、（將は縫腋、弓箭を帶ぶ。開門の近衛は黄衣を着す。）南階を挟み、左右に立つ。

次いで内侍、東檻に臨む。還入る後、予、東階より昇る。南の簀子敷（×簀子敷）を歴て、兀子に着す。（東第三間の柱の下。）

次いで承明・建礼等の門を開く。小選、閫司、承明門の東西の座に分着す。次いで予、舍人を召す。二声。大舍人、称唯す。少納言守隆（＝源）代人（×戌入）り、版位に就く。宣る。「刀禰召せ。」上達部、標に就く。

立定まり、（中納言（言×）隆家、参議懷平（×）通任の三人。諸大夫、一人も参らず。往古聞かず。）中納言藤原朝臣（隆家）を召す。称唯して参上し、簀子（×簀子）に立つ。余、右手を以て、宣命を給ふ。之を受けて退下し、軒廊の西第一間の東の柱の下に立つ。（柱の外に、南面して立つ。）

次いで予、退下し、軒廊の東二間より出で、列に加わる。次いで宣命使（＝隆家）、版位に就く。宣制二段。卿相、段毎に再拜す。式に依る。但し、第二段に、或は舞（舞＝拜舞）有り。近則、中宮（＝妍子）立ち給ふ日、舞（舞＝拜舞）有りと云々。彼の日、忌日（＝藤原齊敏）に依りて参らず。只、伝聞く所なり。先日、内議有り。然而、今日、式に存す。又、『故殿御記（＝清慎公記）』に見ゆ。仍りて舞踏を用ひざる而已。宣命使、列に立ち了りぬ。予、承明門より出づ。次第に皆出づ。東の閤門・敷政等の門に入り、陣に復（×後）す。

▼即ち藏人雅康（＝平）、召を伝ふ。予、南殿の北廂を経て参上す。心神極めて悩み、侍所に於いて、御漿水（×下）を飲（×飯）む。御前に参り、（又廂より進む例也。）東廂の円座に候す。（御座に当たる。）除目の事を仰せらる。男等を召し、硯を召す。之を居う。柳筥、統紙を納む。亦、先づ頭弁に示し、宮司に任すべき者の名簿（×簿）を加納めしむ。仰せて曰はく「云々。」称唯し、笏を置く。先づ墨を磨ぐ。仰に随ひ、大夫を書く。奏して云はく『兼』の字。天許あり。次いで又、仰に依り、亮を書く。「兼」の字は大夫に同じ。仰せて云はく「次々に書くべし。」者り。硯に納むるの宮司の名簿（×簿）を覧す。仰せらるる所歟。前に又、本宮の注進に随ひて書く所也。今般の宮司、多く是、本官有り。皆、「兼」の字を賜はる。書体は上に注す。書き了り、硯等を撤す。除目を以て、柳筥に盛る。笏を腰に挿し、御辺に

進みて奏覽す。笏を抜き、復座す。御覽じりぬ。進みて笏を挿し、之を給はり、復座す。即ち入御す。

余、除目を笏に執副へ、退下して陣に復す。外記を召し、硯を進らしむ。右衛門督（＝懷平）の前に置く。余、除目を金吾（＝懷平）に授けて清書せしむ。別紙に大夫を書き、亮已下は一紙に書く。

此の間、頭弁、仰を伝へて云はく「皇后宮、陣を侍らしむべし。」者り。外記公資を召し、六衛の將・佐等の候不を問ふ。「巻文を進ると雖も、一人も参らず。」者り。今日の気色を見るに、甚だ以て言外也。召催す將・佐、参入すべからざる歟。仍りて皇后宮、陣を候はしむべきの由、直、外記に仰せりぬ。前例は、一府の佐も参らざるの時、外記を以て、志に伝仰せしむ。抑、前例は、上卿、膝突二枚を敷かしめ、左右の佐を召し、一度に之を仰す。初は近衛府、次いで衛門、次いで兵衛。然而、時の議に随ひ、蓋し此の如き歟。更に催召さしめず、外記に仰する耳。

清書了りて後、外記を召す。宮に、清書を盛り、外記に給ふ。御所に進みて奏聞す。返し給ふ。陣に復す。

外記をして式部を召さしむ。外記公資、度々、式部侍する由を申す。是、例也。夜闌に依り、三度に及ばず。式部丞在平（＝藏人）参進み、小庭に立つ。予、北面して宣りて云はく「万宇古。」在平称唯し、膝突に進む。予、右手を以て、之を給ふ。之を受け、本所に退立つ。宣る。「万介多へ」と。称唯して退出す。

余・大夫（隆家・同車）・右衛門督（懷平）・修理大夫（通任）、新后の宮に参る。（亮為任（×理）（藤原）堀河辺。故道順（＝高階）の宅。）西御門・同方の中門より参入す。先づ宮司等奏慶せしむ。（寝殿の坤の辺に於いてす。）拝礼了りて、亮為任を以て上達部参入の由を

啓せしむ。即ち啓の由を伝ふ。仍りて次第に庭中に進みて拝礼す。

（上達部四人（＝実資・隆家・懷平・通任）。侍従一人も参らず。）

畢りて御前を経て、東対の座に着す。（母屋は簾を懸けず。北上対座。嘉木の机・高麗端疊を用ふ。土敷・円座を用ひず。）侍従の座、（南廂。西上北面。机。【黒柿】。疊。【紫端】。）侍従一人も参らず。亦、所々の殿上人・諸大夫の饗、酒部の幄に有りと云々。殿上人一人も参らず。役送は五位五・六人許歟。其の外は見えず。

女院（＝藤原詮子、皇后に立ち給ふの日、母屋の饗有り。其の後々の立后の饗、皆、此の儀（×議）を用ふ。四条宮（＝藤原遵子）立ち給ふ饗の座、廂を用ふ。高麗疊の上に、土敷・茵を敷く。彼の時、例を尋ねて行なはるる所なり。但し、濟時卿（＝藤原）云はく「皆、円座を用ふ。」と云々。

今夜、夜深（々深）く、客少なし。亦、勸盃の人無し。予、大夫（＝隆家）に示して云はく「勸盃の人、相分つべからざる歟。」大夫甘心す。一献は大夫。次いで粉熟を居う。二献は亮為任。飯・汁物を居う。箸を下ろす。三献は修理大夫。次第に、禄有り。納言（＝実資・隆家）は大褂一重。両宰相（＝懷平・通任）は烏子重。禄の後、退出す。（子刻許。）正絹を隨身に給ふ。

今夜、為任云はく「式部卿宮（＝敦明親王）出で給ふは如何。」者り。答へて云はく「上達部幾ならざる内、然かるべきの人無ければ、出で給はざるが宜しき歟。」甘心して退帰る。

皇后宮職（宮×）

大夫従二位藤原朝臣隆家（兼）
亮従四位上藤原朝臣為任（兼）
大進正五位下藤原朝臣良道

權大進從五位下藤原朝臣俊忠〈兼〉

少進正六位上藤原朝臣師通

大属正六位上安倍連為善〈兼〉

少属正六位上伴宿禰興忠〈兼〉

寛弘九年四月廿七日

本宮の注奏に随ひて任ずる所なり。今日、為任朝臣を以て新后宮

（「賊子」に奉らる。

冊命の由を聞かると云々。是、前例也。禄有り」と云々。

冊命以後、藏人章信（「藤原」）を以て御挿鞋を新后（「賊子」）に奉らる。

禄有りと云々。度々の例を見るに、大床子・師子形は、内より奉らる。

而るに左府妨遏す。仍りて本宮造らしむと云々。

後日聞く。「史奉親朝臣云はく『除目の清書、左府に奉らるべき

歟。』と云々。除目は専ら奉らざる也。奉親、至愚の又至愚也。奉親

朝臣、八省に参りて参内せず。下臈の史を以て御装束を奉仕せしむ。

是、極めて冷淡（「談」なる事也。敦頼朝臣の申す所也。

今夜、〈戌剋〉中宮、東三条院より、内裏に入り給ふ。右三位中将

頼宗（「藤原」）、正三位に叙す。后（「妍子」）の乳母藤原高子、加階すと

云々。是、頭弁談ずる所也。東三条の慶賀歟。上階の慶は甘ぜざる事

也。

行啓に供奉する卿相、大納言道綱（「藤原」）・斉信（「藤原」、中納言俊

賢（「源」・頼通（「藤原」）・行成（「藤原」）・時光・忠輔（「藤原」、参議正

光（「藤原」・経房（「源」・実成（「藤原」）・頼定（「源」、右三位中将頼宗。

藏人頭（「道方」より始めて、侍臣、首を挙げて扈從す。両処は玄隔な

り。王憲（「主憲」を怖れざる歟。上達部、障を申し、冊命に参らず。

俄に、或は触穢、或は所勞。就中、源中納言俊賢、冷泉院（「冷泉天

皇）の素服を給はるに依りて参入せず。「吉田祭に当たるに依る。」者

り。而るに行啓に供奉し、内裏に参入す。既に是、公事を忽諸にす。

後聞く。「諸卿、東三条に候するの間、喚使、参内すべきの由を申

す。手を打ちて同音に咲ふ。其の後、嘲哂すること極無し。大藏卿

（「正光」、石を執り、召使を打つこと兩三度なり。」と云々。狂乱歟。

神の咎有る歟。天譴有る歟。至愚の者と謂ふべき也。

（注1）▼f「為例状、須」、古記録本「為例状、須」、史料本「為例、依須」、大成本

「為例、状須」。

⑦「御堂関白記」長和元年四月廿七日条（▲E）

▲A「由祓」

▲B「吉田祭」

▲C「中宮（「妍子」）入内の事」

▲D「中宮に供奉する公卿」（裏書1）

▲E「立后（「賊子」）の事」（裏書2）

▲F「中宮の饗」（裏書3）

▲G「左三位中将（「教通」、太皇太后宮大夫（「公任」）の女と婚する事」

（裏書4）

廿七日、甲子。

▲A「早朝、東河に出でて禊す。吉田祭奉幣せざる由なり。

▲B「女方（「倫子」と中宮（「妍子」）に参る。中宮（々々）、吉田祭の事、奉

仕せらる。又、例幣に加へ、神宝、使に付す。

▲C「亥時、内裏に入御す。諸陣の尉以下には、例の如く、禄を賜ふ。上

達部・五位以上には賜はず。是、諒闇（「涼闇」）に依る也。須く六位以

下には給ふべきに非ず。前例に依る。而るに下部等、寂然の由を申す。

仍りて臨時に之を賜ふ。

▲D(表書1) 廿七日。供奉の上達部、春宮大夫(「音信」・皇太后宮大夫(「俊賢」・侍從中納言(「行成」・大藏卿(「正光」・左兵衛督(「実成」・源宰相(「頼定」此等は指(「旨」さるる人也。指されて参らざる人、右大將(「実實」、内に候ず。召に依ると云々。隆家中納言、今の大夫。右衛門督(「懷平」、年来、相親しき人也。今日来たらず、奇しく思ふこと少なからず、思ふ所有る歟。指されずして候する人々、左衛門督(「頼通」・尹中納言(「時光」・左宰相中將(「経房」・右三位中將(「頼宗」・戌時許、頭弁(「道方」来たりて仰せて云はく「右近中將頼宗・藤原高子、一階を叙すべし。」是、前例に依る也。朝任を以て、案内を申さしむ。仍りて仰せらるる也。

▲E(表書2) 此の日(「日」×、女御城子(「子」×)を以て、皇后と為す。右大臣(「顯光」・内大臣(「公季」、障の由を申して参らず。仍りて右大將を召し、宣命を行なはる。時、未時に、諸司に仰す。陰陽師の勘ふる時は子時と云々。而るに夜半也と云々(「云」。只、定めらると云々。陰陽師等奇しき申すと云々。参入する上達部、実資・隆家・懷平・通任等の四人と云々。侍從は候ぜず(「×不候侍從」。殿上人、一人も参らず(「×不参殿上人」と云々。

▲F(表書3) 内御宿所(「飛香舍」に、酒食(「西食」を儲く。上達部の出車還る間、之に着す。朝夕の御膳を供する後に参上し給ふ。内に候する女方、見参、物を賜ふ。乳母等に女装束、命婦に綾の褂・袴、藏人(「女藏人」に綾の褂、合わせて廿五人。得選に白褂一重、長女・御廨人・刀自(「×負仕」等に、疋絹(「×見」給ふ。

▲G(表書4) 此の夜、左三位中將(「教通」、太皇太后宮大夫(「公任」と因縁を為す。彼の宮(「四条宮」の西対に此の事有りと云々。共は、五位八人、

六位二人。隨身等・雑色十人、之を遣はす。知章朝臣(「藤原」、此の外に、車後に乗る。

⑧『日本紀略』長和元年四月廿七日条

廿七日、甲子。

女御從四位下藤原朝臣城子を立て、皇后と為す。中宮職と号す。故濟時卿(「藤原」の女。

此の夕、中宮「妍子」、飛香舍に入る。

⑨『小右記』長和元年四月二十八日条(▼a e f)

▼a「新后(「城子」、悦を仰せらるる事」

▼b「中宮(「妍子」の御方に参る事」

▼c「皇太后宮(「彰子」の御悩」

▼d「左三位中將(「教通」と四条大納言(「公任」の女の後朝」

▼e「主上(「三条天皇」の立后の間の仰事」

▼f「冊命の後朝の御使」

廿八日、乙丑。

▼a「新后(「城子」、亮為任朝臣を以て、昨日の行事の悦を仰せらる。

▼b「参内す。一両の卿相相共(「々共」に、中宮(「妍子」の御方(「飛香舍」に参る。左府(「道長」・卿相、数多候ぜらる。昨日の事を思ふに、弥、王道弱く、臣威強きを知る。嗟乎嗟乎(「×差乎々々」。饗饌有るも、酒あらず。

▼c「皇太后宮(「彰子」、日来、寸白を悩み給ふ。御頼と云々。只今、痛悩み給ふの由、一兩度、御消息有り。

左府(「道長」云はく「三ヶ日、罷出づべからず。而るに此の告有り。

之を如何為む。」予答へて云はく「必ずしも籠坐すべからざる歟。」相府（＝道長）云はく「然るべき事也。車を取遣はすも、早くは将来（＝持来）たるべからず。左衛門督（＝頼通）の車に乗りて馳参るべし。」者予と右衛門督（＝懷平）と同車し、皇太后宮に参る。〔途中、秉燭す。〕小時、左府参らる。中宮に候ざるの卿相、同じく参る。兵部卿（＝忠輔）参らず。予暫く候じて罷出づ。〔戊剋許〕

今日、中宮に参る卿相、大納言齊信、中納言俊賢・頼通・隆家・行成・忠輔、参議（＝懷平）・正光・経房・実成・頼定、三位中将・教通・頼宗、雲上の侍臣雲集する而已。

▼^d今朝、四条大納言（＝公任）の消息に依りて、資平、太皇太后宮（＝遵子）に詣向かふ。件の宮（＝四条宮）の西対に於いて、去夜、婚礼を行なふ。〔女十三。〕後朝使右衛門佐輔公に、〔高麗端暈を以て、座と爲す。今朝、御消息有り。予申遣はす所也。〕盃酒を勧むるの垣下と爲て招く所也と云々。内の御使の外、四位已上を招き、垣下（＝恒下）と爲すは、必ずしも然るべからざる事なり。亦、饗饌有りと云々。前大和守景齐（＝藤原）・左京大夫長経（＝源）及び五品等、多く会すと云々。一家（＝小野宮家）、過差無く、今、此の事有り。計之、後悔有る歟。

▼今夜、皇太后宮より退出するの間、資平、車後に侍りて云はく「今日、内の陪膳に候ず。仰せて云はく『近くに祇候すべし。』者り。仍りて御台盤の下に進候ふ。仰せて云はく『昨日の立后の事、無止く思す事也。而るに大臣より始めて諸卿参らず。大将藤原朝臣（＝実資）、召に応じ、即ち参入し、件の大事を行なふ。悦思ふこと、極無し。久しく東宮に在り、天下を知らず。今適、登極して意に任すべき也。然らざるの事、愚頑也。然るべきの時有らば、雑事を云合はすべきの

由、且は此の事を伝仰すべし。汝（＝資平）、外に漏らすべからず。又、大将漏らすべからざるの人也。汝、見る所有り。仍りて伝仰する所也。』仰せ了り、早く起ちて入り給ふ。」者り。余戒めて云はく「努力々々（努々力々）、妻子にも談すべからず。但し、明日、必ず陪膳に候じ、只、恐る由を奏すべき也。」希有の仰事也。

▼未剋許、慶僧正（＝慶巴）過ぎらる。良久しく清談す。

或云はく「今日、藏人朝任朝臣を以て新后に奉らる。被物有り。」と云々。冊命の後朝の御使歟。

⑩『小右記』長和元年四月卅日条（▼b）

▼a「三位中将（＝教通）の共の事」

▼b「主上（＝三条天皇）の立后の間の仰事」

卅日、丁卯。

▼^a季信朝臣（＝平）云はく「三位中将（＝教通）の共の近江守（＝知章）、乗車して相従ふ。其の外、五位八人・六位二人なり。」者り。

▼^b右衛門督「懷平」示送りて云はく「召に依り、今朝、参内す。立后の日の事を仰せらる。『公（＝三条天皇）の大辱爲り。皇后（＝城子）の爲ならず。上達部の冷淡（＝談）なること、仰尽すべからず。』者り。

『彼の日、早く参り行事す。尤も悦思ふ。伝仰すべし。』者り。『且つは資平を以て仰せしむ。』者り。食禄の身、王命に背き難し。素食の責、日夕、歎く所なり。

⑪『小右記』長和元年五月一日条（▼a）

▼a「主上（＝三条天皇）、立后の事に依りて悦思ふ事」

▼b「島の馬を馳する事」

一日、戊辰。

▼^a 参内す。太皇太后宮大夫公任・同宮権大夫行成・右衛門督懷平（々）参入す。公任卿、良久しく、聶（＝教通）の雜事を談ず。右衛門督云はく「昨今、御前に候ず。仰せられて云はく『立后の事、右大将（＝実資、召に応じ、参入して行事す。一に悦思ふ所、一にいとほしく（伊と保之久）なむ思ふ。憚恐るる所有りて、諸卿参らず。猶参りて執行なふ。此の由を伝仰すべし。』者り。奏するに恐申すの由を以てす。亦、談じて云はく『左大臣（＝道長）の所為、極めて奇怪也。諸卿同心し、朝威を失ふ。歎思ふこと少なからず。此の如き事に依り、命暫く保たむと欲す。』頗る思食す所有る歟。』者り。申剋に退出す。皇后宮大夫（＝藤原隆家）、陽明門の内に相逢ふ。

▼^b 馬頭（＝藤原兼綱）、允貞国を以て申さしめて云はく「島の馬を馳せむと欲す。諒闇の年、云々、定まらず。案内を承はりて進止せむ。」者り。能く前例を尋ね、又、左寮（＝左馬寮）に問ひ、左右すべきの由、報答し畢りぬ。

⑫『小右記』長和元年五月二日条（+1▼a）

▼a「除目の内覧の事」

+1「勸学院の衆、長者（＝道長）の命に依り、立后を賀するに参らざる事」

二日、己巳。

▼^a 大外記敦頼朝臣云はく「兩度、史奉親朝臣（＝但波）云はく『一日の除目、内覧有るべき歟。』者り。敦頼答へて云はく『未だ奏覧せざるの書を以て、内覧を経べき歟。除目に至りては、御前に於いて御覧する所、已に了る書なり。更に亦、奉らるべからざる歟。』奉親云はく

『前日、大納言道綱卿、承行なふ所の除目の清書、之を奉らる。』者

り。又、答へて云はく『若しくは家々の御説歟。』者り。吾答ふる所は、「奉親、無才多言にして、故実を知らざる者也。道綱卿、清書を以て、左府（＝道長）に奉るは、案内を知らざる也。不覚の人の例を引きて謗難する所は如何。還りて嘲るべきに似る。件の事、先日、四条大納言（＝公任）の御許より告送らるること有り。彼の納言（＝公任、則ち奉親に前例を知らざるの由を示す。適、故実を失なはずに行なふ所也。而るに謬言を以て謗難する所は至愚也。』示すべきの由、敦頼朝臣に含め畢りぬ。

+1 或云はく「勸学院、例に依り、皇后（＝城子）に御慶を啓せむと欲す。而るに先づ案内を長者（＝道長）に申す。参るべからざるの由を召仰せらる。仍りて参入せず。」と云々。

（注1）▼aの古記録本「至除目於御前所御覽已了、書更亦不可被奉歟、」を「至除目於御前所御覽已了書、更亦不可被奉歟」とするなど、読点の位置を変更した。

⑬『小右記』長和元年五月四日条（+1▼a）

+1「除目の執筆の間の蜈蚣、光榮（＝賀茂）を以て占はしむる事」

▼a「占串」（裏書）

▼b「雷鳴陣に参らざる事」

+2「主上（＝三条天皇）、中宮（＝妍子）の御方に渡御する事（公卿・侍臣、饗有り）」

四日、辛未。

+1 去月廿七日の除目の蜈蚣、昨日、光榮朝臣（＝賀茂）を以て占はしむ。占、裏に注す。

▼^a 御前に候じ、除目を奉仕するの間、八寸許の蜈蚣、硯を去ること

幾ならず北行す。心に、告徴を存す。神告を得むが為に、光榮朝臣を招きて占はしむること、左に注す。

占ふ。四月廿七日、甲子。時、戌を加ふ。河魁(×何魁)、子に臨むを、用と為す。将、玄武。中、伝送・天后。終、勝先・騰蛇。御行年、西、上に、小吉・天一。卦遇、元首。

之を推す。用、日財に起つ。御年は、上に、天一を見る。日財は、是、財を主る。天一は、是、天子を主る。又、天福為り。此を以て、之を言ふ。天子の福慶を蒙むるを主るの象乎。

寛弘九年五月三日 賀茂光榮

▼b「度縁請印」
隨身を差はし、参入せざるの事を蔵人の許に云遣はす。(所労有るの由なり。雷鳴に依る也。)

+2 昨日、初めて主上(三条天皇)、中宮(妍子)の御方に渡御すと云々。之に因り、左相府(道長)及び卿相数多参入す。皆、束帶。上達部・殿上人の饗饌有りと云々。往古聞かざるの事也。

⑭『小右記』長和元年五月十一日条(+1)

▼a「仁王經不断御読経の僧名定」

▼b「度縁請印」

+1「除目の間の蜈蚣、匡衡、会釈する事」

十一日、戊寅。

▼a 参内す。左大臣(道長)参入す。仁王經不断御読経の僧名を定申す。〈廿一口〉。左近中将経房執筆す。日時勘文を加へ、〈廿三日〉。頭弁(源道方)を以て奏せらる。即ち返し給ふ。右少弁資業(藤原)に下賜ふ。先づ僧名を結申す。次いで日時勘文。宣して云はく「廿三日。」次いで仁王經の由を仰す。畢りて史に仰せ、上(道長)の前の筥文并

びに参議(経房)の前の硯等を撤せしむ。

▼b「先是、参議頼定(定×、宣旨に依り、結政所に向かひ、度縁を請印せしむ。仗座を起ち、敷政門より出づ。皇太后宮大夫俊賢云はく「捺印すべきの度縁五百枚。」者り。治部(治部卿に依りて知る所歟。申剋許、罷出づ。)

今日参入する卿相(×相卿)、左大臣・太皇太后宮大夫公任・皇太后宮大夫俊賢・左衛門督頼通・皇后宮大夫隆家(早出す。事故有るに似る。皇后宮大夫の事に依り、左府(道長)の気色宜しからざる歟。隆家卿、怖畏の氣無し。侍從中納言行成・左近中将経房・左兵衛督実成・伊予守(伊与守)頼定。

+1 月に乗じて、式部大輔匡衡(大江)來たる。雜事を談ずる次に云はく「一日、召に應じて早参り、立后の事並びに除目の事を行なふ。極めて感思ふ所あり。」言ふ所太だ多し。敢へて記すべからず。其の次に、除書の間の蜈蚣の事を語る。蜈蚣を会釈して云はく「呉」の字は、天に、口を載す。『公』の字は、三公也。天口より出で、三公と為るべき歟。『呉』なれば、十二月を期とすること、疑始無かるべし。彼の日は甲子なり。物の始に、除目を行なはる。事始と謂ふべき也。亦、初めて皇后宮の除目を行なふ。『皇』は御門也。『后』はきさき(き佐き)なり。帝后「御門きさき」の相は、除目有る事の相を兼ね。亦、大夫の名(隆家、訓読して「いへをさかやかす(伊部平佐加や加す。』と云ふ。尤も興有る事也。」又、云はく「周公並びに呉公也。彼の家は周公也。予の家は呉公也。左右思慮するに、三公に昇ること、近くに在るべし。」者り。識者(匡衡)の言、後鑑の為に聊(×聊)か記置く所なり。件の匡衡、月來、食せず、恙(×恙)有り。而るに夜に隠れて來たる所也(著)。

【事例6】寛仁二年（一〇一八）藤原威子中宮立后

①『御堂関白記』寛仁二年七月廿八日条（▲A C）

▲A「太皇太后宮（＝藤原彰子）、尚侍（＝藤原威子）の立后を仰せらるる事」

▲B「相撲の拔出」

▲C「立后の日時勘申」

廿八日、戊子。

▲A「候宿す。早朝、宮（＝太皇太后宮藤原彰子）の御方（＝弘徽殿）に参る。

摂政（＝藤原頼通）、又、参る。宮仰せられて云はく「尚侍（＝藤原威子）、立后すべき事、早々たるが吉とすべし。」者り。余申して云はく「宮

（＝中宮藤原妍子）御座すに、恐申し侍る。是以て、未だ此の如き事を申

さざる也。」又、仰せられて云はく「更に然るべき事に非ず。同じ様

有るを以て慶思ふべき也。」摂政申して云はく「早く日を定めらるべ

し。」者り。慶の由を申して退下す。

▲B「未時、御出す。五番。東宮（＝敦良親王）参上す。其の儀、常の如

し。事了りて還御す。東宮、又、下り給ふ。太后（＝彰子）、御物忌に

依り、南殿に御さず。東宮、弘徽殿に着し、宮の御前に参入し給ふ。

供奉する公卿等を、殿の東廂に召し、酒肴を給ふ。本目の本意に非ず、

早卒の事也。突重等合はざる也。御衣を以て、公卿に給ふ。摂政の祿

は、左大将（＝藤原教通）取る。右府（＝藤原顕光）の祿は、我（＝藤原道長）

取りて云はく「子孫、□らるは堪へ難し（子孫被□難堪）。」と云々。興

の気色有り。我、着座せず。候ずる公卿廿一人に、御衣を以て、皆給

ふ。忽事に於いては甚大也。事了りて還御す。女方（＝源倫子）相具し

て退出す。中宮大夫（＝藤原道綱）・按察大納言（＝藤原齊信）・源大納言

（＝俊賢）、又、子等、摂政を初と為て来たる。自余の人々、五・六人

計来たる。

▲C「吉平（＝安倍）を召し、立后の日を勘へしむ。「十月十六日。」者り。

惟憲朝臣（＝藤原）を以て、定文を書かしむ。深更、人々退出す。

此の日、天陰るも、雨降らず。入夜、時々微雨降る。

②『御堂関白記』寛仁二年十月五日条（▲A C）

▲A「女御（＝威子）退出」

▲B「立后の兼宣旨」

▲C「女御の為の修善」

▲D「近衛御門（＝源明子）、法性寺五大堂に詣づる事」

五日、甲午。

▲A「女御（＝威子）、内より土御門に出づ。

▲B「未前、宿所（＝土御局）に候ずる間、經通朝臣（＝藤原）仰せて云は

く「女御を以て、后と為すべき日時、申定むべし。」者り。左大将

（＝教通）を以て、祿を授けしむ。「女装束。」承はる由を奏す。

▲C「亥時、筆を上宿所（＝土御局）に寄す。上達部、大納言以下十三人來

らる。上東門より出で、土御門の寢殿に御す。上達部・殿上人の座、

西対の唐廂に儲く。兩三献の後、殿上人の被物、例の如し。上達部に

為さず。内の女方十九人送來たる。典侍に女装束、掌侍に綾の褂・

袴、命婦に白褂・袴、藏人（＝女藏人）に白袴、授け了りぬ。

▲D「此の日より、心替を以て、女御の為に修善せしむ。

▲E「此の曉、近衛御門（＝源明子）、法性寺五大堂に詣づ。院（＝小一条院敦

明親王）、同じく参り給ふ。

③『日本紀略』寛仁二年十月五日条

五日、甲午。

弓場始。

今日、女御尚侍藤原威子、立后すべき宣旨を蒙る。上東門第に出づ。

今日、駒牽有り。

④『小右記』寛仁二年十月六日条（+2）4

+1「季武（＝水取）、原免せらるる事」

▼a「射場始」

+2「勅使（＝藤原経通）を以て、立后すべきを仰せらるる事」

+3「尚侍の退出の事」

+4「御書を女御に遣はす事」

六日、乙未。

宗相朝臣（＝藤原）を召遣はす。面して、季武（＝水取）の事を示す。若し一問を経ば、原免せられ難き歟。今年、殊に慎むべきの上、去る晦の夜、焚惑（＝火星）の変有り。「右大将、重く慎むべし。」と云々。仍りて密々に案内を宗相朝臣に仰す。朝臣（々々）云はく「別当（＝藤原頼宗）に申し、假を給はるべし。」者り。事理、故殺の者、假を給はるべからず。然而、殊に権議有り、優免すべき歟。従者の男の下手而已。

季武原免すと云々。

▼a 宰相（＝藤原資平）来たりて云はく「昨日申剋許、射場に出御す。大納言斉信（＝藤原）、中納言行成（＝藤原）・教通（＝藤原）・頼宗・能信（＝藤原）、参議兼隆（＝藤原）・道方（＝源）・頼定（＝源）・公信（＝藤原）

通任（＝藤原）、三位中将道雅（＝藤原）、参議（一）資平。大殿（＝藤原道長）並びに摂政（＝藤原頼通）、御後に候ぜらる。

+2 后位の事、藏人頭左中弁経通を以て、尚侍（＝威子）に仰遣はさる。

纏頭あり。

+3 今夜、尚侍退出す。諸卿、彼の直廬（＝上御局）に会す。入夜、大納言俊賢、中納言経房（＝源）・実成（＝藤原）、彼の直廬に参る。主上（＝

後一条天皇）渡御す。

一条天皇 渡御す。

亥刻、上東門より退出す。大殿並びに摂政・大納言斉信已下、車の後に相従ふ。皆、上東門より出で、上東門第に参る。饗饌有り。殿上人等、纏頭あり。

季武の事、別当に伝示す。别当（々々）云はく『件の事、気色に依りて進止すべし。未だ一問を経ざるの間に優免するは、亦、何事か有らむ乎。』初め仰する所、極めて奇怪也。〔者〕と云々。

+4 入夜、宰相来たりて云はく「今日、大殿に参る。大納言斉信・公任（＝藤原）、中納言、宰相、首を挙りて参入す。此の間、御書を女御の御許（々々）に給ふ。〔尚侍〕御使（＝源定良）。中納言已下通に勧盃す。事、未だ了らざるに罷出づ。』

季武の事、別当に伝示す。别当（々々）云はく『件の事、気色に依りて進止すべし。未だ一問を経ざるの間に優免するは、亦、何事か有らむ乎。』初め仰する所、極めて奇怪也。〔者〕と云々。

+4 入夜、宰相来たりて云はく「今日、大殿に参る。大納言斉信・公任（＝藤原）、中納言、宰相、首を挙りて参入す。此の間、御書を女御の御許（々々）に給ふ。〔尚侍〕御使（＝源定良）。中納言已下通に勧盃す。事、未だ了らざるに罷出づ。』

季武の事、別当に伝示す。别当（々々）云はく『件の事、気色に依りて進止すべし。未だ一問を経ざるの間に優免するは、亦、何事か有らむ乎。』初め仰する所、極めて奇怪也。〔者〕と云々。

+4 入夜、宰相来たりて云はく「今日、大殿に参る。大納言斉信・公任（＝藤原）、中納言、宰相、首を挙りて参入す。此の間、御書を女御の御許（々々）に給ふ。〔尚侍〕御使（＝源定良）。中納言已下通に勧盃す。事、未だ了らざるに罷出づ。』

季武の事、別当に伝示す。别当（々々）云はく『件の事、気色に依りて進止すべし。未だ一問を経ざるの間に優免するは、亦、何事か有らむ乎。』初め仰する所、極めて奇怪也。〔者〕と云々。

+4 入夜、宰相来たりて云はく「今日、大殿に参る。大納言斉信・公任（＝藤原）、中納言、宰相、首を挙りて参入す。此の間、御書を女御の御許（々々）に給ふ。〔尚侍〕御使（＝源定良）。中納言已下通に勧盃す。事、未だ了らざるに罷出づ。』

季武の事、別当に伝示す。别当（々々）云はく『件の事、気色に依りて進止すべし。未だ一問を経ざるの間に優免するは、亦、何事か有らむ乎。』初め仰する所、極めて奇怪也。〔者〕と云々。

+4 入夜、宰相来たりて云はく「今日、大殿に参る。大納言斉信・公任（＝藤原）、中納言、宰相、首を挙りて参入す。此の間、御書を女御の御許（々々）に給ふ。〔尚侍〕御使（＝源定良）。中納言已下通に勧盃す。事、未だ了らざるに罷出づ。』

季武の事、別当に伝示す。别当（々々）云はく『件の事、気色に依りて進止すべし。未だ一問を経ざるの間に優免するは、亦、何事か有らむ乎。』初め仰する所、極めて奇怪也。〔者〕と云々。

季武の事、別当に伝示す。别当（々々）云はく『件の事、気色に依りて進止すべし。未だ一問を経ざるの間に優免するは、亦、何事か有らむ乎。』初め仰する所、極めて奇怪也。〔者〕と云々。

季武の事、別当に伝示す。别当（々々）云はく『件の事、気色に依りて進止すべし。未だ一問を経ざるの間に優免するは、亦、何事か有らむ乎。』初め仰する所、極めて奇怪也。〔者〕と云々。

季武の事、別当に伝示す。别当（々々）云はく『件の事、気色に依りて進止すべし。未だ一問を経ざるの間に優免するは、亦、何事か有らむ乎。』初め仰する所、極めて奇怪也。〔者〕と云々。

季武の事、別当に伝示す。别当（々々）云はく『件の事、気色に依りて進止すべし。未だ一問を経ざるの間に優免するは、亦、何事か有らむ乎。』初め仰する所、極めて奇怪也。〔者〕と云々。

季武の事、別当に伝示す。别当（々々）云はく『件の事、気色に依りて進止すべし。未だ一問を経ざるの間に優免するは、亦、何事か有らむ乎。』初め仰する所、極めて奇怪也。〔者〕と云々。

季武の事、別当に伝示す。别当（々々）云はく『件の事、気色に依りて進止すべし。未だ一問を経ざるの間に優免するは、亦、何事か有らむ乎。』初め仰する所、極めて奇怪也。〔者〕と云々。

季武の事、別当に伝示す。别当（々々）云はく『件の事、気色に依りて進止すべし。未だ一問を経ざるの間に優免するは、亦、何事か有らむ乎。』初め仰する所、極めて奇怪也。〔者〕と云々。

季武の事、別当に伝示す。别当（々々）云はく『件の事、気色に依りて進止すべし。未だ一問を経ざるの間に優免するは、亦、何事か有らむ乎。』初め仰する所、極めて奇怪也。〔者〕と云々。

季武の事、別当に伝示す。别当（々々）云はく『件の事、気色に依りて進止すべし。未だ一問を経ざるの間に優免するは、亦、何事か有らむ乎。』初め仰する所、極めて奇怪也。〔者〕と云々。

季武の事、別当に伝示す。别当（々々）云はく『件の事、気色に依りて進止すべし。未だ一問を経ざるの間に優免するは、亦、何事か有らむ乎。』初め仰する所、極めて奇怪也。〔者〕と云々。

立つ後、渡殿の座に着し、盃を進る。

⑥『小右記』寛仁二年十月七日程(+124)

+1「一家三后の事」

▼a「行幸の日時勘申」

+2「行幸の日、御馬を馳すべき間の事」

+3「維摩講師の辞退の事」

+4「立后の日、始祖の大臣(藤原鎌足)の遠忌に相当たる事」

七日、丙申。

+1みのおわりばかり

已終許、大殿(道長)に参る。宰相(資平)、相従(々従)ふ。太閤(道長)、馬場に坐す。仍りて直ちに進む。工匠数多营造す。亦、石を立てらる。奉謁の次に、一家三后の事を申す。未だ曾て有らざる而已。

▼a 行幸の事を命す。「廿・廿二日(々二日)の兩日勘申す。廿日は、遠行を忌む。陰陽家、忌無かるべき由を申す。然而、廿二日は吉日なり。仍りて彼の日に行幸有るべし。」余申して云はく「主上(後一条天皇・太后(彰子)・東宮(敦良親王)、御すべき也。尚、優吉日を用ひしむるが、尤も善かるべき歟。」太閤云はく「太后、同輿し給ふべき行幸なり。即ち青宮(敦良親王)渡り給ふべし。」者り。

+2 又、御馬を馳せらるべき事を申す。命じて云はく「康保二年等の例に依り、競馬有るべからず。左右の御馬各十疋並びに駒各十疋、馳すべし。」者り。余申して云はく「当年、駒、馳せらるべし。而るに駒牽の御馬、馳渡すべきに非ずと云々。官馬の外、龍駒と云ふと雖も、他の蹄を以て、天覧に備ふるは、本意無かるべし。就中、御馬乗の官人已下廿人、然るべき者無し。極めて便無かるべし。之を如何為む。」

命じて云はく「最も然るべき事也。前例有るに依り、駒を馳すべきの事を略定する也。当日に臨み、左右馬寮、事由を奏せしむるが宜しかるべし。」者り。

+3ゆいまこうじ

維摩講師安潤の辞退云々を申す事、昨、彼是の卿相云はく「今日、辞退す。」と云々。余申して云はく「俄かに辞退有れば、専寺の僧を以て、宣旨を下さるるが便宜有る乎。」命じて云はく「然るべき事也。」余申して云はく「誰等の間乎。」命じて云はく「上臈と謂へば長保、下臈と謂へば経救・永昭等の間歟(口)。」者り。

小、時、入夜り、宰相(資平)来たりて云はく「摂政殿(頼通)に参る。維摩講師の安潤の辞書、之を進る。摂政、大殿(道長)に持参す。」と云々。

+4 安潤の辞退の事、扶公僧都の許より、之を告送る。

又、云はく「十六日、立后すと云々。彼の日、始祖の大臣(藤原鎌足)の御忌日。便無かるべき歟。大殿に洩達すべし。」者り。漏申すべき事に非ず。

⑦『御堂関白記』寛仁二年十月九日程(▲A)

▲A「御使の事」

九日、戊戌。

+Aよにいり 入夜、内より女御の方に、御使有り。藏人範国(平)。

⑧『小右記』寛仁二年十月十四日程(▼a c)

▼a「立后の日の参入の剋限」

b「大殿(道長)、馬を牽く事」

▼c「大殿、新后の大夫等を命せらるる事」

十四日、癸卯。

▼a「召使申して云はく「大外記文義朝臣（＝小野）申さしめて云はく『明後日の巳時以前に参入すべし。』」者り。〔立後の日敷。其の由を申さず。召使申漏らす歟。〕」

▼b「入夜、宰相（＝資平）来たりて云はく「今日、摂政（＝頼通）及び諸卿、多く大殿（＝道長）に参会す。冊余正の馬を牽かしむ。殿下（＝道長）・摂政・左大将（＝教通）の隨身等を騎らしむ。上下猥雑（×挿）し、宛も夢想の如し。」と云々。

▼c「四条大納言（＝公任）の御消息の状に云はく「新宮の大夫は按察大納言齊信、権大夫は新中納言能信。」者り。一昨、大殿命せらるる所也。

⑨『小右記』寛仁二年十月十五日条（▼b）

▼a「隨身に行幸の装束料を賜ふ事」

▼b「公卿等、立後の事に奔營する事」

十五日、甲辰。

▼a「絹十三疋、隨身等に賜ふ。〔番長は三疋、近衛は二疋。行幸の装束料。〕」

▼b「臨昏、宰相（＝資平）来たりて云はく「大殿（＝道長）に参る。卿相、首を挙りて参会す。東西奔營、終日、間無し。」と云々。

⑩『小右記』寛仁二年十月十六日条（+1）5、▼a（h）

+1「立後の事（女御威子）」

▼a「中宮（＝妍子）を皇太后と為す事」

+2「仰詞の相違に依り、太閤（＝道長、左大臣（＝顕光）を罵辱する事」

+3「実成卿、宣命使為るに依り、右大臣（＝公季）、列に立たれざる事

（父子の間）」

▼b「列立の事」

▼c「宣命宣制」

+4「宮司の除目の事」

▼d「大夫奏慶・下名」

▼e「啓陣」

▼f「御前の事」

▼g「本宮の拝礼」

▼h「本宮の饗」

+5「太閤（＝道長）の和歌の事」

+1十六日、乙巳。

今日、女御藤原威子を以て、皇后に立つるの日也。〔前太政大臣

（＝道長）の第三娘。一家に、三后を立つるは未曾有なり。〕小衰日に依り、諷誦を清水寺に修す。亦、僧等に読経せしめ、祈願を致す。又、

金鼓を打たしむ。

▼a「宰相（＝資平）同車して参内す。〔已二刻。〕卿相、未だ参らず。小

ありて、左・右大弁（＝道方・朝経）等参入す。日午、右大臣（＝公季）及び

諸卿参入す。藏人右少弁資業来たり、右大臣に仰せて云はく「中宮

（＝妍子）を皇太后に、女御威子を皇后に、其の宣命を作らしむべし。」

者り。即ち左大臣（＝顕光）参入す。右大臣、案内を左大臣「顕光」に

触る。即ち起座す。上臈参入の由を奏せしめむが為歟。

+2未だ左右の仰有らざるの間、左大臣、大内記義忠（＝藤原）を召し、

立後の宣命を進らしむ。即ち其の草を進る。彼是云はく「右大臣、已

に仰を奉はり了りぬ。縦ひ内々の仰有りと雖も、当日の仰に依り、宣

命の事を仰すべき歟。」〔或云はく「左大臣、仰を承はらず。皇后

〔賊子〕を皇太后にと、宣命を作るべきの由、内記に仰す。」と云々。

仍りて大殿〔道長、此の由を聞き給ひ、左大臣を罵辱せらるるの詞、

敢へて云々すべからず。〕太だ前例に違ふ。此の間、資業、宣命の趣

を左大臣に仰す。便ち資業に付し、草を奏せしむ。〔摂政に奉らるる

歟。午終未始歟。〕即ち清書すべきの由を仰せらる。清書、亦、

奏す。返し賜はり了りぬ。

宣命使の納言の事、資業を以て気色を候ぜしむ。〔大殿早参す。此

の如き事を与奪せらると云々。〕「右衛門督実成〔中納言〕奉仕すべ

し。」者り。右大臣云はく「子〔実成、宣命使為り。父〔公季〕、拜

礼を致すは、便無かるべき歟。」案内を申さる。仰に依りて列立せず。

近仗、中儀を服す。〔胡床を立てず、縫腋・壺胡録〔壺胡録〕等也。〕

此の間、宸儀〔後一条天皇〕、南殿に出御す。〔大殿・摂政〔頼通〕・右

大臣、南殿の簾中に候す。〕下官〔藤原実資〕及び諸卿、敷政門より出

で、外弁に向かふ。鳥曹司に於いて、靴を着して着座す。床子を立つ

るに、式筥を置かざるは、違例と謂ふべし。

外記を召し、大舍人・式部・彈正并びに刀禰の候不を問ふ。申して

云はく「皆侍り。」者り。早く列を引くべきの由を仰す。其の程〔

程〕幾ばくならず、承明・長樂・永安・建礼等の門を開く。〔右兵衛

は空陣。建礼門の西扉は開かず。仍りて左陣〔左兵衛〕開く。其の後、

右の官人・兵衛兩三、陣を立つ。内弁〔左大臣〕、舍人を召す。大舍

人称唯す。少納言惟光〔藤原〕参入す。余起座し、左兵衛陣〔宣陽

門〕の頭に進立つ。次第に列立す。惟光還出づ。召を伝へ、幔の後に

退入り、更に幔の東の頭に進立つ。上達部、左兵衛陣の南の頭に到

り、次第に揖して参入す。惟光、人毎に待ちて揖す。太だ奇怪也。前

例を知らざる歟。諸卿、標に就く。刀禰、只三人、列に立つ。〔四位

吉平〔安倍〕・五位吉昌〔安倍〕・文高〔惟宗〕、皆、陰陽家なり。〕

立定まり了りて、内弁、右衛門督を召す。称唯して参上す。宣命

を給はり、下殿し、軒廊の西二間に留立つ。〔北に退く。〕次いで内弁、

殿より降り、列に立つ。次いで宣命使、宣命の版位に就く。宣制兩

段。群臣、段毎に再拜す。了りて宣命使、左廻し、本列に復す。〔其

の道、直ちに南行し、列に復す。若しくは元道を経て、列に復すべき

歟。大臣及び上臈の列の上を度り、列に復するは、頗る便宜無し。前

例有〔るべし。大納言齊信云はく「兩説有り。」者り。〕次いで左

大臣已下退出す。〔大臣、幔の南を経るは、例を失す。余已下、入る

儀の如く、幔の北より退出す。〕鳥曹司に向〔問かふ。〕韉を脱ぐ。

東閣門より入り、陣に復す。右大臣、陣の壁後に在り。密語りて云

はく「内弁、須く刀禰を召すべし。而るに『侍従〔マウチ君達〕召

せ。』と宣る。大殿驚奇せらる。」と云々。

藏人頭定頼〔藤原〕、摂政の御消息を両府〔顯光・公季〕に伝ふ。

〔立後の宣命の事、藏人頭、上臈に仰すべき歟。重事に至りては、藏

人を以て仰せられ、軽事は頭を以て示さる。爰に頭は輕、藏人は重と

知る。左中弁経通、維摩〔後〕に参り、未だ帰らずと云々。〕兩府、即ち

彼の御宿所に詣でらる。小後、諸卿参入す。兩府・左大弁道方、摂

政の前に於いて、中宮の宮司〔々司〕を任す。〔大夫は正二位藤原朝臣

齊信〔兼。大納言・按察〕、權大夫は從二位藤原朝臣能信〔兼。權中

納言。〕亮は正四位下橘朝臣則隆〔兼。但馬守。〕、權亮は從四位下藤

原朝臣兼房〔兼。〕、大進は從五位下藤原朝臣公業、權大進は從五位下

源朝臣為善〔兼。三河守。〕、少進は藤原頼文〔兼。雅樂助。〕、權少進

は藤原〔一〕明通。大属は江沼元明〔兼。主計允。〕、少属は惟宗行政

【兼。木工属。】、権少属は為信【兼。主計属。】。左大臣、除目を笏に取副へて退出す。「大殿の命に依り、摂政の前に於いて、便ち清書す。事を早めむが為歟。」

左大臣云はく「啓陣の事を召仰せ。「早く罷出づべし。除目は、納言下給ふべし。」者り。彼是云はく「除目を給ふの後、啓陣の事を召仰せらるるの例也。」大臣諾す。外記を召す。宮に、除目を納む。外記に給ひ、陣に復す。已次、相従ふ。

此の間、斉信・能信卿、宣仁門より入り、階下を経て、射場に進みて奏慶す。「両卿は昇殿の人也。南殿を通り、射場に進むべき歟。」即ち元道を経て退出す。

左大臣、式部丞を召し、下名を給ふ。「[まうこ(万字古)]「[まけたまふ(万計給)]等の詞、誤無し。」

次いで膝突二枚を敷かしむ。六衛府の将・佐を召し、仰せて云はく「中宮の啓に侍れ。」[可仰]「啓陣に侍れ」と仰すべき歟。先づ左右の近、次いで左右の衛門。右衛門参らず。左兵衛佐惟任(藤原)、螺鈿剣を着す。太達違例なり。上達部、隠文帯・螺鈿剣を着するの例也。右衛門参らず。仍りて外記に之を仰せらる。」

次いで左右大臣已下、敷政門より出で、新宮(威子)に参る。「初め左大臣参るべからざる由を陳べらる。而るに忽ち其の詞を変へて参らるるは如何。俊賢卿云はく「今日、俄かに宮の少進を申さるるに、許容無し。仍りて忿怒して陳べらるる所也。」上官、御前(前驅)を奉仕すべき歟。其の由、俊賢卿に示す。答へて云はく「上官、思失なふ歟。」者り。大臣、敷政門より出づるの時、上官、御前を奉仕す。大臣留まるの例也。

左大臣已下、新宮に参着す。「[上東門院。]宮司・御傍親の卿相、

先に参る。」亮則隆朝臣を以て、事由を啓せらる。「[大夫云はく「先に参り、宮司の慶を啓せしめたりぬ。又、此の列に立つは如何。」者り。余答へて云はく「彼は宮司の慶也。此の度は、諸卿を引かれ、拝礼を致すべき歟。」俊賢卿、余の陳ぶる答旨と同じ。仍りて大夫・権大夫列す。』退出で、令旨を伝仰す。左大臣已下、西中門より入りて列立す。〔西上。〕侍従列せず。再び〔拜〕催さしむるも、遂に参列せず。

〔太閤(道長)、御簾に於いて、数度高声に催仰せらる。〕拜礼了りぬ。

次第に東対に着す。〔母屋。北上对座。上古は廂の座と云々。侍従は南の母屋の廂、西上北面。五位侍従は南廊に在り。〕件の対は、簾を懸けず。四尺の屏風を立て、高麗端畳を敷き、茵・円座を敷かず。侍従の座は、紫端畳を敷く。先是、皆、饗を居う。〔机。〕一献。

〔摂政、大夫斉信。〕二献。〔左大将教通、権大夫能信。〕三献。〔皇太后宮権大夫経房、左衛門督頼宗。〕一献、勧盃了り、摂政着座し、皇太后宮大夫道綱着座す。〔道綱卿、腰痛を称して参内せず、直ちに宮に参る。〕五・六献、上達部勧盃す。此の間、采女、御膳を供す。

了りて菅円座を南面の簀子〔御前。〕に敷き、公卿を召す。摂政已下参入して着座す。次いで衝重を居えたりぬ。太閤、盃を執り、上頭に進居す。摂政、座を避け、右大臣に向居す。已に行酒の道無し。地下を経て、南階より昇る。便に用ふる歟。次々の勧盃の人、已に其の道無し。仍りて衝重を撤す。南階の東腋に、座を敷き、伶人を召し、衝重を給ふ。卿相・殿上人等絃歌す。人々相応じ、堂上・地下、糸竹同声す。三・四巡の後、太閤戯れて云はく「右大将(実資)、盃を我が子〔摂政也。〕に勧むべし。」余、盃を執り、摂政に勧む。摂政(々々)、左府に度す。左府(々々)、太閤に献る。太閤(々々)、右府に度す。次第に流巡す。次いで禄を太閤已下に給ふ。〔大樹。〕

太閤云はく「祖の子の祿を得るは有るや。」と。又、伶人に祿を給ふ。太閤、下官（＝実質）を招呼びて云はく「和歌を読まむと欲す。必ず和すべし。」者り。答へて云はく「何ぞ和し奉らざらむ乎。」又、云はく「誇りたる歌になむ有る。但し、宿構に非ず。」者り。「此の世をば我世とぞ思ふ望月の虧けたる事も無しと思へば。」余申して云はく「御歌、優美也。酬答するに方無し。満座、只、此の御歌を誦むべし。元稹の菊詩、居易（＝白居易）和せず。深く賞歎す。終日、吟詠す。」諸卿、余の言に響心し、数度吟詠す。太閤和解し、殊に和するを責めず。夜、月明深し。酔を扶け、各々退出す。

今日参入する卿相、内大臣（摂政）・左大臣・右大臣・皇太后宮大夫道綱・余・中宮大夫斉信・太皇太后宮大夫俊賢・左大将教通・左衛門督頼宗・皇太后宮権大夫経房（×方）・中宮権大夫能信・右衛門督実成・伊予守兼隆・左大弁道方・右兵衛督公信・修理大夫通任・右大弁朝経・侍従資平。大納言公任・中納言行成参らず。故四条（＝藤原遵子）の宮司に依り、避くる所有るに依ると云々。左兵衛督（＝頼定）、煩ふ所有りて参らずと云々。

⑪『御堂関白記』寛仁二年十月十六日条（▲A（K））

- ▲A「立后の事」
- ▲B「内弁を改むる事」
- ▲C「宣命の草・清書」
- ▲D「宣命宣制」
- ▲E「宮司の除目」
- ▲F「本宮の拝礼」
- ▲G「本宮の饗」

▲H「御調度の勅使」

▲I「冊命の勅使」

▲J「典侍等の女房参入する事」

▲K「太皇太后宮（＝彰子）の御使」

▲A「十六日、乙巳。
此の日、立后の宣命有り。時は午。」

早朝、摂政（＝頼通）来らる。然るべき雑事を行なひ、大内に参る。示して云はく「余（＝道長）、参る事、遅々すべし。早く行きて具へ、相待たるべき者也。」

▲B「午時、左大臣（＝顕光）遅参す。仍りて右大臣（＝公季）、宣命の事を承はる。即ち左大臣参入す。右大臣、此の由を奏す。左大臣、本目、之を承はる。仍りて改仰す。」

▲C「草・清書等を奏す。」

▲D「了りて南殿に御出す。内侍、檻に臨む。左大臣参上す。開門す。關司、座に居す。次いで舍人を召す。少納言（＝惟光）進む。仰す。

「大夫達召せ。」須く「刀禰」と召すべし。是、大失也。次いで公卿・侍従列立す。右衛門督藤原朝臣（＝実成）を召す。参上す。宣命を給ふ。其の儀、常の如し。了りて退出す。右大臣、列に立たず。右衛門督の使爲るに依る也。簾中に候ず。還御す。余、即ち退出す。

▲E「宮司の除目、摂政の宿所に在りと云々（々×）。」「両大臣（＝顕光・公季）来らる。」者り。

▲F「自余の事行置く。先づ摂政参る。次いで大夫（＝斉信）・権大夫（＝能信）・亮（＝則隆）等、慶の由を啓す。次いで諸卿参入す。亮則隆を以て、慶賀の由を啓せしむ。即ち御椅子に着す。（理髮。草鞋を着す。）諸卿列立す。（西上北面。）再拝し了りぬ。」

▲G 東対の座に着す。女方、皆、理髪す。五・六巡の後、采女、御膳、東北の渡殿（殿×）の簀子並びに寢殿の東・南の簀子を経て、之を供す。御大盤。〔台を加ふ。〕

女方八人理髪し、昼御膳を供する料の大床子、之を供す。供し了り、御髪を理へ乍ら、之に着す。後に、円座を簀子に敷く。上卿を御前に召す。衝重を給ふ。又、階下に、伶人を召す。数曲。数献の後、禄を給ふ。大掛一重。此に於いて（於■此、余、和歌を読む。人々、之を詠ず。事了り、分散す。

▲H 御倚子は、掃部寮、之を供す。毯を加へざるに依り、家に候ふもの、之を用ふ。大床子は藏人所より、御挿鞋は内藏寮、之を供す。余、内より出づ。御倚子・大床子を立てしむ。御倚子は、昼御座を撤し、之を立て。大床子は、御帳の東に立つ。大床子の御使藏人頼宣（＝藤原）、禄を給はる。綾の掛・袴。

▲I 内（＝三条天皇）より（□）、定頼朝臣、御使に参る。宣命有るべき由なり。簾の前に召し、大掛・袴を給ふと云々。

▲J 此の曉、内の御乳母修理（＝藤原基子カ）・宰相（＝藤原豊子）等の典侍参入す。修理典侍は、御髪を理ふ。宰相典侍は、陪膳を奉仕す。送物は、各銀の小宮一双。薫香を入れ、銀枝を付す。火取。銀の籠を加ふ。各、地蒔の螺鈿。蒔絵の細櫃。女装束を入る。〔縫はず。裏在り。〕永絹、各十五疋。退出するに、車に入る。参入の掌侍は、女装束・絹七疋。自余の女方は、白の掛・袴・絹五疋。髪上・緞・御額の者は、白の掛・袴・絹三疋。我着する柏等、之を給ふ。留候する摂政以下、之に応ず。吉志命婦と云ふ者、古きは、只、是一人也。自余の者四人は、掛一重・絹二疋。采女は、白の掛。

▲K 太皇太后宮（×皇太后宮（＝彰子）より、御使と為て、亮左近衛中将兼

綱（×経）（＝藤原）、御額並びに御装束を奉らる。綾の掛・袴を給ふ。即ち、之を着す。皆、白なり。

⑫『左経記』寛仁二年十月十六日条（※12、▽a）h）

▽a 「南殿の装束」

▽b 「宣命の草・清書」

▽c 「陣を引く事」

▽d 「宣命宣制」

※1 「摂政（＝頼通）の直廬に於いて宮司を補する事」

▽e 「啓陣」

▽f 「本宮の拝礼」

▽g 「本宮の饗」

※2 「藏人方の御物の事」

▽h 「太皇太后宮（＝藤原彰子）の御使」

▽a 上文 南廂、西第三間より六間に至り、之を立つ。母屋の南に副へて立つる也。卯・酉、妻と為す。又、第六間の御簾に副へ、殿の北障子に至（×ま）り、数帖を立つ。子・午、妻と為す。第三間の西に、一帖を立つ。子・午、妻と為す。〔已上、五尺（×）の馬形の御屏風。〕御屏風の内に、広・長筵等を敷満たす。中間に、大床子二脚を立て、御座（×簾）と為す。〔移代・鎮子等有り。〕御帳の戌亥の方の障子の下に、御屏風を立て廻らす。其の中に、御倚子を立て、御装束所と為す。〔凡そ相撲の装束の如き也。〕同じ廂の東第三間に、兀子を立て、内弁の座と為す。〔南中央に廻らし、之を立つ。〕又、階下に座を敷く。次いで主殿に仰せ、宜陽殿の御座の蓐の上に、幔を懸く。兼ねて又、軒廊の北庭、弓場の南、右近陣の前の棚（×棚）等の庭に、幔

等を立つ。次いで中務、宣命の版位を置く。「尋常版の北一許丈。」次いで式部、公卿以下の標を庭中の左右に立つ。「(件の二省、日華門より入る也。)」

次いで右大臣(＝公季)、陣座に於いて、藏人右少弁資業をして、宣命の草并びに清書等を奏せしむ。「此の間、左大臣(＝顯光)参らる。仍りて事由を奏せらるるの後、内弁の事、左大臣行なはる。」「

群卿、外弁に着せらる。午刻に及び、御出す。左右近の將曹各一人、中・少將以下を率ゐ、日・月華兩門より陣す。南階の東西に、陣を立つ。諸陣、中儀を服す。中・少將等、縫腋・壺胡錄(壺胡錄)・靴等を着(着)。す。

次いで内侍、檻に臨む。内弁、兀子に着す。「(先づ、青璣門(＝青鏤門)の内に於いて、靴を着す。宣命を笏に副へ、東階より昇る。経るに簀子の南(＝画)を以(＝北)てし、之に着す。」「次いで左右近衛將曹各一人、近衛各八人を率ゐ、南に趨り、承明(＝永明・長樂・明)永安等の門を開く。「(左右近衛各二人陣す。長樂・永安兩門に、陣を立つ。」「左右兵衛、建礼門を開く。次いで閤司二人、殿の西より出で、承明門の左右の腋(＝塾)の草塾に着す。次いで内弁召す。宣る。「刀禰召せ。」「少納言(＝惟光)称唯(称)して退出す。門前の幔の東の妻を経て、幔の外(＝出)に立立ちて暫く休む。此の間、諸卿、外弁の座に立ちて列立す。少納言、門の南の壇の下に還立つ。王卿を召し、幔の外に還立つ。王卿以下、次第に南庭の標の下に参列す。次いで内弁、宣命使を召す。「(右衛門督(＝左衛門督)(＝実成)。」微かに称唯(唯)し、列を離る。軒廊の東二間并びに東階・南の簀子を経て、内弁の後方(＝頗る西面に倚る。)」の翼の方に立つ。内弁、左手を以て、宣命を給ふ。宣命使(々々使)、笏を挿み、宣命を給はる。右廻して退下

す。暫く、軒廊の西第二間の北辺に立つ。内弁起座す。簀子并びに軒廊の東二間を経て、庭中の標の下に立つ。次いで宣命使、廊の西二間を経て、南に行く。日華門の北扉に当たり、南に面し乍ら揖す。更に西に折れて行き、版位に立ちて揖す。右手に、宣命を持ち、「(胸に当てる。)」右に寄せ、宣命を開きて挙ぐ。宣制一段。群臣再拜。又、一段(＝)。再拜し畢りぬ。「(奏宣命奉、宣制一段、群臣再拜、又段、再拜了)宣命を巻き、笏に副えて揖す。左廻し、列の西の弁・納言の後を経て、本の位に帰立つ。公卿以下、一々退出す。次いで還御す。」「

次いで摂政(＝頼通)の御直廬に於いて、除目有り。「(宮司(＝官司)等を任ぜらるる也。左右大臣(＝顯光・公季)并びに執筆の左大臣(＝道方)許候ぜらる。自余の人々、便所に候ぜらるる。」「畢りて上卿以下、左仗の座に帰着す。式部を召し、下名を給ふ。」「

次いで陣の官人に仰せ、膝突を敷加へしむ。外記に仰せ、諸衛の官人等を召す。「(將(＝時)・佐等参る。)」中宮(＝藤原妍子)に啓陣参るの由を仰す。」「

次いで諸卿、侍従等を率ゐ、中宮に参る。「(午時。御簾□□御殿。)」西中門の外に於いて、宮司(＝橋則隆)をして事由を啓せられしむるの後、庭中に列立す。「(王卿一列。侍従、列せず(＝)。西上北面(＝東上北面)。」)拜し畢り、一々着座す。」「

一献。「(撰政殿。瓶子は権亮兼房。大夫(＝齊信)。瓶子は余。)」二献。「(左大将(＝教通)。権大夫(＝能信)。)」三献。「(左衛門督(＝頼宗)。皇太后宮権大夫(＝皇后宮権大夫)(＝経房)。」次いで汁物を供す。」「

五・六巡の後、召引有り、南の縁に着せらる。次いで衝重を着す。又、階下に、座を敷く。絃管の人々を召す。「(同じく衝重あり。)」御延年有り。数盃の後、禄有り。「(諸卿は大褂。四位の侍従は正絹。五位

は綿。繕（×僂）はず。」事^{こと}了り、上下分散^{かんさん}す。

右の饗の座、東台の母屋に儲けらる。「北上対座。赤木^{あかぎ}の机。」四位侍従は東廊。「北上。東西（×画）対座。」同じ台の東廂に、殿上人の座を儲けらる。

※² 今朝、使の藏人式部丞藤頼宣、御物等を中宮に奉らる。師子形（×頭）二頭、〔件^{くだん}の物、故女院（＝詮子）より渡さると云々。大床子二脚、掃部寮（×宮）。仍りて渡さるる也。〕平文倚子一脚、〔布端。〕御挿鞋一足。〔高麗。〕

又、大宮（＝藤原彰子）より、使兼綱朝臣（×高綱朝臣）、額^{ひたい}を中宮に奉らると云々。御使等、皆、被物有りと云々。

〔注1〕東山御文庫本および『大日本史料』による。以下同じ。

⑬『日本紀略』寛仁二年十月十六日条 十六日、乙巳。

宣命あり。皇后藤原妍子を以て、皇太后と為す。女御正二位（×従一位）藤原威子を以て、皇后と為す。即日、宮司を任ず。中宮と号す。

⑭『小右記』十月十七日条（+1）

▼a「大殿の目、殊に見えざる事」

+1「御書の勅使（＝藤原公成）、宮に参る事」

▼b「本宮の饗」（頭書）

十七日、丙午。

▼^a 晩景、宰相（＝資平）同車し、中宮（＝威子）に参る。泉渡殿に於いて、大殿（＝道長）に奉謁す。摂政（＝頼通）及び諸卿参集す。大殿、清談せらるる次に、目見えざる由を命す。「近則、汝（＝実資）の顔、殊

に見えず。」申して云はく「晩景と昼時とは如何。」命せて云はく「昏時・白昼に因らず、只、殊に見えざる也。」

御書の勅使右中将公成（＝藤原）、先づ畳・茵を南面の簾の前に敷く。権大夫能信及び近習の卿相、酒を勧む。此の間、秉燭に及ぶ。先是、卿相・殿上人等着座す。御書使、御返事・纏頭を取りて退出す。大殿呼び、殿上人の座に着し、食に就かしむ。三・四巡の後、事了りぬ。〔戌刻許。〕

参入する人、摂政、大納言齐信・俊賢、中納言行成、〔昨日以前、皇太后権大夫参らず。彼の大夫人任云（×三）はく「今日、参るべからず。」者り。親と疎との間敷。〕教通・頼宗・経房・能信・実成、参議（一）兼隆・道方・公信・通任・資平。

▼^b 頭書
今夜の巡行、大殿、下官（＝実資）に給ひ、摂政に奉らしむ。次々、例の如し。

⑮『御堂関白記』寛仁二年十月十七日条（▲A）

▲A「本宮の饗」

十七日、丙午。

▲^A 上達部・摂政以下多く参る。東対の廂に、饗を儲く。右近中将公成、御使に参る。座を敷き、之を召す。一兩献の後、殿上人の座に着す。又、之を召す。御返事並びに禄を給ふ。織物の掛・椅。

⑯『左経記』寛仁二年十月十七日条（※1）

※1「勅使の事」

十七日、丙午（丙午×）。

※¹ 参内す。次いで中宮（＝威子）に参る。内（＝後一条天皇）の御使有り。

「權中將公成。数盃の後、禄有り。」次いで上達部・殿上人に、儲有り。

⑰『左経記』寛仁二年十月十八日条（※1）

※1「第三夜」

十八日、丁未（丁未×）。

※1 雨降る。晩景、大殿（＝道長）に参る。上達部・殿上人の饗、去夕の如し。事、晩に及び（×及事晩）、主殿の官人以下立明の者を御前に召す。疋絹等（ひけん）を給ふ。卅余人と云々。

⑱『小右記』寛仁二年十月十九日条（▼a）

▼a「昨日の本宮の饗」

▼b「馳馬奏の事」

十九日、戊申。

▼a 宰相（＝資平）来たりて云はく「昨日、中宮（＝威子）に参る。饗饌、一昨の如し。卿相参入す。大殿（＝道長）・摂政（＝頼通）、饗の座に出居す。」

▼b 右馬頭輔公（＝藤原）来たりて云はく「馳すべきの御馬六疋なり。

其の外は極めて異様なり。但し、代馬を立てむと欲するに、便無かるべき由、大殿の命有り。交易の御馬の同じ毛の馬を以てす。只、交易のム毛と載するは如何。此の由、昨日、大殿に申す。命じて云はく『何すべきの事乎。』者り。今日、案内を申す。進止すべきの由、答報じ了りぬ。』奏（＝馳馬奏）の事、当日、御監・頭・助等の署を加ふ。時刻推移し、明後日署し了るが宜しかるべきの由、之を仰す。件の奏、騎者を載すべからず。競馬の時、乗人・走馬（×徒馬）を注す。古の奏案に、出見さしむ。「件の事、大殿、鬱の御氣有り。」者り。仍りて奏

案等、覽じ了らば、持来たるべきの由を示し訖りぬ。

⑲『小右記』寛仁二年十月廿日条（+1）

+1「氏院（＝勸学院）の衆、中宮（＝威子）に参賀する事」

+2「行幸の召仰の事」

廿日、乙酉。

+1 早旦、宰相（＝資平）来たりて云はく「今日、勸学院の衆等、中宮（＝威子）に参り、慶を申すべしと云々。仍りて参入す。」者り。

⑳『御堂関白記』寛仁二年十月廿日条（▲A B）

▲A「啓陣終了」

▲B「勸学院歩」

▲C「行幸の召仰」

廿日、己酉。

▲A 中宮の啓陣帰る。佐に掛一重、左衛門尉宗相（＝藤原）に単重、六位の尉・志・府生に各疋絹（×見）、舍人に例の祿。

▲B 勸学院の衆参る。東廊に、座を儲く。庭中にて拝礼す。少（×小）し東に寄りて着座す。上達部勸益す。

▲C 此の日、行幸の召仰あり。源大納言（＝俊賢）、之を行なふ。

㉑『日本紀略』寛仁二年十月廿日条

廿日、己酉。

勸学院の学生、皇后宮に参る。

②『小右記』寛仁二年十月廿六日条（▼a）

▼a「山階寺の慶賀の事」

+1「新后（＝威子）の入内の事」

▼b「入内の出車の事」（頭書）

廿六日、乙卯。

▼^a 山階（＝興福寺）の権別当僧都（＝扶公）来たりて語る次に云はく「晦

日、山階寺、中宮（＝威子）の御慶を申すべし。」

+1 西剋許、召使来たりて云はく「外記国儀（＝高橋）申して云はく『今

日、中宮行啓す。供奉すべし。』者り。所勞を称して参らず。

たそがれ 黄昏、宰相（＝資平）来たりて云はく「行啓に供奉す。」者り。余、

行幸より以後、痔病重く発る。行啓に扈從すること能はざるの事、左

將軍（＝教通）に達すべきの由、宰相に含め了りぬ。大殿（＝道長）に達

せしめむが為也。今朝、痔重く発る。重ねて頭弁經通の許に示遣はし

訖りぬ。

▼^b（頭書） 今夜、新后、内裏に入り給ふ。出車を奉る。

③『小右記』寛仁二年十一月廿九日条（+1）

+1「山階寺の僧、中宮に慶を啓せしむる事（時に、禁中に御す）」

廿九日、丁亥。

+1 山階寺の権別当僧都（＝扶公）来たりて語りて云はく「昨日、山階寺

の僧等、中宮に御慶を啓せしむ。玄輝門の外に於いて、禄を給はる。」

者り。